

に蝙蝠傘の中に刀を藏して所持せずと窺ひ見て只者ならじと驚きし折から此邊りを巡行なす時
 部補寺本義久に告訴せしよぞ寺本乃ち同僚河合好直木村清三黒野巳之助等と河岸の棧橋に至り
 て其姓名及び事由を問ふに久茂等船中におりて何か密めき嘯き居たること稍久し頓て覆ひし管
 を掲げ罵りながら此を以て返答せんと四五人露はれ出るよと思へば一刀を抜手も見せず先に立
 たる寺本義久に祈て菟を不意と打れし義久は深痛を負ひてよろめきながら須臾の挑み戦ひ
 しが初めの重傷に拳も亂れ又も痛を負ひ闘ふ能はず終に倒れて死したりける此時其餘の巡査等
 も突を先途と戦へども渠の多勢の事なるゆへ連も勢ひ敵し難くして河合木村の兩人も遂に其場
 に斫仆され獨り黒野の淺病なれば爰にて俱に死しされば暴徒と逃して後悔あらんと疾も暮へ報
 せしかば忽ち警部巡査數人駆付しに渠等のはやく小舟に乗りて逃れて思案橋に居らざれば數十
 名の巡査等八方に手配りして普く水陸を探索せし人あり告げて榮久橋の邊りに一の怪しき小
 舟ありとすの走り行き夫と見るより巡査等の數艘の小舟又打乗て追蒐來て小舟を取圍みたる
 に此舟にの果して久茂等四人の兇徒等乗組居たる其中に久茂は初め思案橋にて戦ふとさ深痕を
 負ひしゆへなるか今更警吏に抗ふとせざる尋常に縛せられ其餘も共に縛せられ其中にて中根米
 七と言ふ者のみ天網を脱れ所々に潜伏して居たりしが明治十年薩地於て西郷隆盛の騷亂の時
 之に加はりて一方の隊長たりしが後討死したりといふ○前原一誠 萩を襲ふ○前原原の豫く評
 議の如く明倫館と發して須佐に至るの沿道も頻りに同志と募り船路を東京に趣かんとするに海
 上風穩かならざれば暫く躊躇に及べる折りも萩の謀の者より告來る趣きにて關口縣令に來
 りて同盟の者の妻子等捕へ我財物と掠めなば頗る凌辱を極めるとの報知せり蓋は前原の密計
 にて諸士を激せんと詐りしと知らざれば各大に怒り先上京の後よそるとも一度萩に進軍して

縣吏等と屠りて勝に乘じて山口を襲ひ防長二國と攻め取て後上京するとも遅かるまじと言ふ前
 固武士等の前原の計りし術計又符合して一誠大に喜び然らば是より引返し渠等が不意を撃んと
 て賊の一將 奥平左織を斤候隊と号け兵數十人を率へしめ先小進め前原等の少し後れて出帆し
 萩をさしてぞ急ぎたる是十月三十日の事あり是より先關口縣令の前原一誠が萩を撃ると聞き
 傳へ急に之を廣島鎮臺の兵營に報知して出兵を請求し乃ち鎮臺兵と二中隊萩の街道へ進しめ縣
 令も又二中隊を率て廿九日の夜佐々波の驛まで至られしに兇徒は上京すべきの書を明倫館に
 遺し置き退きしとの聞へゆると以て警吏を各處に出して舉動を探偵做さしめ縣令の進んで明木
 まで至られ民心を安堵せまめん爲め市中の中三ヶ條に掲げし告示を出せり其一と賊を擯めん爲め進軍せ
 しと其二と暴徒に脅從せし者といへば悔悟自首せば寛典又處する事其三と賊を加はり罪ありと
 いへども其妻子に於ては異心なければ罪せずと斯の如く示されども尙も野心の者ありて
 銜かに前原等に兵器彈藥を送ふんと計りし者も有りしかば是等も總て捕縛したれども未だ一誠
 等の踪跡を確に探り得ず人心穩かならず是より先奥平左織の一手と既に三十一日の雲に萩
 の城下に程遠からぬ越が濱に來りしに未だ後隊の至らずと雖も折から曉霧深くして咫尺も見へ
 ざる程に不意に敵と襲ふに折り好しと思ふにぞ其手の兵士等上陸して區の扱ひ所に縣吏等が
 會合せしと察せし故直ちに其術を襲ひ砲發に及びたりしかば其時縣令は此に在りて公務を談
 する傍にて朝飯を喫せんと箸を取らんとする折柄俄に砲聲を聞きて驟り立ち箸を投てすと
 言ふ間も彈丸の室内に飛入るよぞ一時大に狼狽して痕を負へる者掛からず先縣令にも彈丸を
 避けて然して事を計らんと屬官四五名と率へて問道より出て金谷の間に架りし大橋を越えて脱
 れんとするに賊兵既に河岸に廻りて烈しく銃砲を發れば詮術なきに酒庫へ身を潜めて彈丸を避

け居たるは此時諏訪大尉鎮臺兵士等に有合ふ疊を積重ね之と橋と倣して大に暴徒と撃合ふたるに諏訪大尉の身に數ヶ所の瘡傷を負ひされ少しも屈する氣色なく兵士を指揮して居られしが到底這所にて防戦するの射方に取て不利なきに此上の民家に火を放ち一先此場を引揚げて再撃と計るに如なしと夫等の準備を取掛る体と見るよりも縣令の然らば我等も俱に退去あると庫を出て彈丸の下を潜り抜け諏訪大尉の許に駈入るを諏訪大尉は先づ恙なきと喜びて見らるる如く河岸の向ひに官兵の固めとなせば君が此橋を渡らるると若し官兵が敵と視認て狙撃なさんも測られねば身職導き參らせんとて諏訪大尉の縣令の先に立て道を開き大橋の半途まで見送ると又取て返し兵士等を指揮して激引になん引上るを賊徒の伏兵あると思ふにや長驅もせで止しとぞ初め奥平左織が先隊の舟の疾く着岸せしにぞ不意に起りて襲ひし故官軍一たび勝利を失へども豫く明倫館の火藥藏に彈藥の備へあるを知りこれを奪ひて用以宛んとせしを官にて其機を察せられ彼彈藥を水中に盡く投入れたる故用ゆるを得ず其目算の外れしより彈藥甚だ乏しくして去程に官兵の死傷の者も甚かりしが次の日は早天より大橋迄進み昨日の耻を雪がんと川を隔て、砲撃なると烈しかりしが暴徒もこきに應て激戦なすに互に手を負ふ者も多し此日も勢敗を決するに至らる兎角するうち陸軍少將三浦梧樓大兵と率へてもはや山口まで出張ありとの風聞ありしかば道の前原一誠も今のや英氣も挫けて衆に向ひて嘆息なし拙者多年素志を遂んと百方心を悩まして事ならざるは時運然らしむるにや敵に備への整ふ上のはや山口へ攻入りて威を中國に震ばんも今の中々以て及ばぬゆへ我も大丈夫の一人なれを素より命はなき物と思ひ定めてせし事なれば卒や最期の一軍も適れ戦ふて死せんといへば横山奥平等もみな曰く然りと點頭くとき一人は壯士進み出で面と正しいへるやう這の前原先生も似合ぬ言

抑今般我輩の事を起すや徒官兵と戦ふて討死にすべきの趣意ならず爾るを空しく戦死して亂臣賊子の名を流すは遺憾の至りなり然りとて我等の此場に臨み生と貪るべきにあらす踏止まりて飽まで敵と戦ふて死を一旦に決すべければ君方は此地と股し如何もして麓下に至り宿志を忠告せられし上ならべ死ととも無益に屬せずと言にぞ一誠等横手を打ち兄弟等が意見感服せり則ち奥平謙補横山俊彦山田頼太郎佐瀬一清馬木空の五名等と十一月一日の夜再び須佐へと走り出雲路なん出帆せり茲に三浦陸軍少將の前原等が雲州地方へ走りると察知せられ田附少佐をして廣島の兵三中队を率ゐて賊の趣く海岸の通道を絶しめ是迄の官兵に大坂鎮臺を加へて萩にあり賊徒と襲撃せしめ且つ軍艦とも謀じ合せて三面より挟み打ちになさんとの準備に及びて既に六日早天より三浦少將自ら出陣して撃て死るに素より膝合したる事をなす賊兵必死となつて苦戦すれども陸地の寄手も多かりし上王江菊が濱鶴江惠比須が鼻なる四箇所を廻りたる軍艦より大砲を打ち如何なる兇徒も今の詮術なく爰にて戦死をなすもあり逃るるもの黒川大井口を指て敗走して縛せらるるも少からねばものや賊の跡を斷ち官軍は輒く萩に入りたりしかば縣令則ち揭示して市民に平定を知らしむるにぞ人皆安堵の爲したれども前原等の未だ行方と知らざれば如何あらんと思慮せしに一誠等の須佐を出帆せし石州津和野の沖に於て風波の爲に漂ひて同月三日辛ふじて出雲の國宇龍港小船を寄たるに二人の當工等は薪水と索めんとて上陸し意外の日間の掛りしに打案して居たりしが徒らに爰にて心配なさんより寧ろ上陸して渠等を尋ね見んと奥平謙補は前原の下僕一人召連て上陸せしが此兩人も亦其儘に歸り來す是に於て前原等は深く疑ひ彼水夫等の反心なまて他へ逐電せし奥平と林藏が逃すべしとよもあるまじと若し捕縛せられたらんかど果して縛せられなば今にも此舟へ追捕に向ふべしと残りし前

原等の頻りに頼り集めて評議を凝し空く時日を送る折しも是より先き當所の警察へは豫て三浦少將より前原以下の兇徒等が此地に逃れ至らんも測り難しとの報知ありたるにより各地の海岸も出張して居たりし折柄二人の水夫の上陸せしを縛し又奥平兩名が夜中竊かに上陸なせしも怪しみて捕縛せしにより前原等の此海岸に着船したるの彼等の白状にて能く知りたれども妄りみ迫りて捕へんとせし素より銃器と携へられ尋常にての縛に就くまじ先彼舟さへ逃さされば囊と物を探るがごとしと因て縣廳にては當島根縣の十二等出仕清水清太郎の舊長州藩にての家老をも勤めし者にて兼て前原等と相識る者なるゆへ同氏に書面を舟に附り最懇に諭さしめしに前原其他の輩も斯る危急の場合に至らざるを其志の厚きを感じ此上と速かに縛に就くべき趣きの返書を遣せしかば清水清太郎及び警部巡查等が彼舟に至らば一誠等尋常に総ての兵器を渡して縛に就かんと爲したれども其儘縣廳へ引致して然して神妙に捕縛せられしとぞ然らば一誠等の巨魁島根縣より山口縣に護送せられ豫て東京より下向ありし司法卿を始め法官臨時裁判所に於て糾問の上斬首及び懲役など各々處分あり其中前原一誠、奥平謙輔、横山俊彦、佐瀬一清、山田榮太郎、有福半右衛門、小倉信一の七人は除族の上斬罪に處せられたり斯て事全く平定に至り四海長閑かりける○増補明治太平記卷下○鹿兒島縣亂階の事○古人曰く始めあらざるとなく克く終りあること勤しと宜なる哉言や西郷隆盛は鹿兒島縣の士族にて通稱吉之助といふ幕府衰へ政綱漸く弛まじより首としく勤王の大義と唱へまた鎖港攘夷の説起り人心震々たましより京師と水戸の間に往來して謀る所あるに幕府之と知り追捕の嚴きなるより清水の僧月照と薩廣に歸りしが行處として追捕嚴なれば寧ろ幕府の手に懸るよりも薩海の鬼となるお如じと同志の情誼は死生の重きを忘れ共に海に投せしむ幸ひにして水夫に救われて蘇生し大島に流さる

尋で赦に遇ひて又鹿兒島に歸り用ひられて藩生に與り薩長二藩連衡の謀を爲し徳川慶喜政権返上の議に参り戊辰の役總督の宮に参謀として東京に至り北越に戦ひて功ありしも之に誇るの色なく命を辭して後鹿兒島に歸りて藩の大參事たり明治四年二月命に應じて東京に至り陸軍大將に任じ以て参議を兼たり其年七月征韓論の議始めて起り異論紛紜或は戦ひと主とし或は和と主とする者ありしが西郷の征韓論を主張すれども岩倉具視公等専ら和議を主とするより終り用ひられず決然と勇退高踏身を山野に潜め張良范蠡の跡と襲ぐ者の如しと雖も其曾中の鹿兒島縣の兵力を籠絡り賞典祿二千石を資本として私學校を建設し暴書生を呼集め竊に其武力を養成して威を中原に振んと此の地位を漸めたりしか斯くて十年一月下濼に正々の王師を抗し命を損し汚名を流すに至る是終りなきものに非ずや今其亂れの階を尋ねるに一月下濼私學校の書生等ハ事を起すの念を固くし縣下各郷の士族を恐喝て名簿を私學校に徴し公金を以て銃器彈藥を購あひ其暴發近きに在らんとす是も至つて大坂鎮臺より三菱會社の汽船赤龍丸を雇ひ陸軍士官之に乗込み同月二十七日鹿兒島へ着港し以て該地の彈藥と輸送せしむるに漸やく二千個の硝藥を積込みて日既に暮殘る所の千七百個を積入るとするを私學校の書生は我目的とする品を他に運搬しての事成がし故に之れを掠奪んと二千餘人の暴書生手鎗を携へ路を遮ぎり汝等此彈藥を船に積入るゝ時ハ一人も殘さざらば細首を打放すべし杯と刀鎗を撫て烈しく迫りければ人夫共大に恐怖して皆悉く逃去たれば書生等は其火藥を奪ひ何所ともなく立去りし其夜十一時頃に至り又赤龍丸をも共奪はんとせしむる士官等直ち該港と出帆して二月五日神戸に着し右の状と上申す此事行在所に達するを以つて電報にて東京報知す是より先き一月廿九日の夜暴徒數十人鹿兒島縣下草牟田村に在る造船所所轄の火藥局を襲ふて火藥局と劫奪せしにより宿直の吏

員直ちに縣廳に事の由を通知せよにそ一警備部中島健彦巡查を卒らて來り點檢して去る此夜暴徒來り襲びて倉庫を破り残りの火藥を奪ひ去る陸軍大尉新納軍八縣廳に事の由を告たるにぞ縣令大山綱良之を中島健彦が告しむ既にして造船所も此後如何様の事あらんも計り難ければ所長菅野覺兵衛指揮して宿直の官吏を戒めて曰く暴徒の舉動測りがたかく若し亂暴の振舞あるも衆寡敵せず温言を以て應接去て抗抵せざるやう取計ふ可しと此に於て從前の巡吏も七名を増して十四人とし嚴重に巡邏させけるが其内に鹿兒島縣人の多くあるゆへに城に内通するものあらんと慮かり海軍主計栗原實と謀り屬吏の面前おれいて金函を二箇を出し破損し用ひ難きのも一と一小箱も入れ暴徒若し來りて金函を奪こんとする時の之を止むるの固き其職とする所なれども若し恐喝し迫るとさ宿直の役員と我寓舎に駐付させて此鎗を取不遺すべしと約束して歸りける恠て二月一日下河邊行廉宿直たり之時守卒の巡行して久しく歸らざるゆへに如何なる事と懸念して居たりしに稍久しくして守卒遠しく走り歸りて報するやう千餘人の暴徒郭外の路上に塞り居て今も此内に押入らんとするの体なりしと言ふに下河邊聞きて大に驚き急に前後の門を嚴く鎖さしむ須臾にして門外に押寄せ咄と一聲揚ると合圖に門と打破り勢ひ猛く亂入するを下河邊走り出呼り曰く來る者何事を靜に事由を告よといふに暴徒等聞かず一齊に押入る倉庫を開き小銃其他彈丸火藥等手當り次第に持出して去る此夜奪はるる彈藥の數「エソプヒール」銃用九百六十發入りの箱僅に二十五六個なり此時下河邊守卒に令して支へんとすれども固より兵器はなく衆寡敵せず無念ながら暴徒の存分も爲さしむ翌二日早朝下河邊書と以て菅野少佐に告ぐ菅野直ちに縣令大山綱良へ事の由を届けらるる保護等依頼に及びけるに早速警察官吏を以て保護すべき旨返答ありたれ少佐稍安堵したりしが其日も何等の沙汰もなければ縣

令の返答心得がたしと思ひたれ最早日暮にも至りあば如何ともする能はざされども今宵寄來るも計られねば又も宿直の官吏を増し嚴しく取締りを爲し居るにまたもや數百の暴徒襲ひ來り倉庫を開き縦横に亂入せり是より先き海軍省官吏員佐々木定靜造船所より出勤してまづ其事の由と海軍省へ電報し然して殘餘の彈藥保護方を衆人に議するに素より少しの人数にて固く之を保護する事ハ六ヶ敷先づ縣廳に依頼せしに縣令之れを聞かず因て良策を設け定靜の庫中數千の硝藥へ水を注ぎて無用に屬すると案じ出すに木尾澄明下河邊行廉等菅野少佐と別室に招ねき水を注ぐに却つて兄等怨みを暴徒に招くこと必定ありと説く已にして菅野氏は座を就く時に午後三時を過ぎ佐々木菅野氏に迫りて曰く彈藥の説如何菅野氏答へて曰く他に良策ありし只水を注ぐのみと定靜聞きて直ちに人夫に命じて水を注めがして置ければ暴徒等來つて彈藥を持出さんとすれども皆水に濡れ浸して用うるも勝ざりければ太だ怒り水を注ぐ者と探偵して目に物見せて呉れんと二月二日夜佐々木定靜桐野利邦と共に宿直の折柄多人數侵入し定靜を引捕へ彈藥に水を注ぎたるは汝が所置なりと何の用捨もなく頭を擧げ手を取り足をもち公廨の前の水溜へ力を揃へて投込たり浮み出て上らんとするを亦投込み定靜は酒に術を得たれば水を潜りて窺ふ中暴徒は立ち去りければその中間を得て辛くも其場と逃れ出職工の休憩所に入る定夫藤田新助なる者暴徒の舉動を伺ひ佐々木と助けんとする折柄柄なれば相伴ひて後山へ潜れける此にて虎口を免かれ傷を搦りながら所内を窺ひ見るに暴徒等ハ燭を照して狼籍を究む之を見て切齒なし居たれども又如何ともすべからず斯て午後十一時頃公廨稍鎮まりたれば痛みと堪へて公廨へ至り桐野ははじめ諸氏にも會ひ其は景況と物語をける借て所長菅野氏は前に海軍大輔河村純義へ善徒の亂入せし由を届出でられたるが亦此日も届を差出ま直ちに造船所へ

到り見るに應中は勿論其外とも狼籍至らぬ猥もなく諸物残らず奪ひたれば工業は云ふに及ばず事務は次第に立兼しゆへ同三日より工業を止めたりし私學校の生徒等斯く暴行を極むれば早く政府へ聞へん事を恐れ他縣に者有り無を問はず妄りに捕縛をなす程に當縣貫属の者へ宿衛を托し置き栗原始め他縣の者は所々に潜伏して居たりける之に依て私學校の生徒等ハ造船所の門札改先遂に彈藥兵器の製造に着手せりとぞ○中島健彦等中原を拷問する事○茲に鹿兒島縣士族中原尙雄は薩國伊集院郷の人にして去る明治六年の頃は東京に在りて少警部其たりしが其頃征韓論を主張す後征韓論行われず西郷隆盛職を辭して歸國するに及び氏も同志の者と相謀り思ふ所ありて一先官を辭し歸國して鹿兒島に歸りける明治七年臺灣征討の議起り鹿兒島にも兵を召されれば中原ハ徵集隊四番小隊の半隊長となり東京に上り其年三月 彌 臺灣征討に一決して臺灣へ航り大に苦戰して後交代の兵到り歸朝して鹿兒島に歸る既して私學校黨の者暴慢の舉動あるを見て大に之を患ひ親族朋友などに勤王の大義を説き私學校黨ハ誘導せらるぬやう懇み説示す依て私學校黨に中原の性質を知りて常に憎み居たりたる一日友人中原を訪問て四方山の話の次に嚮に臺灣征討の際交代して國に歸らんと主張せしとき留台の説を唱へしものは方向を誤り隊を御するの道を失ふたる者なれば私學校ハ入門を許さすとの風説ありと申しければ中原と心算かに謂に彼等今我より依頼するときは喜んで入校を許すは必定なれども一度大義を誤るときは後悔るとも甲斐なし況て汚名を干載ハ流すをやと意を決して敢て吐露せざりしが明治八年に國を出て東京に上り警視廳ハ出仕し後萩の暴舉にも石州口へ出張して平定して歸京の後國元の朋友より寄せたる書牘に即今私學校黨の勢ハ益々盛んとして日を追ふ其黨に加はり肥長の暴動一たび起ると一時増し今や過半一味して既ハ中原の親類朋友にも入門した

る者ありと書き陳たるを見て大に驚き借は我親屬朋友にも誘導し者あるに至れるか我豫て説諭したる甲斐もなし如何とせんと思案せしが思ひ反して寧ろ歸縣して痛く説諭するに若かずと直ちに歸省の願書を差出さんと決心して居る折里柄園田長輝末廣直方の兩人が偶 中原の宅へ來り中原いへるや我輩佐賀の亂と山口の暴動ハ出張命せられしに其際巨魁 鞠問の席に到り其舉動の起しハ大抵二三の巨魁の論を妄りに信じて之に傾き或ハ威武を以て脅從せられざる者にて一見識なき無知無謀の爲す所とは云ひながら身を殺し家を亡ひ子孫を耻かしめ國賊の汚名を千歳に至ると實に惘然むべきと思ふ意より今我縣の私學校生の如きを顧みるに皆同輩にして只一二巨魁の爲に誘導を身に殺し家と亡すもの少からざるべしと痛嘆に堪えざりしが今や我縣の景況を聞くに多く兵器を買ひ彈藥を求め區長を廢て士族にて巨魁の名ある者を選びて之を任じおとすの聞へあれハ此際ハ當りて我等が親戚たる者も巨魁に脅かされ方向を誤る等の事有りてハ後奈何とも爲難きに至るべし依て我等兩人ハ速かに歸縣して疾く之を避けしめんと思ひ兩人とも其意ハ決したりと申せば中原ハ大に喜び我素より其心組にて既に歸省の手順も運ひさりと語れば期せずして三人の心中合体せりと諸共に固く約定して歸りたる此時同縣の人にて菅井誠美○西彦四郎○野間口兼一○安榮兼道○高崎規章○土持高松下兼清榎○脇盛苗○前田素志○伊丹親恒等の諸生にて其他同縣の諸生にて今東京に留學する田中真哉○大山綱介○柏田盛文○猪鹿倉兼文○平田宗質等も俱に歸縣すべしと決して一一同歸省の願書を差出ださんとせりが今日の形勢にて斯く一時に歸省を願ふハ長官にも疑これんも計りがたき依て權大警部大山綱昌に謀り月給四ヶ月分旅費として前借の旨と願ひければ大山ハ其心事を擧取り願ひの通り取り計らはれ 各 獲途に就きしハ明治九年十二月あり借中原ハ同月廿九日 玄海丸に乗り込み横濱を

發歸し十年一月十日、薩摩國千代に着したり其夜の串木郷なる親族の長平八郎方にて一泊せしに平八郎も久々にて面會したる事かれ、滿胸の情を盡し深夜るまで物語りせしに話却説て當今私學校黨の勢ひ熾んぶきて之れに入校せざる者、牛馬の如く擯斥け罵り且つ何人を問はず東京より歸縣せし者、政府よりの探偵なりとて其親族朋友も交らざる甚だしき、亂暴を任じたる等語、言道斷の振舞とするお至る貴兄今日歸省有し、危き事なり能く注意して不慮の難に罹るゝと物語を聞て中原の心中驚きながら其いろを形ひさす、憊て翌十一日平八郎の宅を出立して市來郷なる大久保規正の宅へ立寄りしが、規正之去年舎弟一郎と共に東京に在りて、赤視廳に奉職せし者なりけき、中原を見るより申しける、我輩兄弟の會て警視官たり、まよより今度内命を受けて歸國し私學校の情實と探る者なりと云ひ親戚朋友も絶て交はらざ、誠とに是非なき場合に成行さしと物語るに、中原に愛ひていへるやう、縦ひ如何なること、のあらんとて決して是までの志操を變じまじくと固く結びて私宅へ歸りけるに、中原の親類の中にも一二たる者のみ、其夜の内に訪ひ來りしが、朋友等の誰一人も來らず、偶途中にて出逢たるも知らぬ、休して聲さへかけざるを、果して聞居たるに違ひざり、けれど思ひ筋か、様子を探るに、伊集院郷にて既に私學校へ入門せし者、凡そ四百人に餘れりといふ、幾何も、共に歸省したる、松下兼清が中原の家を尋ね來ていへるやう、昨今の私學校の景況いよ、訝しく我郷の區長邊見十郎太、目今戸長一同を集め申すを聞くに、彼れ言々外交を托よと説ける、其概略、方今魯西亞と土耳其の兩國戰端を開き、大事に及び、抑も魯西亞は我日本と境域と接したる、一大強國に、勢ひ虎狼の如く、且常に我國を併呑せんとするの形勢と天下の人の知る所なり、然せば今我日本の如き、武威頓衰へ、只文弱に流れ、上下一致せず、此機に乗じて餘波の及ばんも計り、たし斯る外患のあると知りながら、我等氣樂に傍觀するに忍び



中島健彦
中原を
拷問せ
る圖

墨者

す像め其準備と致さるを得ず依てスナイドル銃八十挺を郷用金にて買入るべしと暴威を振
 ひ論するを戸長は御光の御説なれども朝廷より何等の御沙汰もなきに私郷用金を使用して
 の郷中の者に於て承諾致さず此義は私等の容易な叶ふまじき事と答へしに逸見も押ても言ひ兼
 て何れ縣廳より何分れ達しあるまで待つべしといひ置きて歸りたり戸長の此後の返答に苦慮し
 て我輩に談合せまゆへ其議以外の事なり幕府政權を返上してより武門を廢し全國四民皆兵隊
 に編入し海陸軍の備へありて兵權一に朝廷に歸し然るに朝命を待す安りに軍備を爲すは彼等の
 變心あるもれなり飽迄區長もせよ誰にても決して請まじき事と深く聞申し置さり今此点より
 考れば容易ならざる事なりと談じて立歸れり偕て一月の過ぎ去て二月二日の事なりしが中原
 の朋友にて谷口藤太といふ者中原の宅へ音信來て大變が出来せり御承知の私學校暴生は此度大
 坂より涼船を廻され磯に在る彈藥と積込の際途中にて私學校の壯年人夫等に迫りて奪ひ取り之
 を糧會として舊陸軍の士官と勤し生徒等の名義と設けて兵と擧んと西郷氏に迫りて準備中且從
 前縣廳の巡查は私學校黨の内にて窮困の士族糊口の爲に奉職するが習慣の如くなりしが昨日よ
 り更に屈強なる巡查を百人と募り此度東京より下りたる獅子を獵り捕んとすと云ふを中原の
 東京より下りたる獅子といふ我等の事ならん何にせよ彼彈藥を掠奪などの舉動、反逆の兆し明
 白なり此上の當地に永居せず早く歸京せんと思ひし然るに態々其が爲る歸省して確と事實を
 亂さざして歸京するも粗忽なれば今一應事實を亂して後に立出するも遅からずと立出を止め居
 ざりしに適親戚に病人ありて見舞の爲に其家に到りしとき谷口藤太より使と走らせ急に面會
 致したり事あれば其家まで直に來車ありたしと申せ來れば像て彼等の謀りし事にて我を招く
 なれば尋常の用向にあらず然りとて卑怯と逃潜れするは義士の爲す所にあらずれば若し危難の

場合に及でい死を潔くして名と全するのみと心に決し夫より家に飯り妻にも今生の別を
 して纏て家と出で永平橋に到る比後より不意に中原を引倒し捕へんとするにぞ此の狼籍奴と起
 き返りて組付んとする處傍より一度に多人數走り寄り折り重りて荒縄も縛り上げ何處とも
 なく引立行く中原と事由を問はんと思ひたれど彼等若無人に聲を掛けるも汚いしと態と物
 をも言はず引かざる儘に歩み行けば郷中の老若男女の何事やらんと觀る物堵の如し兎角するうち
 西田町なる警察第三分署へ着したり此處より別府新助の不在とて又廣小路分署へ護送せられて
 行途中に許多の壯年砲銃を携へ東西横行し宛ら陣中に入るが如く頓て廣小路分署へ至れば狹
 き所へ押し込みて柱に繋ぎ置きたり追々中原と一同に歸省したる者の捕縛せられ鹿兒島の警
 察署に送らる斯て正面に吟味役として中島健彦宮内俊助の二人が暴威を示して椅子に倚り中嶋
 の中原に打ち向ひ中原汝の如何に大膽にも西郷を暗殺せん爲に歸したるよし疾く白狀せよと
 詰問し中原の心に驚き是は思ひ寄らぬ御尋問我等の歸省は両親の病氣の看護をせん爲めて決
 て餘の義にあらずと言ひせも果す強情なれば斯くせんと這奴並々にて白狀せよと云ふ聲
 の下より左右より棒を以て用捨もなく打据あける十九人の面々皆同様にして是は其方等口供な
 りと讀み聞かせもせずして縛りたる手を捉らへて無理に押印せしめたり其口供を相添へて縣令
 大山綱良より縣下の人民に觸れ示す其文に曰く○今般陸軍大將西郷隆盛外二名へ政府へ尋問の
 筋有之積隊等隨行不日に上京の段届々出く候に付き朝廷へ届けの上更に別紙の通り各府縣
 并に各鎮迄へ通知に及び候就て此節小際し人民保護の上一層注意着手に及候條篤く其意を了
 知し益安堵可致此旨布達候事○但し兎徒中原尙雄以下の口供相添候事○明治十年二月十二日
 鹿兒島縣令 大山綱良○此時西郷隆盛之高山より私學校へ至り綱良に會して曰く我若し在は事

此に出ざるべし聞く中原等々圖る所も大久保川路の密命に出て我等と暗殺せしめんとするに在りて我意既に決せり是より舊兵隊と率ひて関下に詣り以て二人に詰問する所ゆらんと沿道の府縣の前以て之を報去期に及んで騷擾せしむべからずと綱良諾して之を受く十四日專使を以て沿道の府縣鎮臺へ派遣す高知和歌山二縣は沿道に非ずと雖も亦專使と遣りて通知せしむ○河村海軍大輔内務少輔鹿兒島に至る事○二月七日海軍大輔河村純義内務少輔林友幸の二人と鹿兒島に遣はして暴擧の事由を詰問せしむ二人軍艦高尾丸に乘し鹿兒島に投錨するに暴徒等又船と奪んとするを聞き急ふ錨を抜きて備後尾道に泊し歸へりて其由を具狀る先に河村海軍大輔の鹿兒島に入り直に士官二名を上陸せしめ縣廳へ遣りされし暴徒等之と拘留せり其時縣令大山綱良四等警部野村忍助をし高尾港に至り航來の趣旨を問ひしむ河村之に謂るやう宜しく綱良を同伴し來るべしと野村歸りてこれを縣令に告ぐ因て大村野村相共に至りければ河村詰るに彈藥掠奪警視官捕縛の事を以てす大山依違して其實を告げず河村又西郷に面會せんとを望む大山諾して小舟に乗りて將ふ岸近寄るとするとき私學校黨數百人刀を抜き銃を荷ひ舟を出して高尾丸に逼るの勢ひあるを見大論して之を止め上陸して私學校に至れば西郷桐野篠原皆在り因て河村の言を告ぐ西郷曰く行も亦妨げあしと己に立て行んとするを篠原傍より止めて曰く先生行く可からせ宜しく他人船と遣はし彼が言ふ所を聞かしむべし西郷小兵衛曰く公行かんとならん小生衆を率ひて隨ひ行くべし然る時變なきを保つべし評議遂に一決之西郷の前後を擁て海岸に至れば船已に出帆す蓋し大山が論して後ちまた再び暴徒の追に因てなす此日よる國の境ひを守りて他縣の人の國內に入るを許さず高尾丸と備後の尾道に泊し電報を以て軍艦にて鹿兒島灣を封じ且つ漁船にて兵を送らんとを促がし十三日歸京して反狀を奏聞に及び

けり河村氏の薩士にして嘗て奇兵を用うるに長が當篠原の正兵桐野の遊兵河村の奇兵を稱して三傑と云ふ薩人常にこの三傑を推し立てるなり而て篠原桐野の二人は賊魁となり薩人常におもへらく河村氏と三傑力を協せば海軍の全權の即ち我が有なりと眞じて今回も勸めて賊中に加へんとすれども河村氏は固く大義を守りて肯せずして曰く汝が輩水軍に上京すとも我敢て許さずと爲に薩人失望すと云ふ是より先電報の達するや始に東京東京日日新聞二月七日の紙上に掲ぐるにより始め世人の耳目と驚かすも雖も未だ何れを信とざるを知らず幾くもなく少警視官吉直の巡查六百人を率ひて金川丸に乘り陸軍大佐野津道貫と尉官を従へて玄龍丸に乘組惣勢十日を以て横濱を出帆し綿貫少警視の直ちに長崎に赴き尋で熊本に入る陸軍中尉野津彦同少佐川上操の十二日を以て東京を發し内務卿大久保利通陸軍少輔大山巖同中將島尾小彌太藤官柳前光は翌十三日玄武丸に乗じて西京に赴く此日より電信の私報と止め又銃器彈藥と私しに賣り或の運輸するを禁せしめ各縣令大少書記官の東京に滞在のものは皆夫々任所へ赴かしむ大政交代及び諸省局に至るまで亦戒嚴す此日廣島鎮臺をして熊本に遣り十四日議官山口尙芳同楠田世は佐賀に前熊本藩知事細川護久の熊本へ行在所警衛には江田少佐江見大尉近衛兵鎮臺砲等と率ひて東海丸にて上京せし是より至りて熊本以西の郵便通せず同地方の士族の大お騒ぎ或は囂合し或の脱走し日向國佐土原の士族の既に薩人に内應して彈藥銃器を私學校生徒に送る因て鎮靖として舊知事島津忠亮父子と歸縣す○西郷隆盛兵を率ひて鹿兒嶋を發する事○偕て十五日暴徒鹿兒嶋城下に會する者一万五千人あり桐野利秋等衆に向ひて曰く我日本政府は曩に中原等を遣らし西郷大將と刺し殺さんと暴虐問ひざるへからずと大山縣令をして隣縣に專使を出張し兵と率ひて東上するのよしを告知しめたり是も於て兵を發す其先鋒の篠原國幹を將

とし第二軍の西郷隆盛村田愼煥之に將たり第三軍の池上四郎第四軍の桐野利秋第五軍の永山某島津某後備より兵を分て肥後に向ふ西郷の陸軍大將の官服を装ひ陣中へ令して曰く官員を暴殺する勿き人民の所有物を掠むる勿れ官宅を焼く事勿れ此三條を犯す者之嚴罰を處せんと此時近縣の激徒等聞き傳へて馳集まり陣門に到て隊伍に加はらんとを望む幾百人なるを知らせされ共西郷之と軍監に命じて斷然拒絶せしめて曰く隆盛荷にも大事を擧ぐ何ぞ他人の力を借ん率うる所の將卒一万五千人皆一騎當千の士なり成敗死生此徒と共にするのみ茲に於て皆失望して去る十五日の拂曉三發の號砲を相圖に喇叭を鳴して操出せり時各隊の旗印の高天に翻へり銃鎗の閃きて朝日に輝き總軍一同に固を擧たる其音の山嶽も崩るゝかと怪む計りなり十七日先づ已に熊本縣下肥後國水俣に達せり是より先き大山綱良が遣せし專使十二人熊本縣廳に至り告知書を出して曰く西郷大將政府に訓問する所ありて不日縣下と過んとす縣官拒んで許さず專使又曰く西郷の大將なり兵を率ふるに於て何か有らん然れども某の縣官なり歸りてこれを西郷と告以て進退を取んと去て又鎮臺に至る鎮臺司令長官陸軍少將谷干城その書を却け叱して曰く西郷大將の任と帶ふと雖も身散官たり然るに大兵を事無きふ起し之を率ゐて闕下に詣らんとす干城不肖なりと雖も本臺に司令長官として職匪徒を鎮壓するふあり隻共をして臺下と過きしむべからずと專使おどろき恐きて去る干城の土佐國高知の人なり幼より家に學び後江戸に來りて安井息軒の門に入る息軒其衆ふ卓絶たるを見て殊に之を愛し視ること猶子の如くすといふ後藩に歸りて小監察を命ぜられ藩主の命より諸州を歴遊し各藩の靜動を探り之を執政に報す櫻田の變しりわ明年容堂公お從つて江戸に在り彦根の藩士水戸お報する所ありて命を受けて彦根に赴き其國老を説きて事遂に止むを得たり戊辰の役藩の大監察を命ぜらるゝて東山道と徇行し近藤勇を

甲州勝沼驛に走らせ進んで野州壬生安塚等に戦ひまた清兵の曾津に入るや其咽喉とする岩代の壯成を破りて先城下に入りしは其力實に多きに居きりと戡定りたる後召され陸軍少將に拜し桐野利秋に代りて熊本鎮臺の司令長官となる七年佐賀の亂起るに及び熊本鎮臺二聯隊あり而して佐賀に赴むに援ふもの僅かに一大隊より繰出さず或人持重に過ぎたるを咎む干城笑つて曰く我一ふび足を擧るるときは熊本の士族忽ち蜂起りて城を奪はん若し然る時九州の政府の有にありざるありと征臺の役西郷中將と輔けて臺灣に航し神風連の變種田少將害に遭ふの後また同隊の司令長官たりしが此に至りて斷然專使を以て防禦し命を下せり西郷また密使を遣として同台參謀長たりし陸軍大佐榊山資紀に送りてこれを誘ふに資紀聽かず出て使者に言へるや西郷猥りに兵を起して路を此に取る資紀武職にありて之を傍觀せば軍官の規律を犯すの罪通れ難し誓て死を以て避ざるべしと汝歸りてこれと西郷に告げよ今汝の首を斫て軍法に處すべき等なきも我言の西郷も遠せざるを恐るゝと人をして之を遁らしむ資紀の鹿兒島の人なり本姓の橋口出で榊山氏と冒れるなり成長の役藩兵に長として白川に戦ひ創を被り平定の後藩より加世田郷の士族と管轄す衆人其沈毅で決斷に敏に服す後鎮臺分營と鹿兒島に置くに及んで陸軍少佐に任ぜその長となる臺灣征討の議起るに及び直ちに東京に歸り欽差大臣副島種臣も隨つて支那に航し福州厦門を経て終に臺灣に渡り深く生植の地に入りて地理人情を察しこれを政府に報す生植も平定の後再び支那に赴き清廷の條約を結ぶに至り又臺灣に渡り外兵を收むるの事を司どり歸朝して陸軍中佐に拜す後神風連の暴動に命を奉じ熊本に赴き兵後の軍事を處置ひ終り同臺の參謀長より是に於て干城と相謀り兵糧を本城に備へて守備をなす時に城中の見兵は歩兵二千百七十三人砲兵百六十六人工兵百十三人お過す十八日開戦を公告し人民をして亂を地方に避

けしめ砲臺を築くこと連珠の如く東面の千葉城より坪井町を経て砂櫛坂に至り西面の藤崎八幡の宮より古城の懸崖に連絡たるなり十九日賊軍の三太郎嶺を過ぐるるとき間者報きて曰く嶺に一人の守兵なし西郷笑ふて曰く鎮臺の伎倆知るべし吾此嶺を踰ることを得ば九州皆我の塵かん吾今率ゆる所の兵一万五千人十分の勝利なるあり飢肥佐土原の如きは用ゆる所あり一八忽ち馳至りく曰く鹿兒島人大奮發飢肥佐土原人の亦先を争ひ進むと全軍踊躍つて飛がごとし直ちに此險を踰るも惜て熊本鎮臺にと初め鎮臺司令長官陸軍少將等賊の來るを待たず是より兵を遣んで取るを謀す此時に當りて熊本之士族賊に應むるの兆し見はるるにより却て患ひ足下にあるを思ひ校本三千餘人と俱に城を固め守りて援兵の來るを待たず十九日官軍東京を發する事○十八日天皇陛下西京に駐紮の議と決して征討府を大坂に置かざり十九日京都の行在所に於て薩賊征伐の令を四方に下し二品有栖川熾仁親王を召し勅して曰く頃日鹿兒島縣下暴徒政府に問ふ所ありと名義と設け楹に兵器を携へ熊本縣を擾亂す且嚮に其舉動に於て疑ひし事情を訊問の爲官吏を派遣せし然たるも上臆を拒む官艦を奪へんとす反逆の徴既小顯然たり其罪討ざるべからず依て朕更に卿を以て征討總督に任ぜ委任の陸海軍務一切の區畫并に將官以下撰任黜陟の事を以てす因て近衛鎮臺兵を率ゐて朕に代りて人民を保護し賊魁を討亡して速かに捷を闕下小奏せよ又陸軍中將山縣有朋に勅して曰く汝有朋總督參軍を命ず能く謀み交り陸軍を關する事ハ力て總督と輔翼し速かに成功を奏せよ又海軍中將河村純義に勅りて曰く汝總督參軍と命ず凡そ海軍に關する事は汝篤く總督と輔翼し速に成功を奏せよ其第一旅團の陸軍少將野津鎮雄司令長官となり岡本中佐これが參謀長たり第三旅團の少將三好重臣にして野津大佐之が參謀長たり第一旅團兵の東京鎮臺第一聯隊第三大隊大阪第八聯隊第二大隊東京鎮臺豫備砲

兵第一大隊第一中隊同輜重兵第一小隊傳令騎兵半隊なり第二旅團兵の近衛歩兵第一聯隊東京鎮臺豫備砲兵第一大隊第二小隊東京鎮臺輜重兵第二小隊傳令騎兵半隊第三旅團の三浦少將の率ゐる所る近衛歩兵第一大隊大坂鎮臺歩兵第二大隊とす各前後に神戸を發す同日三間槍垣權少警視海路より豊後鶴崎及び長崎港に赴く各々巡查五百人を率ゐて横濱と出帆す十九日鎮臺火を失して櫻閣に延焼し儘かに西面宇土橋の一を餘のみ幸はひに彈藥及ばずと雖も糧米爲めに灰塵となるを以て軍吏城外に四散して之を購ひ出して城中に入を財蓄始めて故の如し是より先き熊本縣廳に簿書器械を收めて御船を避く縣令富岡敬明の内務大書記官品川彌三郎と共に城に入て台兵と俱に籠城しけるを抑そも賊軍の先鋒川尻に至る谷少將これを行在所に報じ且つ海路より其側面と突かんことを乞ふ小倉分營の兵半大隊を熊本に入る綿貫少警視も亦た巡查四百餘人を率ゐて至る是に於て兵氣大に振ふ此日陸軍少將兼司法大輔山田顯義東京を發す一日省中に在り軍議を開き薩軍の意見一も取る所なし既にして書を司法卿に遣し省と出で直に右大臣岩倉具視公の邸に三りて告て曰く今より西京に至ると大臣これを止るに諾せずして出づ大木司法卿も車を馳せて岩倉公の邸に來るに最早出立して及ばず因て辭命書を急使に付し授く陸軍中佐國司順正また近衛兵第一大隊を率ゐて九州丸に乗りて横濱を出帆す賊の專使十四人長崎縣下肥前茂木浦の上陸す警吏捕へて縣廳に送る○賊兵始め熊本城を襲ふ事○廿一日まづ谷少將川尻賊比軍と懸ふて其動靜を試みんとし隈岡大尉をして兵一中隊を率ゐて別に大迫大尉として兵士三名と共に火を人家に放ち此機に乗じて進發せんと午前第一時城を出で火を川尻近傍の民家に放たんとす適賊の哨兵これを知りて銃を發す我兵其備へあることを知り且天將に明んとするに際し兵を收め金を鳴して城中に退く是より先き西郷隆盛の小川に至るや遙かに熊本に火と望

み見て傍に在る者に問に答へて曰く熊本の將士民家を焼きて我を防ぐんとするの火ありと隆盛
 然らて曰く彼れ城に據りて我兵を捍禦んとするか吾策一違へりと急に桐野利秋篠原國幹等に
 隊伍を整へて敵を防がしむ爰に熊本縣士族池邊吉十郎同志の者七百餘人と俱に賊軍に應ぎ吉十
 郎人となり潤達能く和漢の學に通じ兼て砲術に長ず舊熊本藩に於て少參事となり後職を辭して
 鹿兒島に遊び皈るに及びて同國玉名郡橫島村に居住して生徒を教授せしが常不聞進は政体を嫌
 忌自ら思ふやう廉耻の風俗日衰へ貪利益熾んにして上下共に洋風に沈酔し國体を明かにせ
 る民權を主張し金貨濫出して民困弊す夷狄我を侮慢るに至る國律これを懲戒すると能はず西郷
 隆盛等兵を擧げて肥後に入るを聞きて膝を打ち喜んで曰く渠よして兵を擧は政府と顛覆すると
 に掌を反そより速かな望と直ちに熊本に赴き之と同志松浦新吉郎山崎定平等に語り衆を集
 めてこれを議す或は曰く西郷若し一旦志と遂げて權を専らふし威を弄して我輩を奴僕視せん
 と必せり之を助るは却て彼を賣らるゝなり或は曰く刺客と名としく兵と擧ぐ豈天下の人を去て
 心服せしむるに足らずやと既にして衆議一決しければ吉十郎馳せて小川に至り別府晋助が就て
 志を告げ且つ試み熊本攻撃の方畧如何と問に晋助笑つて曰く只押通らんのみ若し台兵我の通
 と拒まば蹴破りて過んと何の方畧か之をわらんと膽量を示せば吉十郎馳せ返りて松浦新一郎と共
 に隊伍を編制す時に別府使を馳せて池邊氏に嚮導者を乞ふ吉十郎池田何某を遣る已にして思ふ
 やう薩人の爲る所其場權謀の事多し此舉も亦詐偽に出ざるを保せずと此夜再び川尻に至り篠原
 の陣所に就て國幹を見んとを乞ふ已にして國幹に面會して城攻め計策と陳べ篠原自ら部下を
 率ゐて城を攻るを見て直ちに熊本に歸り同志と糾し合せて賊陣に至る此日賊の斤候兵千葉城の
 東面及び島崎洗馬河邊に出没れる城兵これを見て銃を發して戦ひを挑む賊兵また應砲を發する

と須臾にして退く又胸壁を嶽の丸に築きて益々守備と嚴に廿二日賊將篠原國幹兵を督して熊
 本城下西南の二橋を渡りて進む我兵下馬橋を守るもの逆へ撃つ飯田九千葉城の兵之に應つて山
 砲を以て撃射す彈丸東西に飛散し賊兵進む能はず或は我小銃射程外に散布して銃を發す少時に
 して賊兵方向を東北に轉じて千葉城に向ふ守兵撃て之と退ぞく賊また京町及び錦山神社の傍
 ら出沒して狙ひ撃つ埋め門の守兵これと撃ち賊兵退きて寺原に屯す我砲兵これを見て急に山砲
 を以て撃射す彈丸賊中に落て死する者甚だ多し賊終つて去る時又午前第九時後なり賊兵
 の古城法華坂に向ふも此の散砲を布きて發砲するによつて法華坂の我兵之に應じて撃つ縣廳の守
 兵巡查隊又進んで其側面を撃ちて之を走しらす賊兵三百人復た花岡山を下りて高麗門を出て田
 間に兵を散して布き並び片山邸に迫らんとしかゝる其勢ひ甚だ烈し我兵能くこれを防ぎく戦ふ
 賊轉じて段山に據り林に蔽れて狙撃す漆畑の守兵之を防ぎて死傷頗る多く戦ひ大に苦しむ是に
 於て瀧川大尉安田中尉の兵援けて片山邸に至り福原大尉巡查隊等又引續て至る賊兵死を決して
 進み迫る砲聲山を揺かし煙烟天を蔽ふ此時小島大尉部下を進めて賊の右翼を突き火を民家に放
 ち戦ふ漆畑の兵漸く段山の左翼に迫るに及んで賊の別隊は島崎村に出てその背後を攻む我兵顧
 みて進むこと能はぬ午後六時退きて守線と保つを得り庄司大尉五島中尉安田中尉之に死す此
 日城兵地雷火を古城の前に埋め胸壁を築き増して又眺望を遮る者を除去去る賊魁西郷隆盛川尻
 口本營を建て其陣門に新政大総督征討大元帥西郷吉之助と云ふ標札を掲げたり九州に於て別
 に政府を設けんとすの趣意なり因て専ら人心を得るを本とす此時薩兵川尻に達し官艦其沖に至る
 とを前以て知り得て兵を沿海の地高橋に配布して後面の襲ひ撃に備ふ高橋の人民大に驚き老幼
 婦女の手を携へ逃んどし倔強なる者は家具を擔ひ家財を負ふて四方に奔る其騒ぎ大方ならず薩

兵之を諭して曰く我兵の来るの熊本城の如く火と放たず我兵にして来ること今日を早からしめば何ぞ城下をしく斯の如くお焼か失はんと人心稍安堵することを得たり是より後小倉分營の兵屢戦へども衆寡敵せず退いて南の關を保つ此地頗る要害の處にて官軍其保ち難きを危む初め賊軍の熊本城を攻るや思ふに一呼して攻落さんと然るに城兵の防守能く其機に應じて賊兵の死傷する者頗る多し是を於て賊將池上四郎西郷隆盛お告て曰く此城容易にして陥るべからず之を攻て日を曠くせば政府の軍備已に整理て援兵大よ至らば上國お出るの道塞がらん此上の數千の兵を殘して城兵の尾撃を扼め其餘の全軍舉是より南の關へ出べしと西郷未だ答へず桐野利秋進んで曰く丈の知たる農兵何とか能く爲さん明朝盛にすべきのみ幸ひに過慮すること勿れと篠原國幹も亦此言を然りとす池上曰く君等老成ると以て我言を用ひず只後悔する無らんやと出て我陣所に歸る又攻ること一日城遂に抜けず是を至り諸軍の向ふ所を部署して楠木に出る此日大坂東本願寺を以て征討總督の本營とす翌廿三日賊軍進んで木の葉に迫りける臺兵急お之を撃つ賊兵嚴しくこれと戦ふ兩軍の砲聲これまたに響きいつ果べきも見へざる所へ賊將池上四郎西郷小平等少し後れて進み來り臺兵の横より撃て蒐りたるが臺兵少しも届せず右に當り左と突き縦横無尽お奮戦すをとも敵と新手の加はりて我の前日よりの疲れ有須曳の支へ戦へども終に兵を引か揚れば賊兵勝お乘じて追ひ迫るに吉松少佐の自ら十餘名を以て引き返して追撃ち敵を八人迄切て落し遂に其身も戦死せり○賊徒屢々夜襲を謀る事○廿三日熊本城兵の陣地を守るもの賊の花岡山四方及び高麗門に屯するを見て俄かにこれを撃つ法華院と守るの兵之に應じて戦ひ頗る烈し土肥少尉賊の狙撃する所となり彈丸に當りて之に死す既にして警視隊も亦賊の片山邸に迫ると邀へこれを撃つ賊遂に支ふる能はず退きく段山に據る縣廳の守兵もまた熱屋町明八

橋の賊と戦ひて之と退く此日官船浪花丸肥後の八代の沖に於て賊は運輸船迎陽丸を奪ふ巡查數名浪花丸に打乗りて茂木網場等の近海を巡視する時遙に迎陽丸の碇泊するを見て之を怪しみ急に小舟と走らせて之に近づき船長を本船に喚て亂さんとす船に有る者辭して曰く唯今船長上陸して在す之を強るに聞かざれば巡查は迎陽丸に乗込みて運輸士官一人水夫長以下三十一人を縛りて事の由を速か龍驤艦に報告し迎陽丸として長崎港に引き來りて我使用お供し先に捕縛せし者へ尽く同港の警察署に拘留す是より賊は海運の途絶たせ廿四日朝野津少將の福岡より着し南の關危しと聞き人力車を雇て歩卒を乗せ將校の馬も鞭ち馳せ至る之を因て官兵力を得て復大に振ふ賊の肥筑を攻取らんとする者二軍お分ちて一軍の山鹿を陥れ一軍は高瀬より南の關を衝んとす此日大山陸軍少將の歩兵一大隊を率ゐて大坂に出張す此日逆徒征討の趣旨と京都行在所より各府縣に輸達せらる又柳原前光に勅して鹿兒島に遣はし島津氏父子に諭さしむ參議黒田清隆之を護衛に隨行す且つ陸海軍製造所處分する有を以て山田陸軍少將伊藤陸軍少將仁禮大佐陸軍三大隊巡查五百人を率ゐて龍驤清輝の二艦に乗りて出帆せり此夜賊兵熊本城嶽の丸を砲撃す守兵之に應ず賊竹林中に潜伏しく發砲漸く衰ふと思ふ間もなく賊復洗馬山崎より城に迫縣廳の守兵撃て之と退く時に四面暗黒となる賊又之に乗じて片山邸に向ひて砲を發す守兵其火を見て之に應ず黎明賊の砲聲頓に衰へ既にして天全く明け我兵砲臺を島邸に築きて霰彈を賊中に放ちたり扱も賊兵の熊本城の抜けざると思ひ各隊長を本營へ會して之と議す時お肥後の神風黨にして賊に與する者西郷おいへるやう我輩夜に乗じて抜刀肉薄して奮つて城中に入らんと乞ふ總軍以て之に續けど此夜池邊吉十郎も本營に到りて西郷を見る西郷告るに神風黨云々の事を以てす池邊笑て曰く彼去冬鎮臺を襲ふて其志を得ずして耻を知る者皆之に死して餘す所

と惟卑怯取るに足らざる輩のみ此事恐らく信難し斯れ如き者を恃みにして此舉と爲さんよ
 りは寧ろ薩軍と以て夜に乗じて虚を窺ひ城中へ突き入らば勝と万一に得る事あらんさりなが
 大兵を動かして暗夜に兵を交するの白日の勝利あるに如すと存分の異論を陳じければ西郷稍久
 しく黙して曰く子言是なりと假令大兵と以て夜に乗じて襲ふも素より地理に暗ま却て敗を取
 るの思ひあらんと因て地理を池邊に問ふ池邊詳かに答ふ西郷地理の險なるに驚きて終に此議
 を止む○逆徒征討の趣旨を公布する事并高瀬口大戦争の事○斯て二月廿六日 勅して西郷隆盛
 桐野利秋篠原國幹の官位を褫奪して各官廳に布告せらる此日又九臨時海軍事務局と神戸又置き
 征討事務を管理せしむ又逆徒征討の趣旨を天下に公布せらる其文に曰く○鹿兒島縣下の逆徒一
 月三十一日黨與を糾合て同縣下に居る陸海軍所屬の彈藥庫へ亂入し銃器彈藥并に庫内の物品と
 掠奪し監護の官吏を 凌辱し猶造船所と奪て標札と改め又郵便船太平丸の琉球より歸航して鹿
 兒島灣に碇泊するを押へ乗組の官吏を拘留するのみならず多衆集兵兵器を弄し各所徘徊す故に
 河村海軍大輔林内務少輔を遣はし事情を問訊す賊徒等忽ち上陸の屬官二員を拘留し 剩へ銃器
 と携へ小船數艘にて該船へ迫り來り官艦と奪はんとす故に一旦其場と出艦近傍海岸に回航し大
 山縣令へ面會の上訊問に及びしに先に逆徒等歸省の警察官吏數名を捕縛して非理の口供を要し
 妄説と以く悖亂の名を飾り人心を煽動し兇徒を嘯集し西郷隆盛桐野利秋篠原國幹等政府へ尋問
 を名として兵器を携へ熊本縣下に亂入す實に國憲を蔑如とて治安と妨害するの叛跡顯然たり
 天皇深く宸襟を惱まされ茲に邦典を奉行し逆徒を征討せらる衆庶其れ厚く上意奉體し詭言流
 説に惑ふ勿れ○議官秋月種樹華族細川護久黒田長博等舊治を鎮靖とを乞ふて西下る其餘華族
 の舊藩地に赴くもの甚だ多し二十六日熊本の城兵十五人今橋大尉これを率ゐて古城の守地を出

て新町より明入橋の賊壘に迫り處々に兵を分つて銃を放つ隈岡大尉も亦兵十五人を督して鹽屋
 町の小路より出て賊の横を衝き奮戦して走らす日將お暮んとするとき賊兵二十餘人手取町より
 間を作りて咄と押し寄せる我兵迎へて城の上より之を狙撃す賊之に因て進むを得ず木間に潜
 伏て銃と放ち頻りにして退く段山の賊兵も又砲を片山邸に放つ片山邸は密兵之を應て火と人
 家に放て隙を除去終日砲戦す廿七日熊本城兵出て坪井の賊を撃て之を走らせ其砲臺と奪ふ大
 道大尉戦ふて死すても二十七日の味爽高瀬口の賊大舉して我營を襲ふ哨兵迎へて苦戦すれど
 も利あらず時既に正午を過ぐ本軍進んで賊を狭間川の東に邀へ討ち午後に至り始めて賊を敗り
 尾撃すると數里賊兵を潜めて我背後に出で戦ひ尤も烈しく官軍勇奮して前後の敵に當り終に之
 を走らし兵を諸口に配置して字戦を防禦と野上少尉茲に死す蓋し賊兵昨日の敗を償はんが爲山
 鹿の兵を轉じて此に來り去なりと翌廿八日又賊兵 曉に乘して福田村の我哨兵を砲撃しけれ
 ば我兵之に乗じて巨砲三十連發して三十餘人を斃せし賊兵大に怖れて退く午後四時賊兵また高
 瀬口に來るを官軍之と激戦すると數時賊終に支へず高瀬川の守りを捨てて走る官軍追ひ撃て賊六
 人を捕ふ時に熊本士族賊に與するもの凡二小隊高瀬を防ぎて利あらず隊長北村盛純佐々
 木友房急を池邊吉十郎に報す吉十郎直ちに同士を悉く率へて赴き援ひ守軍と寺田に戦ひける
 が傷破り部下と松浦新吉郎に屬して熊本に還りたり此戦ひや官軍苦戦すること十餘合殆んど潰
 亂せんとするに至る此時三好少將勇と奮ひ親ら旗を掲げ指揮して進み官兵再び振ひ賊を距こと
 僅かにして銃と銃と相接するに至る賊死傷する者九十二人官軍死傷二十六人わす少將も亦賊に
 銃丸中りて左の脇を傷つく既にして日暮城兵火を民家に縱て退く此役に池田畑中警部彈丸中
 中りて死す時に我軍艦二艘肥後小嶋浦に抵りて賊兵の瀬海に在るものを砲撃す賊將町田啓次郎

佐土原の兵を督して海軍を守る啓次郎の嶋津家の士族舊佐土原藩知事嶋津忠廣の三男なり嘗て米國に遊學去業を脩めて七年の後歸朝す時に明治九年なり後ち奥羽と經歷りて東京に來り華族會館に抵りて大に學事と論する處あり幾もなく佐土原に歸り同志と集めて學校と興し是月始めて落成せ然るも西郷が兵を擧て東上するを聞き啓次郎二百餘人れ同志を糾し區長飯島元謀に謀り事由を大山綱良に告げたるに大山之を許し十八日佐土原と發して鹿兒島に到る然れども事倉卒に出で軍資蓄ふる處なし飯島の策に依て島津久光に告げ其金と借んとす久光辭して曰く薄祿にして家に餘す處なし宜しく宗家忠義に謀るべしと因て磯の邸に到り忠義と見て之を謂ふ忠義も又之を拒絶る啓次郎事成らざして日を曠うするを患ひ意を決して十九日鹿兒島と發し熊本に抵りて桐野利秋不就きて節度を乞ふ是に至りて其命を受け海岸を防禦すといふ○有栖川大總督福岡へ下向の事并勅使柳原前光鹿兒島に赴たる○廿八日征討總督有栖川熾仁親王福岡へ抵る明日福岡城に入るこれを總督本營とし征討の理由を天下に諭す山縣參軍亦福岡に至り向勝寺を以て其本營とす又海軍の瀛船の總て伊藤海軍少將之を指揮せしめ諸軍艦長に磯部海軍少佐福島海軍中佐井上海軍少佐松村海軍大佐等とし海軍事務局を神戸に置る又陸軍裁判所を福岡へ置れ裁判評事池内重華大主理井上義行等を該地へ出發せしめけり爰に熊本の本城兵四方地村より城中と砲撃す法華坂藤崎の守兵これに應じて山砲を連發すると須臾にして止む會計部の城を出て糧を聚む米二十七俵と山崎に得たり收めてこれを城中に運諭す此日勅使柳原前光を鹿兒島に遣り陸軍中將黒田清隆をして隨行せしむ始め鹿島津久光の鹿兒島に在りて其動靜を窺ふに之を詳かよせざるを患ひてなり二月一日瀛船太平丸東京に歸る太平丸の三菱會社の郵便船にして二月八日琉球と發して鹿兒嶋灣に碇泊す時已に午後十時を過ぐ岸上人聲俄も沸が如くはして

炬火點々として見ゆるあり頃刻にして小舟數艘太平丸に近づき暴徒五六百人銃を荷ひ劍を振ひ階を上り船中に亂入を乗客大に驚き狼狽す時に内務少記書官木梨精一郎任滿て琉球より還る俱小船に在り變と聞き船室より出て跳て甲板に出で大聲を揚げ其故を詰る賊中木梨と相識るのゆり衆と排ひて前み答へて曰く兄無異なるやと因て是より言を温くして之に就き其故を問ふ彼答へて曰く曩に私學校黨陸軍の彈藥を奪ひ西郷桐野兵を擧て閣下に詣りて以て君側と清くせん壯士既小同盟して鹿兒嶋に集まる今夜船の灣中に入るを見て政府の軍艦なをば之を奪ひ以て我使用に供せんと乃ち精銳者五十人を擇び突然船に入る固其郵船たるを知らざるなりと木梨亦告るに實を以てす是に於て暴徒三十人を斃して船を護らしめ其餘悉く去る明日木梨これと縣令大山綱良に告げて暴徒を抑留せんとを托する小綱良決せず止まると十日餘終に二月十九日鹿兒嶋を發すると得たり○賊將篠原國幹重傷を負ふ事○三月二日勅使柳原前光筑前博多に着せらる此日黎明山口少佐近衛兵一大隊と率ひて山形の賊に當り別に江田少佐一大隊を率ひて吉次越に向ひ繞りて賊背を突かんとす江田の兵既に吉次越に達す賊兵の面を築き拒ぎ守るを見て急にこれを撃て利あらず少しく退く江田兵を督して返り擊ち奮戦數時夜ふ入りて其一壘と被く賊兵退いて第二壘と據りこれを復せんとして終夜戦へども勝敗決せず熊本の本城の賊兵の諂らざるを見て長圍の策を決し堅壘を高麗門古澤町に増築し守備を嚴にして砲發す城兵の出で米若干を刃捕りす三日高瀬口の官軍進撃して木の葉に抵り稻佐山の砲臺を取り又進んで田原坂の賊營と撃つ此時山形の賊勢猖獗にして官軍屢苦戦す初め熊本の本城兵賊圍を受るや官軍重圍に陥り内外情を通ずると能はず窺かに議して剛勇の兵卒を選び屢々城外に出し我本營に通せんとする凡そ十五而して終に達する能はず伍長長谷計助なる者を選擧し夜に乗じて潜に城外を

出す計助は佐賀の役能く謀者となり膽勇ある者なり是に於て谿を踰へ岨を發り賊の營所を過ぎ吉次越に達したる頃賊の哨兵の見る所ななり遂に捕へらる計助策を以て免かれ賊の慮を伺ひて脱走し二日小倉分營に至りて城中の動靜或ハ糧食の多寡お至るまで具に告ぐ乃ち初め敵情の實を知るを得たり是に於て軍議を決し此日計助を以て嚮導として竊かよ事情を熊本の城に通せんと計助賊の彈丸に中りて戦死す又田邊少警視巡查二百名を率ゐて廣島丸に乗り横濱を發して大坂に赴く此時山縣參軍既に南の關に抵り三好野津三浦大山の四少將もまた此に在り因て進撃を議し山鹿口の兵を進めずして賊の來り襲ふを扼がしめ三好少將自から兵を督して高瀬口の賊を撃ち山縣參軍も亦自から兵と指揮す兩官互に奮戦して夜に入る我兵頻りに賊壘を陥れれ終夜戦ひ休まずして四日の曉あ及びけり又我兵の吉次越に向ふものは日逃るを逐ふと數里時お賊の後軍五千餘人先の敗兵よ力と合せと返り撃に値ひ我兵敗れて退く野津大佐之を見く叱咤て身と挺んで敵を突んとするを士官等之を止め高瀬の本營に退かしむ高山大尉ハ聯隊旗と奪げ迫て戦ひを督せしが賊彈來つて右手に中覺へず旗を落せしが中尉某直ちお馳せて遮り敵を馬蹄に蹴散し漸く旗を取返せり時に兩軍戦ひ半ばを過ぐ近衛兵一大隊賊の爲に圍まるを見て江田少將奮ふて之を衝かんとし賊彈に中つて死す士官皆自ら銃を放ちて賊に當り圍みを破り退いて伊倉を守る時に賊將篠原國幹重傷を負て退きければ賊は兵勢大に阻む我此機に乗じて逃るを透めて木の葉に抵り厳しく守備を做して軍勢を收む時に午後十一時なり却説翌三日の役陸軍大佐福原和勝岩村に於て賊彈に中り重傷を負ひしが遂に本月二十三日久留米の病院を卒す氏之長門の人なり本姓村上氏より出て福原氏を嗣ぐ人となり深沈にして大度なり戊辰の役に隨ひ至る所功有り享年三十八惜まざるを是より熊本の賊また敢て迫らず互ひに戦ひを持すこと七日に



山田

山田少將諸
軍を部署し
て攻勢の分
を配するを
圖

至る此日官軍二隊に分ち一の本道より田原坂に向ふて押し寄せ一吉次越より大久保に向ふ一軍は又二隊に分ちて別軍の河内通へ襲撃して大に賊軍を破る此戦ひや少佐聯隊旗を賊に奪はる野津甚邊かに之と見てすの一大事と馳せて幕府に報せり賊軍中に入り遮る賊六人と斬り併し難なく旗を奪返し静々と歸陣せり官軍兵に稱賛の聲鳴り立て止まざりけり五日官軍敢て進まを賊軍高瀬口に破られてより後急を本營に報じければ西郷桐野等大に驚き川尻の本營に會して軍事を議す○官賊兩軍々事を議する事○爰に西郷桐野等諸將を川尻の本營に會し議して曰く今や官兵木の葉と畧して植木を距ると僅に一里にして若し植木を渠に取きては聯洛を熊本に通じ我兵の腹背に敵を受けるに至らん宜く全力を此方面に盡して天下の變を跋べしと是に於て堅壘を吉次田原の兩所に築き精銳を悉して之を守る田原坂の木の葉と植木との間に在る嶮岨の坂なり吉次越は高瀬より熊本に至るの捷路にして田原坂の南あり地形最も嶮惡あり賊兵此に據て我兵常に仰ぎ攻るの勢をみす賊又壘を山鹿口に増築し更に本營を植木に置けり其他の大津隈府御船菊地等に配布の兵われども皆用ふる不足らざる者のみ賊將桐野利秋兵寡く彈藥の乏きと思へ黒木某を鹿兒島に遣はして大山綱良に告げ彈藥の輸送を促し且つ賞島清の黨を誘ひしむ清の初め私學校に入す頗る異議と唱ふ西郷兵を擧るに及び大山綱良に乞ひ軍を加らんとす西郷聽かず因て鹿兒島に止まり其同志を集めて豊後地に出んとす是月八日宮崎に至り桐野の書到るに及び之を坂田諸藩美々津に告げ直ちに熊本に赴けり坂田諸藩日向高鍋の士族あり會て西郷の擧を尽くして關下を護るを名とし同志を脅從して路を豊後に取んとし二月廿七日該地を獲し是月八日美々津に宿する折柄貴島の書を獲て同じく熊本に赴く此時官軍の諸臺の兵大に高瀬口に抵り諸將校を甬の關の本營に會し進取の策を議して曰く賊兵嶮岨に據り死を極めて守り殊も賊の

高きに據り我兵之仰ぎ攀と其勢を同うせむ攻戰我に勝利のあらざると今より知るべし然りと雖も熊本の城兵重圍に落ちたるを見れば將卒勇なりと雖も若し嬰守日を彌り難くして後兵至らざれば終に賊の攻め落す所とあらば九州の瓦解せんも亦知るべからず因て今日よりは將卒共に死と願ひみず力を尽し壘を攻むるに進て突險を越え植木を畧取し熊本に進むべしと乃ち全軍を分て第一第二第三及び別當れ四旅團となし大山少將野津少將第一第二の旅團を督して本營を木の葉に置き以て田原坂口に向ひ三浦少將第三旅團を督して本營と岩倉に置き以て山鹿口に向ひ別働旅團の臨機應變に兩軍を援け或は戰線の要處を守らしむ其戰線の一道は高瀬より木の葉に聯り其間内田玉名伊倉等と經て大嶮の海岸に至り一道は岩村に聯り其長さ數里に續き亘る此日近衛兵一大隊大坂鎮臺兵一大隊神戸を發して廣島に赴く又參謀局を神戸に置き鳥尾中將をして之を司らしめ滋野中佐これを輔けまた會計本部を置き田中監督をして之を司らしむ七日山鹿口及び吉次越に激戰す九日官軍田原坂の左翼内原村の賊壘二ヶ所を陥れ猶存する者を攻めて此日遂にこれを取る○田原坂激戰の事○夫天の時地の利に如かず地の利は人の和に若すと宜かな其戰鬪に臨では一致力攻進むに死るを決しざるもの之を一騎當千の兵なりと云ふ猶て六日木の葉の官軍は進んで田原坂の賊壘を撃けるに賊兵必死を示して防戦しけり午後八時に至て斷く其二壘と拔きて備を嚴にし一度先軍を引上る又山鹿の軍の砲臺と築きて賊と相對せり七日官軍また田原坂に賊を攻め相戰ふて夜に至る八日戰ひ未だ休まず日既に昏黒我兵奮ひ戰ひ其右翼の一壘と拔きて之に據る九日賊壘未だ陥らず前面の戰ひ最中あると見て兵を分ち繞り其左翼に出く一度に咄と闘をあげて壘に迫り殆んど之を抜かんとする時賊兵百五十餘人太刀を揮ひ林の中より勢ひ烈しく突き出たれば我兵戰ふ能はずして敗れ走るを士官等勸を殺さ之を獲

ひ叱咤けて返り戦はして終に其守地に復すと刀揮ひ突き進は賊兵の得意にして初め官兵之が爲
 に屢敗と取しが我兵此伎倆を知り賊の迫る時は直ち銃鎗を着て之と接戦し彼其志を得ざ
 らしむ然るに此兵大坂鎮臺より後を至るを以て未だ此伎倆を知らざ故一旦それが爲に敗らる
 と雖も官軍も刀劍隊を組んとせしに警視隊は面々其兵に當らん事を望める者多ければ諸將議
 して上田大警部川畑大警部を長として各巡查四十人園田大警部を長として巡查廿人都合百名
 を撰み抜刀隊と名付け攻進の砲隊に續き時機を見て切込んどの手筈に定め三月十四日午前二時
 近衛兵大坂鎮台兵を先鋒とし巡查隊之に續き二俣村と進撃し田原坂の側面なる賊壘へ攻掛る此
 時大坂鎮台兵の柔弱さ噂と受居たりしかば今日の一戦に其恥を雪ぐんと奮激して近衛兵と等く
 進み賊より打下す飛丸と事どもせず壘下に迫り土俵に足を踏かけ攀上らんとす賊の壁内より刀
 鎗を打振乗入れじと防ぎけるに官兵或は祈り或は突き喚き叫んで戦ふたり時よ巡查の抜刀隊と
 砲烟の中を驅抜け賊壘の傍より不意に跳て胸壁中へ祈り込られ賊兵周章狼狽と歩兵等之お
 氣を得て共に壘中に入り衝き立るにぞ賊忽ち十一名を斬り余は悉く逃去りければ総軍の
 勇奮日頃に十倍し戦ふ毎に先を競ひ胸壁に押迫れば抜刀隊も兵を分ちて奮戦し一時に數壘と攻
 取り逃るを追て攻上り田原坂に上植木街道に建る電信柱の下まで近付てに敗走の賊兵再び守
 返り必死を極えて戦ふ鋒先最も鋭ければ官軍之に當り難く二三反追落されしを士官等兵卒を勵
 し踏止つて奮闘し亦賊兵を追返す遂初めの柱下まで進み入し午前十時あり此戦中田原坂の
 半腹に構へたる賊壘より官軍の側面と撃ちたれど二俣山上の砲臺より破裂丸を二三發打掛しに
 狙ひ違はず壘中に落ち一震して破裂しけをば賊兵之に辟易し他の壘中へ逃込たり又田原坂久保
 の林中にある農家數軒を賊等焚出し塲となし居たるに此日爰も破裂丸飛來たりて農家數軒焼



失なせば守兵大に狼狽し梅の木谷へ逃込り此日の戦ひにこそ是非共勝敗を決せんと奮戦せしむる數日の間進み得ざりし田原坂の要害も過半官軍の有となる依り手負死傷も夥多しく披刀隊許りにても上田川畑園田隈本等の警部被傷し其他巡查の死傷廿餘名及び賊兵もまた此敗軍に挫けて再び攻め來り官軍も又大に疲勞て所々の胸壁へ哨兵を備へ夜討の準備を一層嚴にし此日と兵を收めたり賊軍は池田正義を始め手負九十餘名にして死亡も又多し○勅使柳原前光島津久光に勅旨を傳ふ事并中原以下獄を出て東京に歸る○三月十日勅使柳原前光及び黒田清隆等軍艦四艘を率ゐて鹿兒島に上陸す島津久光の邸と拂て迎ひ謁す前光勅旨を傳へて曰く逆徒熊本に入り朝憲を蕞如にして官兵小抗ふ朕已に征討の命を布死二品親王有栖川熾仁を以て征討總督と爲す汝久光實に國の元功固より朕の信重する所今特に議官柳原前光を遣はし朕が旨を諭さまむ其能く爾の誠意を致せと久光謹しんで旨を奉る是に於て砲臺及び彈藥製造所と毀ち四出して彈藥を收め悉く海に投ず爰にまた警視官にて歸省せよ中原尙雄以下のものども已に暴徒に捕へられて鹿兒島の警視署にて拷問に値ひ且非理の口供に押印までせしむる前も陳たるが其後の顛末の今茲に詳かにすべし楮中原菅井の兩人の口供に押印して其儘外へ引出したる此時菅井の少し見知りたる小使ありて水を汲みきたりて菅井に與へければ菅井のこれを飲み語るやう我は義の爲め盡く死に就くなり死後に家兄に傳へ吳よといへば傍より暴徒が此奴のまじ棒の足らぬと見えたりと罵り合ひて先刻連れ行きし獄屋に送りて繋ぎける兩人の今夜と斬るならんと覺悟をし居りしも其夜は何事もなく翌日午後五時と覺き頃菅井園田を始め十九人の者どもを第四課より呼出しなりとて獄屋の外に引出し中原一人と殘せしかば中原へ心竊に思ふやう扱の渠の面々の斬らるるならんか然るにても我を殘せし名簿に書漏せし者ならん何を後

ち引き出すべしと思ひ同獄の罪人に向ひ汝等我に其所にありし飯を喰はせよ刑場に臨むに足の遅さの怯しといへば同獄の罪人どもは憫みて飯を喰すれば中原の喰ひ了はりて是にて氣が丈夫になりたりと様子にての立派に刑場に歩み行べしと勇立ち今や呼出すと待居たりけるが度々の拷問と疵を許多負ひされば始終に心神疲れて知らず睡と催し柱に倚りてうつゝと眠りたる折に獄屋の外より大聲あて同獄の者に向ひ其眼り居る奴を叩き起せといひあがら一人の暴徒が入り來り中原を引起して汝が申立の皆偽りよて同罪の者といふ大に齟齬ふあり是が眞の口供なりと云ひさや讀み聞かせずして押印させんとするにぞ中原其無法を憤りたれども何一つ言せも果す無理に縛りたる手を捉へて押印せしめ其まゝ獄屋を立去りたり暫くして九人の者一同お歸り來りて中原も向ひ今日我等第四課にて申渡したる口供に西郷大將を暗殺云々のことありしかば何れも口を極めて抗言せまに多勢の暴徒左右より押へ付けて押印せしめんとす然れども先日よとの拷問も手足の利かず殘念ながら無理に押印致せしなり此押印させられたり如何に暴悪無道といふ云ひながら斯る冤罪に罹るこそ實に口をしき事なりと云ひながら憤怒り胸に迫り來て血涙眼に注ぎ切齒りて怒りしかば中原も道理こそ先刻我口供の相違せしとて再び押印せしめたるの俄に事を設けて暗殺せしならん今今幾度云も詮なき故只此上の刑場に臨んで潔く斬らるべきのみ思ふに明九日の陰曆の十二月廿七日に當ると以て此日の舊曆のころ斬罪と處せし當日なれば明日こそは必定斬らるべしと待てども何の沙汰もなし扱は出陣の日に血祭りよせんと延引するならんと日々死と待計りなり其後二月廿六日に至りて二十人共の縣廳内へ前に設けたる獄屋に移されしが其月の獄中に過て三月十日となりて日々二十人の者共が或之感懐し或の憤り如何あふんと待折しも遙かに前の濱方にて行軍の喇叭の聲疎に獄屋の内に聞へ漸次に程近くなる

ゆゑ獄屋の者どもは互に話し合へるに兼て新入の四人の言ひし如く西郷の熊本より進んで大坂に入りたるより最早大兵と要せざるが故に一隊の兵を小倉邊より還して今濱に上陸せしなふん然らば我等の死するの日に在り百度言ふも同じ事なれども只恨むらくは斯る賊手の手に果て地下に入るは嗚呼天なるか將命なるかと覺す血涙に袖を沾しけるが稍暫くして獄番れ者一人來りて一々二十八人姓名を聞き一帳に控へたるゆゑ果して今日は斫らるゝならんと思ひお覺悟として或の詩を吟じなせして待ち居たるに斯く午後一時頃數名の役人獄屋の外へ來たり一々姓名を呼んで引出し悉く一所に纏め表の方へ拘引するにぞ中原を始め廿人の少しも怖るゝ氣色なく肩を揚げ濶歩して獄門を出て久々に天日の光を仰ぎ得たりと向ふを屹と見やればこれ抑も如何小鎮壘兵并お警視の徽章と付けたる數多の兵卒整々として門の左右に並び居たれば二十人の者と思ひも寄らぬ事なれば互に顔を合せて暫く呆れ居るをける頓て勅使下向ありて二十人の者ども悉く官軍へ滲受取お相成る旨を申渡され何をも感涙を流さ万死一生の思となし深く天恩の忝けなきを謝し奉つり直ちに勅使の命に依りて港内に碇泊せし神奈川丸に乗り込みたる船中にて是は傍身等が口供なりとて賊魁が觸示せしなりと活版に摺りし小冊を見るに果して西郷大將暗殺の語ありければいよ／＼憤怒お堪ざるを憚て不日東京へ着し遂に大審院ある臨時裁判所に於て大山綱良の事實參考の爲め訊問ありければ始めて賊徒の爲に冤罪に陥りしことを知られたり○熊本の城兵段山の賊を撃ち破る事○十一日官兵曉に乘じ吉次越の賊壘を窺ふに賊兵銃を枕にして眠る者七八名あり我兵折こそ好かれと悉く之を殺して壘を奪ひ工兵に報じて壘を毀たんとする時賊兵數百人來り援ひ砲聲烈しければ我兵又壘を捨て走る又田原阪の官兵二股より進み奮戦して賊の二壘と取る後援を以て繼で進む賊兵四十五人刀を揮ふて其中央に

切込み我兵前後相應すると能はざらしむ遂お壘を捨て守地に復す此時賊司令官討死する者多しといふ熊本の賊兵書を城中に射て降ると誘ふ其文拙くして兒戯の如し城兵笑て之を退く益守備を固く十二日田原阪の賊兵敢て出す我軍も亦壘を守つて互ひに砲戦す此時賊兵田原阪の懸崖に據りて壘と列す我兵の先隊其岸に沿ふて胸壁を築き又砲臺を二股山の上に築きて遙かに賊壘を射る其彈丸毎お我先隊の頭上を飛ぶ賊又兵を潜めて吉次越より厩倉に出て我背後と撃んとす我兵之を知り別隊を出して途中に邀へ撃ちて之を走らす午後五時片山邸の守兵巨砲を段山に射て賊の營を燒く當時川路大警部池端中警部遙かに火の起るを見て警視隊を率ゐて虚に乗じて段山の右を據つ小林中尉は兵を指揮して左りを撃つ賊兵策の外に出づるを以て周章狼狽退いて山上の壘を據る官軍勝に乗じて之に逼る賊兵又山上の凹窪みざる所に潜みて狙ひ撃つ官軍辟易して進むことを得ず花岡山赤穂口の賊兵こきを見るより巨砲を連發して我兵の進路と中斷せんと城兵も亦片山邸より段山と砲撃し飯田丸法華坂より花岡山の賊壘を撃つ此戦最も烈しく夜半に至る池端中警部の賊丸に中りて死す此時官軍の九州に在る者惣計一万六千人賊兵も亦一万五千人ありといふ十三日黎明に至ると雖も勝敗決せず賊兵益加ふるに我前隊終夜健闘して甚だ疲勞る因て福原大尉一中隊を督して之に代り警視隊も亦銃兵を換て進む時天未明加ふるに大雨大に至り晦暝咫尺を辨せず城兵搜索て進む既にして天明け雨霽る兩軍相視るに其距離僅に五間ばかり城兵呼噪しく奮戦しけるに賊又凹みたる處お據り俯して狙撃しければ城兵進むとわたらず日已お八時策を決して警視隊と合して賊壘突入せんとす是に於て官軍皆銃に劍を着け一齊に鯨波を作りて奮進し直に賊壘お逼る然るに壘下懸壘おして攀ると得ず賊又壘上より連發するを以て官軍死傷頗る多し大庭中尉井上少尉試補之に死す午前十一時軍を引揚げ再び議を變

し警視隊其前か當り臺兵繞りて賊壘の右か出んと井芹川に沿く進み賊兵之を知り亦川に沿ふて之を遊へ撃んとし兩軍途に逢ふ堀山軍曹兵を麾き挺進して賊を走らし臺兵之に乗じ賊の背より出て攻撃しければ城兵周章て戦ふ能はざる臺兵火を賊巢に縱て之を焼き正面の兵望み見て齊く進む賊終に大に敗れ器械糧食を棄て島崎に走る途々城兵段山の全地を取て之に據り四百餘人を殺し四人を擒し銃器千挺彈藥若干を獲り午後三時に至つて始めて戦ひを收めけるとぞ○勅使高崎正風福岡に慰問せらる并官軍田原坂の壘を抜き植木に進む事○勅使柳原前光は黒田中將と共に西京に復命す其伴ふ所鹿兒島縣令大山綱良を神戸に置く 詔して其官位を褫ひ之を東京に護送して大審院に附せしむ爰に黒田中將は事終りて長崎に滞在せしか三月十六日征討參軍に任せられ又賊背攻撃の事を任せらる尋で兵隊巡査を引卒して軍艦にて八代沖より上陸し直に賊の後背を衝んとす蓋し黒田氏函館役に於て敵の背を出て其勢を挫き終に其功を奏するに至るとおもしに因てなま其奇兵を用ひて勝を得る尤も長する所あり此日河村參軍高瀬ふ着す又豊後内所の卷に出張の警視隊黒川村巡視のとき賊の哨兵六十人計り前後を取圍ひ警視隊大か苦み戦ふ所へ内の巻阪無手より援兵と出すに因り賊遂に潰散せり之を豊後口の開戦とす是か於て賊皆退いて二重嶺の險を固く守る此日侍從番長高崎正風慰問として福岡に抵り總督の本營に就きて詔を宣べ總督參軍少將以下士官兵卒に賜ふこと各差等あり皇后宮と皇太后宮との女官と共に親ら製する所の綿織物を傷を負ふ者も賜はる將士之を聞きて感泣かざる者なりしといふ因て華族の細君以下士民の妻女にいたるまで各競ふて綿織物を製してこれを傷者へ贈る爲に白木綿の價俄に騰貴するに至る慰問使の木の葉及び植木の陣營に至りて士官兵士へ酒饌料を賜ひ負傷者へ菓子料を賜ふ一日勅使黄昏に獨歩す成卒銃鎗を按つて誰なりと問ふ正風答へて曰く

勅使なり成卒又問ふ勅使とは何たる者乎と正風患ひて曰く 天皇陛下の使者かぞ曰く女に往くと忽ち軍曹一人走り出く禮をなしく成卒を去し其夜正風營所か歸り參軍山縣有朋に此ことを語れば有朋の曰く兵卒の如き素より其分なり彼輩と只戦ひと知るのみ何ぞ其他の事と知らん卑職曾て彼の輩に命じて人の出入を厳しく査問はしむ若し答ふると曖昧なると三度に及む則ち是を銃殺せよと君今日免るゝの幸ひなり歸京の上の具に此事を奏聞せよと十七日木の葉口の進軍官軍の抜刀隊を使用して台兵の砲撃するより引き續き刀を揮ひ斬り込て正面左側の賊壘三所を抜き既に本道電信柱の側を截り斷て高き地か據り賊壘を眼下に視下し左右より押し寄せ来る賊を嵩ひ退かしむ賊兵憤激死を極めて進み彈丸連發して黒煙噴騰として殆んど人馬を辨せざるに至る午後二時頃抜刀隊を出して坂上の賊壘を攻撃すと雖も賊兵奮戦し反つて官軍利あらず傷と被ひる者も多きが故に軍を收む是より先我軍賊壘と抜き屢進し撃つ賊道路の傍に潜伏して思ひ寄らぬ所より刀を揮ひ斬て其を少佐村田經芳狙ひ撃つ術と稱て賊を二十餘町の外に倒す賊の遠き所に在る者といへども銃聲を聞かすして斃るをわやしみ願ひみるものもまた斃る是に於て賊の村田の在る所は避けるといふ此時に當り抜刀隊は勝利を得ること多き故に軍中には之を封建奇兵と云ふ其授くる所の刀の懸官近方の地にて購求るものにて一刀の價は拾圓ありし其戦ひに利あるを聞くより價は俄に騰貴して三十圓にも至るといふ十九日黒田參軍は廣島の鎮臺兵至るを以てこれを別働第一旅團と称し賊の背を攻撃するの部署を定む高島大佐歩兵一大隊半と警視隊七百人を率ゐて日奈久より上陸し八代に向ひ黒田參軍の歩兵一大隊と警視隊五百人を引率して宇土網の浦より上陸し之れを八代に向ひ賊を前後より挟み撃つて兩軍の八代か會ふ積りなり又日奈久より進む兵の軍艦運送船と共に先獅子島に整頓し明日を待て長崎を發し

我兵の上陸するの援けをなさしむべしと十八日高島大佐は扶桑支海神奈川の三船に乗じ長崎を
 抜鎗し十九日奈久へ着去此日豊後口槍垣少警視の一隊の午後五時より二重嶺井に間道黒川口と
 三道分かれて進撃し頗る劇戦すといへども砲臺を抜くことと得ず正午に至り兵を引上て戦ひ
 を止む田原阪の嶮に向ふ官兵は本月四日より未だ咫尺も進むを得ず寸前退尺と野津大山二少將
 は大に佐尉官を聚て大擧激戦し植木小進撃せんと議し終日虛砲を發す衛背軍黒木中佐の鎮臺兵
 二中隊巡查百人を率ゐて日奈久の北宇土と八代との間なる須口村へ上陸す此時日奈久に残る兵
 の僅かに三小隊計なり我兵遙に守を認めまづ試みに大砲を放ちしに賊の不意に襲れ防禦の景况
 更になく狼狽して逃去り因て官軍賊壘を抜き巢口野村の間道を経て午後二時八代に入高島大佐
 もまた八代に向ひて上陸し隊を分つて一は鏡村又向ひ一は宮の原を衝かんとす此日大警視川路
 利良陸軍少將を兼任す二十日前日よりの大雨未だ霽をす早天官軍一時に準備整ひ第一陣の植木
 に進み賊を破るを目的とし第二陣の之に應援し三陣の賊軍を拒ぎ守るのを扨禦す若一陣敗るれ
 ば二陣之に代り三陣應援と恁て一軍二侯より出て雨を侵して鎧を涉り植木田原阪の間と横截り
 街道の中央を斷んと思ふ賊の連日の防戦に疲勞且大雨を待みにして各備を怠り居を官軍兵を
 潜めて敵壘の稍近き所に至り忽ち小銃三發を以て合圍とし一時お咄と賊を作りて押寄せたを
 賊之不意と襲れ周章狼狽て敗走す遂に街道の一壘を抜き逃る賊を追撃して賊を撃つこと無數
 漸く午前九時植木に達す此戦ひや賊も大擧し必死と極めて防戦せしを以て其死屍壘下にあるも
 の三百餘も有りて積で岡を爲すといふ植木の賊營の潰散の兵と供に官軍の大勢を益々押し寄せ
 來を望み見て大々駭き砲銃を打棄て火を營に放ちて走る官軍田原植木にて分捕る所の大砲と
 六門小銃四百餘發に及ぶ我兵此機に乗じて直ちに植木を取り進みて向阪に至りけるが賊隊を撃

へて回り撃たれ我軍之を逆ひ交戦稍久し是より先賊兵の田原阪本道の壘及び横平山に對する
 の壘を守るもの其中央既破るゝと雖も抗戦して敢て退かざりしが須臾にして兩所の壘共に砲
 撃を聞かざりしければ我兵横平山より進んで直ちに入らるに一人の兵と見す既にして本道の賊
 兵も亦銃を發せず稍進れ去る計策をなせり我兵之と知て兵を進めけるに賊兵一彈を發せず四散
 して潰る士官一名赤旗を執り挺進して壘に攀登る壘中一賊を見す士官旗を振ふて我兵と應け
 ば我兵遂に進んで壘に上る此一壘の爲十餘日を費す此間風は沐し雨は梳り晝夜連戦する三日
 休せざるに時至り一朝にして輒これを抜くと得る田原坂近傍の山岳の悉く松樹繁茂去た
 りしが戰場となり枝幹彈丸の爲に禿樹兀山となりて之を見て其激戦なると思へし廿一日山鹿口
 の官軍は田原坂の捷報を得て此機を失ふべからざると拂曉に兵を九村より出し右翼の兵の野の
 山伏峠を抜き傘嶺を奪ひ賊の志々岐村を據る者を下し射たり既にして中央左翼の軍を進んで
 鍋田村に克て賊陣を焼き直ちに山鹿に迫る賊に至る所悉く潰走りければ我軍本營を山鹿に移
 し兵を分つて一は賊の隈府に走る者を尾撃し一は駐つて山鹿を守り一軍の少將自ら將として行
 々賊を討て植木に進む此日植木の官軍の向坂を戦ふ日暮に及び山鹿の賊兵來りて側面を討つ官
 軍支へ難くして引去る山鹿の賊勢甚だ猖獗なり然れども官軍も亦克く戦ひ既に十二日の戦ひ
 に近衛兵六名を以て楫斐大佐を従ひ賊の七壘を陥る此時我將官賊彈の爲に足と傷く毎々戦ひ
 る臨む車夫三人を雇ひて車を馳せて彈丸の中と縦横指揮す一軍大に力を得るといふ山鹿の軍
 と頗る振とざるの誇りあり是て於に本道の軍田とら坂に進みて賊兵既に高瀬南の關を覘ふ故に
 岩村鍋田を扼てこれに備へざるべからず因て互に戦ひずして持重を主とす又衛背軍黒田參軍の
 日奈久に上陸せんとす前軍既に鏡宮の原に於て開戦し此時兩地よりの援兵を乞ひんとするに

木の兵を合して妄りに進むことと禁じ官軍を進めて致壘を衝き速りに數壘を陥れ水留町及び
 ばんとす此日黎明衝背軍宮の原及び種山の巢窟を抜き大野山の賊を追ひ退き重壘を奪ひ長驅し
 て北小川村の先まで進み日没に至りて戦ひを止む二十五日に至り賊昨日の敗軍を憤り曉霧の
 冥蒙に乗じ援軍を遣はして突き入りければ官軍支ふると能はずして退く將校皆大お怒り剣を揮ふ
 て衆を叱咤し漸く隊を整へ返戦すると終日僅に昨夜守る所の地を取復す此夜賊兵十八餘を我
 陣を襲し官軍亦撃て之を退く此日高瀬本營八代と互に事實を通じ小瀬船を以て海路の往復と
 開く衝背軍山田川路の二少將長崎より八代に至る是に於て諸將部署して進撃せんとす第二旅團
 と高島大佐第三旅團の山田少將第四旅團の川路少將之と率る第三旅團中軍として第二旅團と左
 翼とし第四旅團を右翼とす二十六日七本の軍の戦線と固く守て敢て進まぬ午後一時水留れ守兵
 砲を敵壘に發して戦ひと挑みしに賊兵直ちに銃砲と連發せしかば我兵水留町に進撃し砲火を以
 て水留村を焼き賊壘十三所を取る時に廣島鎮臺十一聯隊の兵僅か八八彈丸を冒して進み散兵を
 なして壘下に達す其進退の巧みなる人皆目を注ぎざる者なし須臾にして八八隊大お呼り銃槍
 を揮て突て入り賊兵十三人を殲して其壘を奪ふ士官感賞て近きて其姓名を問ふも皆答へて曰く
 死て後ち知る事あらんと復云のす是より八八隊の稱あり我軍之を見て呼噪して齊しく進む連り
 に數壘を抜き水留町に近き守備を張て兵を収む楠木口も亦賊と走らして大に戦線を進む八代
 の軍兵を部署して宮原鏡村より進んで賊を撃つ時に砲兵のがれて來る因て巨砲を軍艦より輸
 し軍吏の砲を能くする者を擇びて一隊となし折田開拓少書記官之を督し賊軍に合して進むと前
 巨砲を發すると三度續いて左軍の砲を揚げ撃て虚聲を見せかけ右軍の疾に進んで左軍奮闘して
 進み中軍右軍之を見て呼噪等しく進み其聲天地に震ふ賊支へずして敗走せり総軍急ふ之を追て

直ちに小川の要を取つて據る山鹿口の軍進んで熊本へ攻撃するに賊一人も見ずして還る尋で
 九隈府に據る此日の戦ひに賊將兒玉某戦死す○福岡の賊徒暴發の事○二十七日城兵二大隊巡査
 と俱に三隊に分ち寺町京町牧村の賊を撃つ城の上より四方の賊壘を砲撃して聲勢をなす黒烟天
 を覆て咫尺を辨せず賊軍殊死して能防ぐといへども遂に退き走る城兵の各處の壘壁を毀ち進ん
 で京町に迫り賊の糧米を奪ひて城中に運送す此日本留を砲撃する者も嚮に其壘の場所を得ざる
 を以て其功なし是に於て砲臺を改め造り木留を射撃して之と焼く是に因て賊の東に向ひて走る
 此日福岡縣下無頼の士族 百五十余人 城外の山野に嘯集の福岡の城警備の怠るに乗じて電信
 線と斷り截ち恣に砲發して所在を横行し乱暴極りなし因て縣廳より巡査を派出して二十名餘
 りを捕縛すれば餘り此勢に怖れて四散し行方と知らず初め福岡の士族越知彦四郎建部小四郎
 久世芳磨等其黨を集て叛せし適 總督宮の本營を此に置に當り起つて之を襲はんとせし官兵
 の至るに會ひ其計を止めたり然るに猶肥後の圍みの解けを兩軍植木鳥栖の間お數日相待し
 賊軍容易く敗ざるを見て再び叛す且つ越知等黨を集めて議するや薩兵強硬官軍之を征する
 こと既に二旬餘あるも未だ鎮定お至らざ我輩此機に乗じて兵を擧げ佐賀久留米柳川の士族も
 亦必ず起つて我に應せん前後夾み撃て一方と破らば我輩の事成んと衆みな之を然りとす乃ち廿
 七日の夜二時を期し城を襲ふて其彈藥を奪はんとす期に至て集る者凡そ四百八隊を三となし城
 の三方より來り襲へり時に城中の兵僅かに一中隊賊の進むを見て砲を備へ一撃數十人と殪しけ
 れば賊怖れて敗れ走り火を大西吉村等に縱ち區務所の金一万圓を奪ふて去れり因て市民等騒擾
 負擔して亂と東西お避くるに至る縣官直ちに巡査を集めて守備を爲し廿八日官兵城を出て其所
 在と搜索しけるに賊徒遠く遁れて野毛に屯すと知り進んで之と襲んとす適 大阪鎮臺兵一中隊

博多に抵りければ品川中佐平佐大尉之を率ゐて野毛に發せり野毛は舊福岡藩士の領地土人竊に心を一應ずると以て官兵地味を尋ねるに詐り答へて云るやう近傍に一賊ありしと乃ち兵と進めて野毛に入りける所賊不意不起て我横を撃けよば官兵利あらず退るるが適大阪鎮臺兵博多に抵り急と聞き來り援ひければ遂に兵を合して賊と走らし日没て軍を收め賊も亦曲淵に退きしが廿九日黎明品川中佐一隊を率ゐて曲淵に迫り一戦之を走らせたり賊復遁きて金武小集る官兵三道より進みける本道の兵は土人の爲に欺り伏に遇て敗走せりされども賊兵敢て尾撃せず火を人家に縱て退さしむ三十日賊また金武及び曲淵に籠りければ官兵分れて之を撃つ其一軍は午後進んで金武村に賊を走らし逃るを追て那美村に至れり其曲淵村に向ふの兵は内野村より賊に迫りけるに賊死戦して日出より日暮に至りければ我兵奮て其巢窟を陥る賊遂に走て行方を知すなりにける○官賊兩軍大木留木留戦事○木留植木の両所の二十八日の激戦に互ひに勝負あり賊木留の東の丘に據る丘の麓の林中に散兵を布きて官軍を拒ぐ官軍も敢て迫らず衝鋒軍進んで三軒家豊橋に至りて大に賊を打破りて進んで松橋を攻む官軍利あらずして死傷四十餘人ありければ終に退いて小川を保つ是時七本の軍明三十日と期し大舉しく賊壘を陥れんとす乃ち其前日命と下して諸隊は進撃を止め議して其向所を部署して八代の軍旅團の名稱を改めて三十日曉雨を冒して原倉の迂回兵を以て木留に向ひ一軍は三の嶽を繞りて頂上の賊壘を攻む山鹿の軍の味取を守るの兵を分つて鳥の巢に進ましむ既にして兩軍戦ひ起り兩迂回兵俱に克す是日山鹿の軍の別は三中隊を遣り援て鳥の栖と攻しめ進んで有泉村に至る左翼の柳方村よりし中軍の米原堀切の兩村の谿間を攀り登り右翼の山崎原より進む城軍も切所に出没して善く拒ぐ我兵且戦ひ且つ進み烈く戦ひ一時賊を走らす必死の殘兵再び高塚原に襲ひ來る我猛兵再び撃て

之を走す衝鋒軍松橋攻撃の部署と定む第三旅團は安婆神の壘を撃ち第二旅團は松橋に進撃し第一旅團の海濱に循て進み第二旅團の松橋に入を見く三面敵軍の突き以て一に合すべしと拂曉に第三旅團安婆神口を攻て苦戦するに賊は山間の險に據て拒ぎ又兵を迂回して我右を撃ち官兵殆んど危かりしが第一旅團の兵一中隊馳て之と援く賊亦克く防ぐ川路少將自ら兵を督しく斜に一背と突ければ賊顧みて打靡り本道の軍之を見て直ちに奮進賊と走らし遂に其險を取れり時に午前第十一時なり第二旅團は豊福の切通去に賊と戦ふ瀬海の軍は路水邊と以て意は如く進むを得とといへども潮水を冒して進みけるが此日山田少將奮進して撃て賊陣を敗走逃るを追て進み安田樞大書記官砲隊を督して本道より賊兵を追撃し諸隊齊しく呼譟して進み砲煙天に漲り呼聲田谷に響ひ敵兵大に崩れんとす三道の軍之に乗じて合撃し午後七時遂に戦ひ勝て賊を走らし其跡に野附を張る三十一日參軍山縣諸將校を本營に會して戦略を議して曰く三面より齊しく木留三の岳を攻撃し黎明より午後に至り援く能はされば則ち軍と引て去る攻戦十日お過て一山を抜く能はざるは怯惰に依ると諸將校みる奮撃して高署を定む衝鋒軍は松橋を抜く哨兵を松橋字土の中間に敷き本營と鏡村に移す四月一日拂曉原倉の兵を分て二隊とみし一は間道を経て横平山より半戸山に進み賊壘を抜き山上より吉次越の賊を砲撃す一と本道より原倉の村口に出で三の嶽の半腹に上り賊壘を陥るれ吉次越に達し賊兵を追撃し幾と三の嶽を取り兵を吉次嶺に整頓す時に正午なり又殘賊を左右の山腹より木留木留向ふて下り木留本道の兵も亦滴水より進んで賊の大軍を截り三面合せ撃ちて火を賊壘に縱ち焰烟天と蔽ひ白日光を失ひ賊兵防ぐ所を知らず賊の屍積で圍をなす我兵の死傷の僅かに數人のと此戦ひや二十日以來の官軍の大捷なり然れども未全勝を得るにあらざり二日未明進んで木留を攻むまづ大砲を發して賊の屯營を燒て三面より

合撃し吉次越の我兵も亦俯して賊巢を下し射るに賊兵屈せず防禦す我兵攻戦すること久しうして終に抜くこと能はず四日早朝山鹿の軍の兵を南田島に進め植木の軍も亦兵を進め之のたすけをなし相戦ふと半日計り敵壘容易く陥らす兩軍各守地を復せり是れより先き 主上は大坂の鎮臺營に行幸せられて病院に臨み親く負傷の將士を慰問せらる初め車駕の發するや午前七時にて三條太政大臣木戸内閣顧問自餘の諸公之に隨ひ七條停車場より涼車に召れ大坂鎮臺に入り病室に就きて親く創傷を見玉ひけるが石黒陸軍々醫正昨夜中尉某の病で死するの狀を奏しければ主上涙を垂く悼み玉ひ又兵士の病室に就て懇に慰諭せられけきバ兵卒の病床に於る者感泣して死傷れ榮るるを知り進んで賊死するを欲し生て還るを辱とす○中津の士族謀叛を企る事○四月一日豊前國中津の士族増田宋太郎黨を集めて亂となす宋太郎の中津田舎新聞の編輯長たりしが會て西郷の人と爲りを慕ひ鹿兒島に往來せり西郷の亂を起す及及び友人櫻井貫一郎梅谷安良と密に之に應せんと謀る一日安良と最も親く交へる所の後藤純平を伴ひて増田を問へり純平は大分郡淵村の平民なりしが明治二年に村民を煽動て縣廳に抗し終に逮捕せられて懲役十年と處せらるる所に家も老たる母あり待養の子孫なきを以て例に照して收贖として役と赦さる家に歸るの後人の爲に訴訟の代言を爲して業となす偶々中津に來りて西郷の兵を擧るを聞き安良と供に田舎新聞社に來りて宋太郎と面會す増田示に中原以下の口供を以す純平一見して思ふに此事兵を擧るの名義ありと遂に宋太郎に一味せり三月廿五日宋太郎同志と會して謂るや宋維新以來茲に十年朝憲未だ全からず朝に令して暮改め人民守る所を知らざ加せず無用の土木を起し官庫を空くし重税を課し人民の疾苦を顧みず試みに看よ往年佐賀の役より朝野臺閣熊本等の事に於て政府の所置するところ其當を得たりと云んや且忠良を嫌忌ひ有功の人と除か

んとす上に在る者奸謀既に斯の如し我輩此の暴政府を憐みふせず眞理の在る所に依て天然の自由を伸べ人民の義務を盡すべし宋太郎不肖なりと雖も義舉れ先道者となり同士と共に遙かに西郷と援けんとす知らず足下等の意如何と衆皆此事と然りとし共に力を盡さんとを望む獨り舊藩の士族某背せせして曰く西郷が暗殺を名として政府に反て尋問するの固より彼が私事にして何ぞ天下の利害に管せん局外の人を助くるの名義の存する所を知らずと宋太郎語塞がり論ずる能はず少時して大聲一喝して曰く奸吏の兇暴既に國家の元老を暗殺せんとす此理非三尺の童子と雖も之を辨すべし非を捨て理と助るの誠に天小従ふなりと某復言す是に於て衆に約し三十一日の夜を以て事を發せんとす此夜中津の市中訛言ありて市民騒ぎ擾る今夜前原の餘近傍の地も潜伏する者起て中津に入り火と明連寺に放て支應と攻と警察吏奔走して頻にこれを鎮撫しければ物情漸く安堵しけり夜半増田宋太郎の衆を中津の舊城外に集め八十人を分て四隊となし一の舊城の北門より支應と迫り一は市中の警察署を襲ひ追て門より入て支應の兵に合し餘の二隊に分て縣官馬淵某堀兼某の家を襲ふべしと向ふ所既に定まる宋太郎自ら支應に向ふの兵を督し大に呼で衆を勵して曰く賊本丸に在りて進進して馳す衆皆繼で進み櫓木門より入て支應抵り門を破りて諸士と捕へ鯨波を作りて亂入す宿直の吏員驚きて走り出んとするに賊群りて之を殺し彈藥器械を奪ふて火を支應に放ち退いて追手門に屯す既にして餘の三隊も亦警察署襲ひ堀兼某を殺去り來り會す是時馬淵某は三位宿直走り賊の爲に殺されたり是に於て市街の寮商を劫かして財物を掠め取り此日未明中津を脱して大分の本廳襲へんとす合馬村に至りて用務所の租金六百圓を奪ひ又四日市の警察署を襲ひ遂に立石村に宿す中津近傍の士民は變動を時として各所も囂合り富農の家を焼き用務所を毀ちなせしけるが中津の士族等力を合せて之

を鎮撫し巨魁の者數人を縛して事漸く平げり恠て中津の賊兵の薩軍に大津に合せんとせしかば
 も適警視隊二重峠を守りけり方畧を變じて語るやう兵を分て海陸より大分の本應を襲ひ二重
 峠の反りて援るを待ち其虚に乗じて大津に出べしと二日加那越にかゝりて兵を別て一と日出町
 より小船を以て大分の背後に出て一は本道より別府驛に進みより是より先き中津の巡查馳て大
 分に至り變を報せければ權令香川真一士族壯年輩を募り彈藥器械を府内の舊城に集め別に巡
 査數十人と濱脇に出きて賊徒に備へまが本道の賊兵果して濱脇に至り巡查の胸壁を築くを見
 て直ち銃を發て戦ひと挑まければ我兵は賊は斥候兵なりと思ひ敢て顧慮せず益胸壁を嚴
 にせんとす賊兵偽りに進むの狀と見し突然背後より襲ひければ我兵不意に出で隊と整ふるの
 暇なく退きて高崎山と保ちけるに賊敢て尾撃せず路を轉じて大分に向ふ折から海路の賊亦大分
 に抵りければ之と會し兵を合せて縣廳を襲へんとす權令香川真一自ら縣官巡查及び招募の士族
 を督して城に入り賊を城下に誘ひよせ銃砲を連發しければ賊怖れて迫り火を沖の濱清池船須
 町に縱ち懲役場に亂入し囚人と出して布中の豪家を暴掠して濱脇村に退きたり此時朝間繼の
 額海を向統て變と聞て直ちに別府に入りければ賊兵駭死夜に乗じて油布院より二重峠を踰る其
 後遂に大津の賊陣に入る○別府新助新兵を募る事并八代に迫る事○賊將別府新介淵邊高照と
 鹿兒島に還へりて兵卒を募り彈藥を聚む山原坂の破るゝに及びて桐野利秋熊本より深見有常を
 遣りて令を傳たへて曰く別府の新募の兵を督して鹿兒島を發し淵邊の駐つて城下を守るべしと
 是に於て新助は後軍を高照有常等に託して諸郷の兵千五百人を大口に集めけるが是に至り八代
 の官軍既に松橋を抜き熊本の後より迫ると聞き衆を鼓して道を急ぎて我兵の背に出んとす八
 代の軍疾く之を知りて之を備ふ福岡の賊昨日の戦ひに賊長村上以下八名を擒にせられ久世芳丸

江上延雄小幡大七郎以下五十余人を殺す三時賊兵朝霧に乗じて堅志田の陣を襲ひ來り我兵事不
 意お出るを以て頗る苦戦す國分少佐之衆を勵まして奮進し賊陣に中て死す我後軍繼で賊に當り
 て賊將村田正宣を生擒にす賊兵怖れて却けり我兵機に乗じて進んで甲佐を抜き或は斬り或は捕
 るること甚だ多し斯て五月に至り八代駐防の兵の午前三時を期し兵を進めて古麓の賊と撃ける
 に賊兵刀を揮ふて突き入るの勢ひ烈しければ我兵潰亂して退くと兩度時安田權大書記官等衆
 を鼓して返り撃ち遂に之と走らせり六日黒田參軍各旅團長と本營に會し議して曰く我兵隊寡く
 して前後の賊に當るに足らず固より我軍は熊本の圍を解か急なるのみ因て全力を一方に擧げ後
 而を顧りみず奮進して熊本に達するの今日の急策なりと山田少將高島少將俱お此議を然りとす
 れば之と川路少將に堅志田に報しけるに少將其險を棄て退くに忍びず參軍の令再び至るに及ん
 で之を肯ふ然るに參軍のまた安田權大書記官を八代に遣り其士族を募り賊の迫るに備へし所適
 黒川大佐兵を率ゐて至りしかば乃ち第二旅團の兵と分ちて八代の應援とせ七日八代の軍隈川を
 隔て賊と戦ふ時別府新助兵を率ゐて日奈久より八代に迫るの報を聞き駐防の兵守備を嚴にし
 て之に備ふ時山田大尉手嶋中尉兵一中隊大砲二門を以て長崎より八代に抵れり河村參軍も亦
 高瀬より來りて黒田參軍に會し軍議を以て還り八日別府新助兵千五百人を以て八代迫りけ
 るが我兵迎へ撃て利あらず遂に賊兵進んで八代を圍みければ我兵激戦して之を走らせしが賊の
 退いて古麓の山間を保てり此時永田少佐井上少佐各一中隊を率ゐて松橋より赴き援ひ澤中
 佐も亦八代に赴き遂に參軍本營を宇土に移しけり○國事犯決刑の事を總督の宮に委任せらるる
 事○是より先き九州地方國事犯決刑の事を總督宮有栖川熾仁親王へ委任せらるる蓋し佐賀征討の
 例に依てあり是に於て河野幹事小畑判事其指揮を受けて審判の事お任じて九州地方に出張す此

時官軍の田原坂を攻むるや前後二十有餘日を費せり世人謂く一二賊壘の拒ぎ守るにわふて之を
 擧ると能ひざるは將ざるもの、戰畧に乏しきかど畢竟攻守其勢を異にするを知らざる者の誤見
 なと 又四月四日 征討總督の本營より四邊に布告しけるは賊徒等一二巨魁の脅迫によりて附和
 隨從する者悔後飯順の謝罪確實なるに於ては時に免罪を許し且つ賊徒探偵捕縛等功の難易も因
 り其差等と定め之と賞與する旨を示さる此日山鹿口の軍南田島を戦ふ賊大に破れて死屍を顧み
 ずして走る八代の賊進ん坂本入り大虚勢を張り一隊の河を渡りて下代の瀬及び瀬高に出
 るの状と示し一隊の小崎に出で市に長驅して猫谷より宮原を襲ふの勢と見え賊兵の下深水に
 して之に備ふ既にして賊と馬回谷を夾んで戦ふ此時瀬高の賊は虚勢を乗じて進み我軍の後を絶
 んとす我兵之と望み見て大に潰へ横石に走る賊また進んで原米木より我兵の横を撃つ其鋒先
 鋭くして殆ど支ふ可からず遂に退き小川を據りて之と防ぐ中津の賊二重嶺に至る薩賊拒んで
 入れず依て阿蘇地方を散亂し後遂に薩賊に投ず或は云ふ薩賊初め容れざるもの、急速の際誤
 りて官軍とするに依ると此日聖上には日報社長福地源一郎と召して親しく戰地の實況を奏せし
 む深くこれを嘉して金五拾圓縮緬二反を賜ふ天下の人皆之を榮とす始め薩賊は熊本を圍むや源
 一郎の西京に至り尋で高瀬に至る自ら戰地と奔走して其實況を自撃して之を報道し東京日々新
 聞に掲げて戰報採録と云ふ朝野の八皆其實際と毫も違はざるを賞賛て新聞を争ひ求むるに至る
 ○三方の軍賊壘と陷る事五日山鹿口の進撃賊壘三ヶ所を抜きて終に鳥の栖村に抵る賊は本營
 奥寺を襲ふて小銃及び兵器を奪ふ又同所に貯蓄したる糧米六百俵と得て馬を乗り去らんとす
 る折柄賊兵遽かに返し撃ち進んで終に短兵急迫る我兵地の利不便且つ孤軍にして援兵なし因
 り一旦瀧漫阪を引揚げ南田島に胸壁を築き之に據る我兵鳥の巢と距と僅かに五町許あり我兵再

ひ水窪黒松邊の兵を分ちて終夜賊壘に相對して砲發す翌朝に至りて砲聲漸く止む八代口の二軍
 隈川を距て賊と大いに激戦す互に死傷あり六日七本の軍左右の翼を張て木留の敵壘に迫りしが
 拂曉我左翼の兵挺進して賊は二壘を抜き之に據れり此二壘之最も賊の要害たるを以て賊兵力を
 盡して返撃すること數あれども終に取返すこと能はず是に於て我兵直ちに萩迫村に進み火を
 賊據に縱て之を燒き正午と過て右翼の兵又木留の背後に進み右翼の兵も亦陣を萩迫に進ましむ
 七日山鹿口の軍復た古閑村に進みて賊の兵と鳥の栖に對壘と八代背後の賊兵此日遂に敗れて人
 吉に走る川尻の賊もまた緑川を出けるが第二旅團之を六彌太の渡に遠へ堤に復つて狙撃隊を配
 し以て舊砲を烈しく射撃す賊渡ると能はず是夜賊の兵暗きに乘じて川上を渡りて我哨兵の左翼
 を襲ふの状を示し俄かに轉して其右翼に出で木原山を侵を我守兵力戦して之に當り援兵二中隊
 と兵を合しと賊を撃つ賊兵死傷を弄て走る我兵逃ると逐ふこと數町にして賊軍手負討死に數と
 知らず是日會我少將の第三旅團の兵を率ゐて宇士に至る八日七本の軍朝霧に乗つて左右の翼を
 張り木留の敵壘に迫る時に先鋒の兵奮進して鹿子木に出で賊の横さまを撃んとす賊兵死戦して
 之を防ぎ戦ひ就も勵し々れども我兵屈する氣色なく遂に撃て賊を走らし逃るを逐て進みさり此
 時我右翼も亦木留の本道に戦ひしが賊高きに據つて大砲を以て撃ち掩し我兵撓まて奮戦して
 山口村を拔死取り午後三時小至り賊兵又先鋒我左翼の右に出で頻に砲撃と我の防ぎ戦ふ事久し
 て日暮に至り遂に兵を收め覺○熊本籠城苦辛の事并奥少佐熊本城の圍を突き宇士も達する事○
 爰に熊本城の防禦の堅固なるによつて陥らざ七本山鹿の軍も亦宇士に至る賊兵兎角に前後を顧
 んて唯城を攻るに力を盡す能はずれを専ら壘を周らして圍み攻むるのみ而して又其兵の足ざる
 を以て坪井川を引て城の西北に瀆き城兵の城として出るを得ざらしむ坪井川の城の西南に在り

往古加藤清正曾て其臣に遺言して曰く事あるの日此城を守るに宜しく坪井川を塞ぎ西北に濶き敵をして近かまひべからせと今や賊兵之と反用して城兵のきたり襲ふを防ぎ城兵も亦之に依りて西北を慮るとなし此時に當り籠城已に五十餘日に及びて糧食既に乏しく日に援軍の來るを待しに田原坂植木の賊強硬して能く防ぎ相待すると數旬なれども未だ城下は遠せざれば是に於て戰時四飯の制を改め減して三飯と爲し軍人の食朝の粥と用ひ晝夕の二次の米粟或は麥を加ふる者を用ひ文官及び武官の幕中にも在り自ら奔走せざるもの粥二次と定む或は城兵の夜に乗じて食を城外に索むるものは槍を以て焼く突き埋むる所の米麥等を以て之と城中は收め以て糧食の欠乏に備へたり又兵卒中に大工鍛冶酒造等の諸職人あり是を以て豆を得れり豆腐を製り麥を得れり餡を製し皆之を病院に送り以て病者の食に充つ曾て一兵卒糶を城外に獲て酒工之を以て焼酎數升を造り大よ其効あり又滋養品の傷者に與るものなきを患ひ兵卒數人城のしめけるに賊兵狼狽して守を捨て走る我兵之に乗じて其巢窟を燒きまた進んで石川村の賊據を攻て勝す退いて守備を嚴にす然るに隈府の敗兵の遁れて久米の賊に合し將に南田島を襲へんとせしが我兵早くも其報を得て之を道に邀へ撃て大ひ賊兵を破る十一日萩瀬村の兵の壘前を壘を穿ち其猪突を防ぐ此日晚及び山鹿の軍の敢死の士を山間に迂回し鳥の巢に放火す十二日木留の賊拂隨我陣を突とす我兵之を察賊の未壘と出ざるよ及び軍を進めて砲撃す南田島よも未明に二軍と出きて之を撃つ右軍は石川村に至り左軍は城村に至り期を刻て共に賊兵を突き數十壘を陥れて之に據り此日賊の人吉に遁れざる者再び出て八代を襲ふ我守兵撃てこれを一掃す十三日七本山鹿の軍どもに前日の地位を固く守つて安りに進まず賊兵亦敢て出す相對して十五日に至る○熊本城門初めて開け市民歸り來る事○十四日未明攻城の賊兵俄に四方より起りて城に向ふ

て城兵思ふやう賊の必ず異狀ありて死を極めて攻先寄すべしと城中の兵も亦奮激して之に應ず既にして砲聲漸次に衰へ賊兵退き去らんとするの狀あれども未川尻口破れて賊既に引去るを知らず是より先き衝背軍の右翼川路高島の二少將は梅木權現山或は糸石より船に向ふて進み大砲隊を土田山に備へて發砲し午前七時に開戦す高島少將と吉田口より進み一齊賊を追撃して後船に入きて之に據る其左翼は山田少將の軍あしく昨夜緑川に橋を架け大軍を以て杉島に進撃す賊兵急ち潰へ乱る直ちに進んで川尻に入るに答へて曰ふ城中糧米尙二十日を支ふべし獨り藥品の欠乏を思ふるれみと乃ち大に進撃の部署と定め十日と待て諸道が併せ攻んとせられけり○七本山鹿軍賊の數壘を破る事○木留口の軍ひ我兵左右翼を張り進んで賊壘を抜く其一壘の賊の憑りて木留を保つ所おして賊の屢は返し戦へ共克つ能て我右翼の兵は木留の背面に繞りて賊と一丘を取んと争ふ山鹿口の軍は玉祥寺村の北に方る山路に進み迫間川を隔て、砲射す賊も亦隈府町の背面高の瀬西覺寺邊に兵を出してこれに應ず官軍の山頂に大砲二門と置きて賊兵を射撃す此時隈府本道の一隊の既よ架娑村に進み山頂の兵と連絡を通じて賊を攻撃す是は於て我兵と迫間川に沿ひて雪野村に於て戦線を開いて迫間村及び石坂に火と放つ然れども未だ隈府へ破裂彈を放たず又我一隊の出田村の内花房阪に進む賊軍は隈府の防禦に苦み築地の堰を塞ぎ水を築地井手筋に注ぎて我軍の進路を塞ぐ九日右翼を進めて木留に迫りけるが先山砲二門と射て賊屈と燒きければ我軍火の起るを望み齊く小銃を連發して突進し午後二時過に木留の後山に出で山上の賊壘を攻掛たり賊兵必死に防かざる我兵屈せし肉薄して既半腹に至れる頃賊兵山嶺より下し射て勢ひ最も勵しされども我兵屈せず仰ぎ攻む暮に至て終に木留を抜くを得ず兵を收めて守地に腹せり原倉の軍は賊兵の膽を冒して小山よと來りて襲ふを邀へ撃つ遂に之を走らせ

より十日七本の軍の攻撃を止て進まず山鹿の軍は廣瀬に兵と出し、賊兵と綴り別軍を以て菊池川に沿ひ進みて隈府に進入し堀に入て鮎鯉の類を描へ之と病院に送る者あり或ひの哨舎に於て草鞋を造る杯其辛苦實に紙筆に盡し難し將校も亦志と守備の策に専らす然れ共糧食既あ乏しきより將士銜に突山の議を定めりる既に宇土の方當りて砲聲あるを聞き背後の軍漸く近くを知り其議を止七日に及んで此軍未だ達せざれば是に於て再び突き出るの議と決せり是日與少佐一大隊を率ゐ城を出て曉霧を冒して賊線を突き貫きて衝背軍に遠望合せんとす別に臺兵巡查隊を出して之と護送せしむ我軍の筒杖を脚を竊かに城を出て安政橋に達す時に大霧にして咫尺と辨せざれば賊の哨兵之を悟らす我兵鯨波を揚げて賊壘に迫り縦横無盡に斬り付くれ此時連合隊の衝突して賊の防禦線を衝き進んで砂取に至りて狼煙を揚げて無難に達したるを報せしなり城中の兵の之を望み見て歡ひ聲城は満たり護送の兵の遂に九品寺村に糧米を得て之を城中に報じられ城中又出て安政橋口に兵と二隊に分ち賊營を襲ふの狀と示し城の上より賊壘を砲撃して黒煙冥濛として賊兵をして城を攻撃するれ一方に力を盡さしむ此間に糧米を城中に運輸す是に於て城中は兵勢復大に振ふさて城中の別軍の與少佐の既に遠きを謀り尙進んで白川の岸に戦ひ賊壘數十を抜き逃るを逐て階子渡に至り對陣しけるが午後三時兵を收て城に入れり是日黒田參軍の高島少將伊藤少將と共に木原山に登り俯して地理を案じけるが遙かに一隊の兵我哨線に近く者あり念らく賊兵來れりと斥候兵を出して之を見せまひるに須臾にして遷り報じ敵にあらす與少佐城兵と率ゐて圍を衝て來るなりといふ是に於て諸將山を下り之を本營に迎へ城中の狀を問れける是を於て山川中佐一中隊と率ゐて突進して熊本城に至る城中の兵と仍賊軍の再び進み來かと疑がひて砲發せんとす隊兵大に呼で曰く官軍なりと是に於て歡ぶ

響之山岳も崩るゝが如く此日城門初めて開け薪水の充足を見至る諸道の官軍漸次に進みく市民漸く歸り來る是より先き背後の官軍の漸く川尻涉船を逼るを以て賊兵攻城の兵を分つて之に當らざるを得ず然れども兵寡くして堅城を圍み難きと以て坪井川の下流を堰き水と城下に注ぎ以て城近の衛路と沮む春日藤崎の邊は水溢れて人家の軒を浸す北日工兵出て堰を斷て水を落す十五日木留植木鳥の栖の賊兵も自ら火を人家に縱て退きければ我兵その狀を察し直ちに進んで之を尾撃すとも賊敢て抗はず我先鋒は遂に進んで熊本入れり時に賊の殘壘を見るも器械糧食の類に至るまで更に一物を遺さず我士官等之を見て其退軍の巧みなるを賞したり是日黒田參軍自ら各旅團と率ひ藥品糧米酒肉等と輸送して熊本城に入り將士守城の勞を慰問せらる片向侍従も亦俱に城入り勅旨を各少將以下將校士卒に傳へ物を賜ふこと各差あり○帶山の官軍激戦の與○熊本の圍み既に解け諸軍みな連絡を絶えずすく賊軍と攻撃の便を得く我軍大に軍糧を蓄ふ所となる成算悉く翻轉ふ其熊本を退くも及び賊將等の議各合を或は一旦鹿兒島に引寄せ兵を募るべきと云ひ或は日向或は豊後へ退くべしと云ひ又熊本に戦死すべしと云ふの津宮甘木涉船の四所に分配して大に防戦の用意す官軍は賊の其守る所に循つて攻撃の策を決し三浦少將の第三旅團を領し大津より東豊後路に送り遙かに二重嶺の官兵と相應扱し野津三好の兩將の第一第二の旅團と領し本營を竹迫に置き大津枯木より川窪の方面に對し大山少將の

別働第五の旅團を領し立田山に陣之南都渡尾保田窪に向ひ樺山中佐兒玉少佐の熊本鎮臺兵を率ゐて神水竹宮の賊に當り山田少將は別働第一旅團を領して隈の庄より甘木より向ひ川路少將の同第三旅團と率ゐて堅志田より舟船に進み三面より之を包み環ち又曾我少將の第四旅團に將として軍團本營に駐まるべしと部署を定め明二十日と以て大舉進軍せんと決しける是より於て二十日味爽川路少將は舟船山田少將は甘木を抜き俱に進んで其地に本營を置く賊勢大に沮喪して皆山中に潰散す野津三好三浦三少將の其戰團線に達せざるを以て敢て戦ひを需め唯其守線を固く守れり獨り戦ひの最も烈しき大山少將樺山中佐の二軍あり初め大山少將の砂取より神水を経りて直ちに竹の宮の賊壘を攻撃せしめ賊兵強梗して善く防ぎ賊兵の守線と保田窪の突き出したる間に沿ひて下南部に蟄蟻す此地山帯を曳きたるが如きを以て帶山と名づく其の巖壁に非らずして岡邊のみ然れども此岡に據りて砲壘を設けて穴場を作つて官兵の攻撃を防ぐ此時我軍の左右翼と張りて三方より進み砲兵は著獲を打ち掛け攻勢大に振ひ漸く又前山角の堅き砦と陥れて之を據るされども賊又返し打て再び原の線に退きて復原の堅壘を陥る勢ひいに乘じて帶山少將の壘と抜きて賊と追撃し進んで火を新南部の賊巢に放ち逃るを追ふて憤進しければ賊兵遁て茂林に入ると一人なし既にして賊の援軍數百人敗兵あ合し迂回りして帶山方面より返撃し追兵の後に其不意に襲ひ來れり我軍の後に敵を受け急に顧りみて之に當りしが前後支ふること能はずして遂に崩れ潰れて走る先に得る所の壘砲復悉く賊の有とある是時に於て神水口の官軍も亦大に進み竹宮の賊營に接近し殆んど之を抜かんとして戦尤も劇き折柄此敗北の爲に兵機大に撓み終に陥ること能はず賊も亦夜半に其營を退けり是より先き樺山中佐兒玉少佐の氷前寺口より進んで竹の宮の壘に逼りて殆んど陥れんとするの際南部口に返し撃の餘威

此に波及して戦線忽ちに追縮す日將に暮んとするに至て兩軍の連絡全く絶えたり賊兵の此處を窺ひ衝きて熊本に逼らんとす我將士皆大音に呼つて曰く戦ひ勝りと身士卒に先だち勢ひ破竹の如く是よかいて我軍大に振ふ賊兵遂に破れて竹宮を退く曉も至て帶山の諸壘を取復し前軍共に進んで戦線を布く同夜賊兵大津を襲ひて大に敗北す三浦少將進んで大津を據る○賊兵八部を退き潰散する事○二十四日去る二十日の大戦以後賊軍之終に挫けて再び進軍するの勢ひなく木山の營を拂ふて退くに於て大津木山舟舟も官軍の占め據る所となる賊兵皆矢部山中に退く矢部の地勢たる益城郡りの高山の中に在り甲佐嶽其西に聳へ東之阿蘇山脈に連り日向高千穂越の隘口あり南面稍進軍すべし山中に七十餘村あり總稱してこれを矢部といふ賊は本營を矢部の嶺町に置く賊復た退くと雖も其天險の絶地に據るを以て諸旅團と攻線の策を定めて徐々として進軍せんとす廿五日賊兵遂に矢部嶺町を去りて二手分かれ一は那須を越て人吉に赴き一は馬見原に出く日向路に走る是に於て官軍も又遂に攻線の部署を換へて其據る所を探りてこれと追撃せんとす此日河村參軍と大山高島の二少將と俱に歩兵五大隊砲兵一大隊巡査千人を率ゐて海路より鹿兒島に趣きて賊の根本なる巢窟を奪ひて占據せんとす廿六日熊本城中にと大に軍勢と奏し將士の勞を慰めけるが將士皆云賊兵城を圍み攻むるの日に當り幕中にて三味線を弾じ僅かに守城の勞を遣りたるよしすれば其心慰はしむるの如何やと歡びを極めて止む是より軍と休め廿八日に至り時に賊軍は更に策を變じ其新築せし砲壘を棄て日向に走り或は人吉に據りて固く之を守り接戦せざりしが唯廿九日の未明に城兵再び菅村に出るの報あり我兵馳て至れば一人を見せ初め賊兵の矢部を退くや二道に分きて潰散しけるが其一は濱町より馬見原を過て日向國境に入り高千穂の山脈を踰え三田井宮氷を経て延岡に赴せんとし又一は山路を過て國道

より人吉に達す○官軍鹿兒島に發向し 朝旨を諭す事○二十六日高知縣士族池田應助等連書して護郷兵口結の届けをなす其旨は云ふ薩日畿かに一の帶水を隔て一葦し易きを以て風波衝突或の免を難きを恐る茲に郷兵を團結して田里を豫防すべきの意を以てす小池縣令書を却けて許さず初め縣士等議板垣氏の解職して田野に遊ばんとするや縣の人一社と設け民權を主張す之れを立志社といふ其他中立靖獄の二社あり靖獄の舊と守るの黨なり中立は其名の如し各相容れず縣士各自に主領を立て相會して縦横論議す是に至り結社益盛んなり二十七日河村參軍等直夜鹿兒島灣に入つ拂曉上陸す直ちに縣官課長箕山長作右松祐永松本武雄今藤宏等を捕縛し之と龍慶堂に送て悉く檻檻に繋ぎ鎖て設けし所の巡查も亦みな新たに兵隊及び警視隊を以て哨兵巡邏せしむ是より先き舊參事田畑常秋始め西郷等の出京するを以て餘理ありとして大山綱貞に誘はきて上山を周旋す後ち勅使下向の時や其逆意お出るを知り別府邊見等が新兵を募るに遇て益々怪み官位刺奪の報を得るに及びて自ら悔て刀に伏して死す賊將桂四郎來つて縣令と翻して事務と扱へり是に至て四郎勢かに遁る又茲お嶋津久光父子より縣廳に送る書を得たり其大意の板令政府の軍艦これ海港に至るとも恭順して命を奉じ方向を誤らざるやう縣下一般の人民へ懇に説諭せんを求るものにして即ち是月廿二日を以て送付せし者なり然るに縣官包んで之を公布せざりし者の如し二十八日鹿兒島の官軍の哨兵を四方に張て防禦線と定め堅壘を城下に築くと凡そ四五十にして肥後及び日向路の不意に備へ又上下町口二ヶ所を開き其他の道路と閉ぢく守線外の往來を禁し城中に砲臺を築き城南南林の寺を限り墓碑の石を取て壘を築き寺の外なる清瀧川を堰きて水を漂へ大に防ぎ守るの準備頗る堅固ありされば三十日に出まれば城下お於て一人の賊と見ず又一發の砲を聞かざりしが唯縣下の士民無根の妄説お膠られ大に

危み懼るの念を抱くもの多し時に征討總督は官より令旨を鹿兒島縣に移さく之を諭す其文に曰く縣下の暴徒擲に干戈を動かし逆勢を挫折していまだ悟らず縣下に飯り再び良民と害せんとす今海陸軍を派遣するものは人民の安寧を保護のみ人民夫れ此意を体せよと且又河村參軍大山少將より親く士民に諭すに朝旨の在る所を以てすれども士民妄りお隆盛に心を寄人々皆謂ける西郷の一たび足を擧て北行せしより捷報日に至り未だ會て敗軍の説を聞かず之官軍の我を欺ひくならんと信じて二十九日賊兵は矢部を退くの後肥後日向の境ある万山の中に潜走して其踪跡と知る能はざりしが今曉に至り肥後東面の菅村に現る蓋は賊の哨兵官軍の面辭を窺ふなり賊又踪跡を潜す之を探るに日奈久より以南の連山も悉く壘壁を置き守線と張ざるの地なし五月一日山田少將別働第二旅團に將として八代口へ出陣す二日川路少將の水隈に軍す同日會我少將の部下の兵四大隊及び砲工其他附屬の兵を率る熊本を發し小島より漁船を以て鹿兒島よ赴けり之より先き三月廿一日四等判事岩村通俊と鹿兒島縣令に任せらる此日鹿兒島に達し即日縣治の事務に着手し令を出して縣下に諭を海陸軍の入縣賊徒大ひに敗ぶるの状傷を負ふ者には治療の思慮正しきに反りて歸順すべきの告諭裁判所を開く等の事を以てす然るも鹿兒島の士民は更に朝旨を解せず疑ひと抱き荷と擔他方へ移しなせして市中騒ぎ立るもあり或は門戸を鎖して闕然として恰も人無きが如き家あり同日賊徒大隅の國加治木に據るの報あり清輝艦を遣りして之を探らしむるに更に賊影たも見えす或は浦生お出沒す我兵は日々砲壘と築き胸壁を造り全軍銳氣と養ふて賊の來るを待かけたり又官軍の賊兵浦生お據るを聞くも賊徒人吉に退き守るの後官軍既に鹿兒島に至るの報と聞き其策と變じて兵を兩道に分ち一は大隅に出て一は薩摩に向ひ兩道より鞅んで鹿兒島を襲んとす大隅に出るもの加久藤栗野横川溝邊より加治木に到り薩

市敷根福山は海岸に沿て鹿兒嶋より向ひ薩摩口へ出るもの大口なる牛山の嶮を固く鎮田大村を
 經て浦生吉田等に出で以て鹿兒嶋を圍んとす是に於て官軍の配は河村參軍大山高島曾我の三
 少將にて十八大隊餘の精兵を率いて鹿兒嶋に在り賊に應じ山縣參軍及び谷少將の熊本有野津
 三好三浦山田の四將の各其方面を守り川路少將の襲ふ警視隊を率て八代口に出けるが長
 驅して日奈久佐敷水俣を過ぎ肥後の境を踰て薩摩の米澤に達し又阿久根より西方高木水引にい
 て川内川を踰て向田申木市來伊集院より賊巢を一撃にせんと爲したりけり三日内務少輔熊本に
 至る蓋の戰餘の人民救恤の爲なり此日午後賊徒鹿兒嶋の西南武村に至る其勢二千人或の三四千
 人と云伊集院及び郡山の賊將の村田新八浦生田加治木は逸見十郎太別府新介等これを指揮して
 本營を山崎へ置く是を於て官軍兵と部署して防禦の策をなす四日別働第三旅團石坂の嶮を奪ひ
 て薩摩に入る五日未明賊徒と武村水神坂より進みて城山の壘下に至る官軍の賊の來ると知りな
 がら故と寂寥して一聲も出さず既に竹柵と破らんとする及びて誰なるやと問ふに賊答へて曰
 く西郷隆盛なりと聲未だ絶へざる中銃砲亂發して賊悉く斃るこれより銃砲互ひに發して戰
 ふ既にして天明るにいたれば城の西南に火起り燄烟天を蔽ふて甲突川の前面より延て武村及び
 ふ蓋し官軍防禦線に害あるを以て放火するなり六時に至り賊徒敗軍して水神坂に走る時西南
 の風烈しく起り九時強雨至る然れども火勢猶熾んにして黒烟風と俱に地を捲き遂に線内を侵し
 鹿兒島市中玉石供に焚く此の日清輝艦の甲突川下流に至りて武村邊に發砲す念ふ賊兵は前
 日の敗軍以後武村に據て再戰を謀りしなり此日現兵二百人にて曉お乘じ天保山に沿て抵り
 て直ち甲突川と渡りて我線に入んとす此日甲突川下流の海口に接する所の幅員は殆んど六拾間
 に及ぶ且つ連日の強雨よて水大に漲りしも素より川底淺くして之と涉るに其水股に及ぶね其

兩岸の凡六七尺計の懸崖ありて恰も屏風と立るが如し又官軍の砲壘の沖に村の岸に連り陸嶮と
 して聯珠の如くなれども賊の固より期する所なきは皆魚貫て川と涉らんとす我兵之を知り其來
 るを待て礮さんとし敢て發砲せず賊兵憤進して中流に達し砲壘と距ること僅に及びし頃我守兵
 俄に大小砲を連發しければ賊數十人立所に斃る餘のみる遁れて岸に上れり又賊中十餘人は留ま
 り進んで崖下に迫り銃を發して砲壘に登らんとするされども斷崖屹立して之に攀る能はず我兵俯
 して崖下に射撃す六日城下の火未だ息を我軍一大隊を出して谷山吉野に斥候す途に賊に遇ひて
 之を走らす賊徒退いて武村に出沒するを見る我砲兵連りに射る○賊兵甲突川の下流より襲ふ并
 ふ佐敷水俣の別働隊苦戰の事 八日別働第三旅團水俣川に傍ふて兵を進めて久木野に入る此日
 賊兵背後に起り俄に抜刀して突出し我軍大に亂れ大關山久木野を棄て走りて石坂を保つ同日賊
 徒椎原より別働第一旅團へ來り襲ふ撃て之を退け進んで益城郡の西効中村白岩戸の諸村を奪ふ
 是より先き賊は根濠を人吉にたて大口に連絡し日薩の別軍と聲息を通じ盛んに攻防の策をなし
 我軍の虛を窺ひて肥後小衝突せんとす是に於て川路少將の自ら部下を率ひて佐敷水俣に向ひ第
 三本營を此處に置く野津三好の兩少將の第一第二の旅團を率ひて本營を水前寺に移し木山大津
 を守り堀江中佐は鎮臺兵を率ひて矢部濱町より馬見原を守備し山田少將は別働第二旅團三浦少
 將は第三旅團黒川大佐の別働第四旅團を領して進撃す九日佐敷口へ當る別働第四旅團の兵と分
 つて三隊とし籠瀬の要地を襲へんとす嶮岨と踰え問道を経て一軍の球平川に傍ひて神の瀬へ進
 み一軍の小河内大河内に戦ひ亦賊を破て籠瀬へ進み一軍の鋒峠より進んで賊壘を陥れ白木と
 取る賊の援兵來るに遇ひ亦右翼の側面を衝きけるが我兵と唯二中隊のみにて衆寡敵せず殊に賊
 は太刀を揮ひ山の上より三面に分れて突き來る其勢甚く鋭し我兵一小隊の銃を發せんと待機

へたり賊の刀頭上に臨むに及びて賊の聲を揚げ齊しく發せしかば賊兵悉く斃る我兵勢ひに乗じて進み山壘を抜く此夜十一時鹿兒島谷山の賊婦人として竹の橋壘下に至り泣きて線内に入るを求めしめ竊かに通路の開くを待ちて突きて入らんと欲す我兵許さず賊兵遂に砲を發す橋を隔て、戦ふ夜明けに賊屍の中を見るに婦女の兒を負ひて銃を荷ひたる者ありと十日また敵壘を攻むるの議を決し嶮岨を踏えて尾敷の越えを取り賊を逐ふて之を保ちけるが賊兵返し撃ち勢ひ尤も烈し我兵寡少して防ぐこと能はざれば前に取る所の賊壘みな渠が爲めに恢復せられたれども兩日の戦ひにて大に我哨兵線を進めけりとぞ十一日賊軍屢進んで警視隊を迫る我軍退いて戦ふといへども賊の進撃頗る烈くして既に本營に迫らんとす警視隊利あらざるの報先きに佐敷に至るを以て第三旅團の兵二大隊半水俣の本營に入る我軍再び振ふ是より先き賊兵八部を退きて八吉れ地方を據しより我諸將は議しけるやう地勢の險を歴て日と曠すして久きを彌り賊をして戰備と完うせしむべからずと更に進撃の部署を定めける三浦少將の佐敷に黒川大佐と日奈久に山田少將の八代を本營とし鎮臺兵は仍り矢部に在り佐敷口球摩口籠瀬口萬江の諸道或は久連子通り那須通の諸路より並び進んで八吉に達し以て賊巢を殲さんとす故に官軍の連絡の川路少將と全軍の右翼としく大口出水の街に當る三浦少將の水俣より佐敷に山田少將黒川大佐の佐敷より日奈久八代に到り野津少將は八代より小川原町に達し矢部鎮臺兵に接せり是より先賊軍は二大隊は兵と鹿兒嶋を派遣し八吉に専ら防守の策のみありしが既其不利と謀り且軍備も整ひければ進撃を試んと欲し直ち八代を衝の謀計をなせしと既にして我兵八代を堅く守るに會ひ終に其志と果さず是に於て議と變じ日向路より馬見原に出る肥後を経て豊後に入り竹田街道を突きて直ちに進み出んとし竊かに其機を窺ひたりしが十二日水俣の賊深川村に大砲を以て

我營の三面を射撃し百發百中す我兵大に愕く夜入りて戦ひを休めず此日賊兵の曉天に乗じて佐敷は官軍と襲ひたり此時我兵在る者僅かに三百人稻荷山に逆へ戦ふ須臾にして賊を走らす爰に賊の部將野村忍助兵を率ゐて延岡に駐まり竊かに豊後を窺ひたるが牒して其備へなきを知り兵三百人と山道より進め是夜俄に重岡の警察署を襲ひんとす巡哨馳歸りて重岡警察署を告ぐ言未終らざるに賊徒三四十人來る時に在署の巡查僅かに二十餘名邀へて防戦すと雖も固より銃器なだを以て衆皆死傷を助けて退く賊の區務所に入り官金を奪ひ又市中を暴掠す翌日に及びて其徒忽ち七百餘名小及べり十三日日向の賊進んで竹田より迫り警察署を圍みく彈藥銃器を奪ひ支應を毀ち公金を掠め四方に押し出して民家を暴掠す遠近爲に騒ぎ擾をて一時皆難を避けんと老を扶け幼を携へ路上に彷徨と是日各旅團の兵の豫て定むる通の部署をせしが水俣佐敷の軍と後軍新小至り兵氣大に振へり十四日未明賊曉霧の露をざるに乗じて馬見原の第一守線を侵し我兵を不意に襲ふ我兵退きい第二線と守り賊進み至る我兵これと遊へ撃ち賊二十一人を斃しければ渠等辟易して鏡山まで退きしが午後一時再び襲ひその戦ひ尤も烈しけれども我軍透さず攻立ければ賊の左翼被れ我兵齊く進んで迫り撃ち賊遂に潰え走り漸くにして廿第一線を取り返せり是より先き鹿兒嶋の別軍の日に海上より武利セバル山の賊壘に向く發砲するのこみして未だ進撃を試みるに至らず此日午前十一時我軍一大隊の武の橋より路を三方に分ちて右翼の山路より左翼の海岸より中央の本道より谷山に向つて進み撃つ沿道の賊兵の算を乱して潰ひて走る我軍進撃して谷山口新川の硝石庫を火き川を渡り谷山村に放火す賊敢て戦ふものなし豊後の賊徒勢ひ日に猖獗ふして縣廳に迫らんとすにぞ縣令守應の策を決し官吏並びに警察吏を部署し海兵と共に府内城に據て防禦せんとす巡查隊は戸次津野の二驛に防ぎて賊を詭き一万の陸兵來

りて既に城主すとの風説をなす然れども我兵少なるを以て退いて城に入らんとして退軍の喇叭を吹き鳴らしるに賊駭きて潰走し遂に鶴崎を侵さんど時に東京巡查隊を佐賀の關に上陸して府内に至らんとして鶴崎に次る賊徒夜半不意より起りて鶴崎を襲ひ抜刀にて營中に入る我兵不意に出たる事あるを俄に起て防戦するに傷を受ける者多し夜明て巡查隊を海路より府内に出た賊の臼杵に赴く○官軍福山を襲ふ事○十七日鹿兒島の官軍の海路より福山の賊巢を破るの議を決して兵を部署しけるがまづ第四旅團の歩兵二中隊警視隊一中隊を分派し拂曉波戸場に至り午前八時高雄丸に搭せ河村參軍大山少將會我少將田邊中佐その他尉官數名の面々清輝艦にお駕し九時に碇泊し其時高雄丸の舳舳二十六艘を船尾に繋ぎ以て上陸の用に供へ清輝艦に後れて發せり港々出るもの出壘を守りもの我艦の旗章を翻へして港を出るものを望み見て頗る之を怪むの狀ありければ二艦急行すると大凡一時間にて午前十時四十分には清輝艦の福山沖に達せり倍て清輝艦の鎧を投するや海岸大に騷擾の景況あれば遠眼鏡を以て之を見るにその狼狽周章するもの賊兵なり是に於て艦長急に令して發砲せしむ乃ち十二「サンチメートル」の「クルップ」砲を以て著獲舟を發射しなるが賊營に中りて破裂するも其半に過ぎ我軍艦の陸地に距ると八町許りなましが漸く進んで一二町の距離に及び射撃するとを劇だし因て賊兵遠く遁る我軍艦より備る所の巨砲に悉く裝藥して且進み且射て海岸に迫りけるに殘賊尙小銃を以て之を防ぐが其の彈丸の皆水中に落ちく我に達せず初め我高雄丸に清輝艦に後るゝこと少時なりしが既にして該灣に達し清輝艦の射撃するを見て暫らく留まりて上陸の機を窺ひけるが十二時に至りて漸く進んで海岸に近き兵士を舳舳に移し小なる漁船を以て之を曳死岸に向つて急ぎける時賊兵また小銃を發して支へければ我兵之に應じ直ちに進んで陸地に上れり此日強雨にて且つ迅雷空に轟き陰雲地

と蔽ひ咫尺殆んど辨すべからず然るに艦中より連射する所の大砲の雷鳴と齊しく又陸地は精兵の軍艦より巨砲を發しければ賊終に潰走せるを我兵尾撃して福山村に入り火を人家に放ちけるが一時四ヶ所より燃上れり時小雨聲少しく衰へければ我軍艦の砲撃を止め士官みな小舟を駕ち陸に上り賊兵を搜索するに既に遠く逃れて都の城に走り一人の駐むるものあり抑も我軍の此地を襲ふや宵に賊を退かすの目的のみならずその兵糧と茲に蓄ふるを察知し之を奪ふて其根本を絶の策に出しを以て我兵直ちに火を放て之を焼く○肥後豊後の諸軍接戦の事○同日人吉賊八春山の嶮阻を固く守りて我兵の湯治村に入るを拒ぐ蓋し我軍の人吉に入るの便利を得るに湯治を得るに在りて後軍議して國見山の絶險を踰え八春の背後を衝かんと國見山の肥後の國に第二の高山なり其頂さハ士人等の神鏡と稱して齋戒沐浴せされば登ることなく我軍夜半兵と潜めて此險を登るに一條の樵道もなし辛ふじて其絶頂に達し俯して賊壘を見下して一齊に發砲す其聲山岳に響きて賊軍仰ぎ見て大に愕さしも登り來りて我軍を抗せんどす我軍俯して賊と山谷を撃つ賊遂に支へ難くして壘を捨て遁る此時俄かに烈風大に起り樹を斃し砂石を飛し既にして暴雨大に至り山氣骨に徹る十八日朝水俣口の長官川路少將參謀傳令使と俱に一小隊を以て出水口の哨兵線と巡りて長尾山の麓に至る賊の哨兵之を望みて砲撃す我兵進みて賊の側面より射撃す金毘羅山の哨兵來りて賊の正面を撃つ賊山を下り左翼の深渡り瀬に走る我兵進みて大野に入る此日や賊の壘を抜くこと三十三戦に及ぶ同日豊後口の賊之鶴崎より戸次に出で川舟に乗りて大飼に達する所區務所あらびに警察署を暴掠す佐伯臼杵の中路に三重障あり其障中頗る富めるを以て賊兵の暴略尤も多しといふ廿日拂曉我軍竹田を襲ひしが賊能く防戦して利あらず大分町の諸方の口々に數百人の巡查并に海兵と分配して漸く胸壁を築き夜ハ篝火は焚て賊兵

の來り襲ふに備ふ此日水俣の軍のまた中尾野近傍に賊を進撃し鬼ヶ嶽松の谷等にて戦ふ地勢我に利ありき軍を水俣に退けんとするに夜に至りて又來り襲ふ此日鎮臺兵の馬見原より豊後口に至るものエラ原村にて賊の斥候兵を斃す二十一日第三旅團大河内本營に賊兵の降るもの九人あり之を賊徒降るの始めとす是より先き賊四人中吉尾村の哨兵に來り降る其内に鈴木彌介なるもわり賊の分隊長に之を頗る學理と辨へたる者なり初め降伏して再び賊營へ歸り同隊の卒と誘ひて來り降るあり廿二日人吉攻撃の佐敷口の軍大野の賊と不意に襲ひ盛んに大砲を彈射しければ賊隊は糧食と棄て走り柘植村を保つ是を於て我兵線と國見山より鏡山に連絡して長さ四里に餘れり此日鹿兒島の賊の四面より來り襲ひ砲撃す我海軍も亦大砲を發すると頻りなり○永田少佐討死の事并に山田少將諸軍を部署する事○廿三日賊また城北二本松より砲撃をけるが鹿兒島縣廳の邸内に榴彈來り落つ亦一の本營の牆の外に落て破裂せし是より先き縣官に軍機を論じて陸海軍の蹉跌あるを諷す然るに此地に在る縣官の多く文官に出るを以ていまだ戰闘に慣れ故に巨砲一聲霹靂坐に轟くの間或の色を變ずるものあり之を視て縣令に諭して曰く我属官に禁ずべきもの二あり縣官の兵事を談する勿れ其實の机上の臆測も過ぎざるのみ又欺むき病と稱する勿れと人皆稱して要領を得たりとす人吉攻撃神の瀬口の兵三國山等を抜く賊兵神の瀬を棄て走る廿四日に至り午前二時人吉の攻撃兵の賊の來り襲ふを神の瀬に迎へ戦ひて之を走らすまた我軍一大隊餘西田高麗の兩橋より進みて武山山脈の賊壘を奪んとしけるに賊兵突然と我本陣を襲ふたり然るに我兵の我中堅を斷て我軍の本營と首尾相連絡すると能はず遂に大に敗走し彈藥を棄て遁る永田少佐怒りて奮進し曹長某と賊彈に中て死せり此夜出來りて我線外の烽火を打滅んと哨兵擊て之と退けり廿五日黎明監視隊の兵出水矢等敵の賊を襲ふて數壘を

抜く豐後口の賊三隊に分れて佐伯に入る中央の藤原道左裂の中野の間道より鹽濱又出づ右翼の天神津留を筏にて下り三方より城下に進み入る爰に鹿兒嶋の人民の官軍を疑懼して常に頭腦に染てさゝ救助米を貪ぐんと欲し偶線内に來るも既に之を得れば直ち小線外へ逃潜し其家に歸るものなしされども漸々に救助米の額を増加するを以て其疑懼の念日に減じたり此日竹田を攻撃す監視隊田中口辻口竹田口間道の三路より進んで賊の二壘と抜く二十六日山田少將諸軍を部署して曰く隈川より右翼は叅謀高島少佐之を領し右翼第三旅團兵と連絡し左翼は第二旅團兵に連絡し吉田村より大阪間の方に向ふて進み隈川より左翼神の瀬川島までの一線は第二旅團の兵にて左右に連絡して進入の管川島より左翼大槻を経て照赫通りまでの一線は山地中佐の受持とし兵を分つて二隊となし先鋒豫備は別をなす其先鋒は單進し人吉に突撃するを以てし其豫備は先鋒兵の進路と警備して彈藥運輸の便を得せしめ又先鋒は應援となし且つ左右翼の二兵と連絡しし進入すべし左翼は万々通りを経て除き鳥帽子峠までの一線は堀大佐の率うる屯田兵の受持とす其兵を以つて左右に連絡して進入すべし除き鳥帽子山より高野までの線路と中佐中村尙武の受持とす其兵を以つて左右に連絡して進入すべし高野より遠持を經梶原までの線路は山川中佐の受持なり五家の庄口久連子より左翼尾前に至るまで線路と中佐中村重遠受け持とす直ちに江代古原敷の賊に衝突し進んで右翼と連絡すべく又左翼奈須通りを守備すべし又二中隊は兵を日當に留め全く固守の警備をなして尾崎を保護べし而して據ころなき場合の宜ろしく所遣ふべき儘く三十日拂曉各方面より攻撃すべしと其他方畧等を示したり○人吉諸軍攻撃の事并に賊町田梅之進兵を舉る事○斯て廿七日山田少將は大槻の山に登りて親ら兵と指揮し急に進んで之を抜く時に賊ハテルカク山を據て胸壁と作る我兵哨兵に命じて一時に咄と衝蕘けたるば

賊不意に出るを以て驚き走つて山を下りける此日豊後口の全軍議して竹田を進撃す警視隊の鏡川を涉りて七里村田代等の胸壁を衝く賊固く守て抜けず此時玉來口を攻撃するの臺兵も抜くと克くして俱に戦線に退き守る廿八日其木營と國見山に移し我哨兵線の人吉も近きもの殆んど十町許りに至るといふ二十九日別働第二旅團進んで人吉城を攻撃せんとす又一隊の假本營を神の瀬に移せり三十日山田少將は部下の諸隊と率て各所に進撃し一の俣大槻テルカクの賊に接し激戦數時なりしが官軍頗る苦戦して遂に賊を山下の平地に退けしめて軍を收む此日後口野津大佐の賊を尾撃して繞りて背後に出で三重市を襲ふんとして途に在り奥少佐之遊撃隊を率て進んで三重市の正面を衝く又三好少將部下の諸隊の川岸權現山の方面より進んで中神渡り切通に向ひければ賊險に據り能く防ぎられざる遂に擊つて之を破り渡り入れり初め謀の者賊兵甚だ少きを報す因て直ちに進んで賊壘と奪ふ賊兵千五百人忽ち四方より押し寄せ孤壘を圍む我兵重圍に陥り幸ふじて一方の血路を衝きて大分に走る此事早く大分に聞かざる警視隊を急に線山す是に於て野津大佐の急に兵を引還して賊に向ふ賊又初の如く寡兵を示そ我兵此衛中に陥らず賊夜に乘じて兵を引揚げて臼杵に向て退く爰に賊山口縣下萩警察署詰の警部能一延利と云る者三十日一等巡查和田二郎をして縣廳へ來り報じけるお長門國萩の賊町田梅之進等二百餘人と嘯集ひて萩の警察署を襲ふと是に於て縣令關口隆吉以下大に警備に注意し密に其手配をなしけるが時に巡查の山口にあるもの八十八人過ぎずして各所に出張して警備すべきもの僅に五十餘人のみ因て即夜電報を以て馬關の兵隊及び巡查を萩に出さしむ而して兵隊未だ至らず賊徒のや進んで萩に入り警察署に發砲す警部以下寡兵を以て敵すべからざるを棄て走る賊營と火き進んで木を燒き佐々並驛に據る此時山口の警備整はず賊をして山口に進入し製造所現在の彈藥五十万

發銃器を奪ふて之に據らざる前に防がざれば察するに中津の賊の如きにあらず巡查早く一の坂の險を奪ひ進んで佐々並を衝く賊奥大下村を據る我兵敢て迫らず翌日馬關の兵佐々並に進む早朝巡查既に賊と佐々並に擊つて之を走らし又古戰場村の岐路に戦ふ賊兵來り迫り小銃一發し直に短兵急に接す賊魁町田梅之進刀を揮ふて猪突す我兵短銃を以て之を斃す餘賊悉く走る○人吉の戦ひも瀧川中尉討死の事并に入吉落城の事○爰に五口に向ふ山川中佐の一隊と兵と分ちて二隊とし一手に進んで黒野田山に壘を築き之に據り一のその山麓より進んで山上の戦ひに關せを黒野田の傍ら出で山上の兵に合し川邊深見の兩村を経て直ちに人吉に進入せんとするも賊亦此處に大砲數門を置き防戦最とも烈しきも我兵之に應じて進撃す賊其右翼と張り我先鋒を夾み撃んとす時に我右翼の兵防ぎ兼て全隊避易して遂に川邊村に退きたり是日また軍と進めて深水村に至りけるに賊兵數百前路を遮り杉林の中より射撃し激戦數時にして勝敗未決せず又瀬摩山の方面に進みし一隊の途中にて一農夫に問ふに賊兵の在や否やを以て農夫答へて云るやう一兵なしと因て直ちに進み行くと數町なりしが道險隘にして並び行くを得ず忽ち杉林の中より小銃を發すること雨の如し我兵餘りの不意に駭きて先を争ひ逃走る瀧川中尉之を見て劍を揮ひ熾しく叱咤すといへども潰亂終に止まず退くこと數町なりしが漸くにして隊と整へ防戦せりされども一たび潰れたれば之を守返すの容易に意の如くならず遂に右翼の兵支へずして敗れける瀧川中尉は身を挺さんで突進して兵士を指揮し其身十餘創を被ひり騎身血に染たれども猶劍を執りて退かず既にして賊の兵漸く衰へて退きたり此時士官某瀧川を抱き大聲おて戦ひ勝利といふ瀧川笑ひを含んで死せし六月一日人吉攻撃各路の軍の一齊に聲息を通じ午前九時進んで人吉に入る山田少將は自ら別働第二旅團を總督し進んで人吉を攻落し遂に之に據る是と

り先き城と守るの賊の其保ち難きを以て一軍の米長峠を越えて日向に入り一軍は大口一軍は加久藤に走る賊中に振武行進鵬翼雷擊等の諸隊あり之と精悍兵ありと故に退軍の時の大抵後れて殿する又賊に於て笑ふも堪たること人吉本營より寺社へ戦勝の祈禱を命せり其七日は満るの日落城すといふ或ひは云ふ賊魁西郷隆盛は八吉落城の前六七日より此地に在らず此日豊後口の賊臼杵を陥る初め臼杵の士族賊兵城下と襲ふの報あるを以て軍議を決し同志凡そ八百名を二隊に分ちて一は佐伯口の藏住峠一は竹田街道を拒ぐ縣廳より警視隊百名を臼杵に遣る是より先き賊の竹田に破るゝや魁將桐野利秋美々津あり援兵數百を出て諸方の賊を合して三重市に入り官軍と戦ふて之を克つ既にして支ふ可らざるを以て其兵を轉じて臼杵を襲ふ臼杵の士族隊及び警視隊南津留不動前に戦ふて利あらず賊進んで荒田村の堤に據る我軍の望月村より砲を發して之と撃つ賊の一隊を佐伯より姫岳を踰え間道より遶りて城下に進み又一隊中にて臼杵荒田峠水が城の峯を越え江毛村に出て賊軍と夾み撃つ賊軍大ひに亂れて稻葉茂等奮進して死す警視隊一方を防ぎて禹王口に退く賊遂に臼杵を奪ふ二日竹田に在る所の野津大佐の兵と鶴崎に上陸せし警視隊六百人と兵を合せて三重市に進むける此時大分は全く應援の路絶え孤軍となる是に於て大分に在る所の熊本裁判所支應并區裁判所等も若し事急に出る時竹田へ移轉すべき職に決し緊要なる簿書のみな之を輸送せしは是日より七日に至るの間差たる攻撃もなし○人吉の官軍部署と定める事○偕て三日第三旅團大關山國見山の賊を撃つ官軍勢ひ猛烈にして賊遂に退いて背後の山に據る此戦ひや賊は兩山を守るも實に要害の地たるを以て棄す我軍之を得と失ふと再三おして奪ふ因て別働第三の防禦線室尾山隱山と連絡す四日第三旅團久木野を奪取す是より先き人吉既に陥り各旅團の兵の勢に乗じて賊と尾撃せんと其部署を定めたり川路少

將は別働第三旅團を率ゐて肥後地總軍の右翼に當り本營を水俣に置き其左翼に久木野上小場に亘り其右翼に矢筈村鬼が嶽を経て米の津に達し漸く其軍を進めんとし三浦少將は第三旅團を率ゐて本營を佐敷に置き其左翼に三浦に亘り其右翼に國見山を経て上小場に連り日お前進の勢ひとなし山田少將の本營を人吉城より三が浦に達し三好少將は第二旅團を率ゐて本營を八代に置き二大隊を率ゐて派し一大隊を日奈久に出る兵凡十三中隊を以て同所を據りし野津少將の第一旅團を率ゐて本營を馬見原に置き其右翼は別働第二旅團と連絡すと雖も豊後の軍の進むを待て敢て妄お進まざるは於て官軍の肥後地に在るもの左翼は第一旅團より右翼は別働第三旅團に連り漸次進撃の狀あり其連絡の長さ総て四五十里に達す是に於て川路少將の旅團は漸く出水に進入して三浦少將の旅團の大口に進み山田少將の旅團の加久藤と尾撃し野津少將の豊後の官軍と並び進んで日向に入るを期す初め別働第二旅團の人吉を據しより賊兵の日に軍門に降るもの多し先二日より十日に至るまで薩人の降るもの凡百五十人其人吉の者三百人其他佐土原人等合して六百人餘あり且人吉の副総長大童沼成參謀兼監軍瀧川俊藏參謀東久郎次も亦二百六十八人を率ゐて降り銃器并に金二万圓餘を齎せり薩賊にて中隊長滿尾勘兵衛右隊長永友金之助軍艦有留清楊の三人も亦降り各右金銀數百圓或は二三十圓を懐中す賊軍の敗報を包蔵すること甚だし故にお大敗の後と雖もその各隊に報知するもの大抵言ふ軍議に因て兵を某の地に退く詔を怖て走るにほらず諸隊之と勉よと五日黎明警視隊進んで賊の不意と撃ち干城隊が守る所の鬼ヶ嶽を奪ふ午後賊兵又突進すれども我兵變動なし七日川路少將の鬼ヶ嶽にいたる賊松尾上原の壘に據り十四壘を拔て引揚げんとす賊の別働久木野道より我横を撃つ因て一隊を右に備へ左翼の二隊を分ちて一は賊の援兵を禦ぎ一は賊の左翼を横撃し追て小川内に至る此日三浦少將兵を率ゐて久木

野は正而を攀ち薩界に至る此戦ひ翌日に及て未だ勝敗決せず賊小川を棄て一口に走る我別軍小川三村に準備を置く此日鹿兒嶋の賊兵初めて攻撃線諸所に大砲を設け是より日々壘中を射撃す九日豊後口の軍決議して臼杵を攻撃す野津大佐臼杵を距ると十町許の水ヶ城の小立に陣し大砲を置きて發射す賊も亦市中の二階より應じて頻りに砲を發す是に於て大佐軍を五隊に分けて進み諏訪山の官軍背後の間道より其不意を襲ふ賊水と涉りて走る會潮満て溺死する者衆し而して再び十六天神の邊より返し撃つ時に海軍淺間日進の兩艦を舊城の石岸に留めて横より着發弾を放つ賊兵披靡して或は臼杵市中へ遁れ或は平清水に走る賊將桐野利秋臼杵郡の所々に出没して士民と脅迫して兵を募るありて止を得ずして賊も陷るもの數多ありと云ふ十日豊後の軍より發砲す市中俄に火起り煙焰地を捲きて白日冥濛たり我一軍の海岸より舊城の壘場を奪ひ一軍の市濱土橋より又一軍は竹田三重戸次平清水よりそ賊兵遂に佐伯地方に遁る兩日戦ひ海軍より獲る所の砲九人の頭上を過て賊壘も破裂して死傷するもの多し十一日別働第三旅團出水軍を進む一水ありて船なし且對岸の胸壁頗る嚴重なり我が兵直ちに跳り入り水を涉りて賊壘を奪ひ小松村の砲兵を置く○人吉口の官軍四十九瀬山を抜き日向路へ入事○扱も山田少將の一隊人吉城を落せしより其勢颯風の如く當るべくもあらずされば賊兵も辟易し支へ兼たる有様に少將の一手は猶も勇み此勢に乗じて敵を打破らんとす此山田少將常に四士を養ふ田北兵戸太井上野と曰ふ人號して四天王と稱す軍中に周旋して馳驅して令を傳ふる事臂の指を使ふが如し屢々戦勝を得る所以あり六月十日未明より支度と調へ打出んとせしが配兵の都合思ひの外に手間をとりしを以て其日人馬を休め翌十一日午前五時頃人吉より辰巳の方へ押出し賊將兵を三手に分ち左翼は田代村の邊りにて戦を始め右翼は赤池村の邊りまで進み中軍は四十九瀬山よりシンシ原

を進みしが其日の正午十二時頃には既に四十九瀬山の賊壘に七八箇所を攻落せり然るに此日大雨頻にして篠と束ねて突が如し四方の山嶺も雲に蔽はれて幾かに三四町を隔て賊軍の射出せる銃烟さへも見へざりければ諸將令して輕々しく進む事と禁じたり午後三時頃に至り雨の益々烈しく河水も次第に嵩増して所によりて板橋を押し流し官兵も進退に不利なれば漸く砲撃を止めしが賊軍も亦戦を好ぬと見て砲撃を止め午後四時半頃に至て全く滿野寂寥として砲聲なきに至れり翌十二日の昨日に引換たる晴天にて官軍は勇み進んで賊軍に馳向ひ午前九時頃遂に賊の大壘と乘取壘中藁小家に火をかけて味方の勢を助しが賊の少く色めきければ官兵得たりとつけ入り進を逐て益々進み鷹の巢山の麓まで追行猶も息をもつがず敗賊を尾撃し一手はオコバ村より薩摩を出る本道を押し又一手は鷹の巢山の間道と逃走る賊兵を追ひ又一手は鷹の巢山の左なるシンシ原谷といへる山路より進み何れも嶮峻なる山坂なれども報國の一心に少しも屈する色なく十二日の黄昏に遂に肥後と薩摩の界なる山の絶頂にこそ達しける翌十三日の早朝に日向なる吉田加久藤飯野の三箇所を占得た地理家の曰く此加久藤の古より肥日の天門と稱す加久藤陷るときの薩日二國の地形の目下に遁る所なし長驅して定むべし山田少將は常に地理を考究し戦の間毎に二三兵を率して山野を跋渉なし必ず其地の利害を記憶し然る後賊軍の將たるもの斯くありたれものなり○豊後口肥後口の官軍進入の事○此日豊後口の野崎堀江の兩中佐の兵を率ひて佐伯に達し十三日本營を利垣村に置き猶諸口と謀じ合せ日向に進入り賊兵を追逐けんせしが賊兵二百人餘り俄み三國峠の本道より三重市口を襲ひ來りし故其防禦の爲に其意を果さず翌十四日には賊退去せしにつき中津牟禮口の官兵は奥畑に進み三國峠賊も又阿蘇山迄進み再棄越の賊を襲ふ者左右より攻撃し迂回兵をして背面を衝て大勝を得る翌

十五日は筈返しと三國峠の両道より進み三國の山界を奪ひ取て賊壘を距る事凡五百歩の所に壘壁を築き固く守備を整へた。十七日午前三時より進み進撃を試みしが賊兵驚怖して重岡街道の方へ逃去りぬ。又旗返しより進みさる官軍も勝利を得て尾の市まで進入せり。猶勢も乘じて重岡に進入せんとせしかども賊兵は千束村川尻村の両村に於て嚴重に防禦を設けたるを以て官軍は重岡より一里餘り手前なる山れ上に警備を張り、賊の動靜を伺居たり。然るも二十一日の朝に至て遠に斥候の兵返り来て告る。賊の昨夜重岡と引拂て延岡又の隈田の邊へ引去れり。と我兵之を聞より直に重岡へ進入し赤松峠に精兵を備へ日向豊後の國界と固く守れり。此時賊兵の方にては豊後路を破て四國に押渡り進で京阪に迫り一擧して思ふ儘志願を達せんとせしが豊後口は却て官兵の爲に打破られ人吉口の薩摩の界まで退退けられて賊勢日々に衰へ唯滅亡を待のとなりければ諸將等の大お氣を嘆だち如何にもして今一度重岡の賊と破んと諸將會議となし謀を議と二十日第一旅團の參謀長岡澤中佐黒木中佐第四旅團の坂本少佐と俱に総軍二千七百人を率して晝夜軍艦に乗じ天明重富近傍に上陸し迂回して城後の賊巢を衝んとす。賊の重富に在るもの愕然として兵器を執て防守す。官軍大に至る賊遂に支ふること能はず。午前五時半重富を放火し一大隊を停めて此地に備へしめ我兵三道より城下の背後に向つて進撃す。賊兵所々支ふると雖も且破り且進みて白銀坂を登り吉野原に出づ。時に春日龍驤の兩艦へ加治木お砲撃し重富の官後に備ふる軍も次第に進みて沿道に放火す。時に城中より礮山方面の背後に火起り関の礮砲の響き亂轟するを以て衝背軍の既に至ると知り大沼少佐二中隊を率ひ結山に向つて進撃す。此時軍艦と絶へず大小砲を發して賊壘を打結山攻守の賊と有名の行進隊なるを以て要地は堅壁を固守して應戦す。我の砲丸屢々命中す。さども動かす頗る雷萬春の徒多し。故に激戦時を移して未だ抜くこと能はず。

衝背軍の放火漸く逼り、既に山の後咫尺の地に火起る。我兵大いに力を得て関の聲と發し躍りて賊壘に突て入る。賊遂に支ふること能はず。壘を捨て走る。結山及近傍の山壘隨つて陷る。我兵放火して進み背後れ兵と連絡す。二十四日午前六時に賊將精兵を率て赤松越本道と外二口より豊後路に打て出不意に重岡の官軍を襲たり。官軍の方に不意の事あれば大お狼狽し已に危くも重岡を捨く退かんとせしが將校兵士等忠憤の志、撓まを先途と戦ひしを以て辛して賊兵を追退る事を得たり。此日の戦争は午前六時より午後六時迄終日の大戦にて敵味方の死傷最多し。翌二十五日未明に官軍の進で勝地村まで攻入しが賊兵は延岡に迫らん事を懼れ必死と究て官軍に抗敵す。官軍大に利を失ひ勝地峠まで引揚たり。然るに賊兵の益々勢を得て勝地峠の後を斷ち前後より狭んで攻立けを官軍復び利を失ひ苦戦して退きしが同日午後八時に至て佐伯お在る官軍二中隊大いに奮て敗軍を助けたる同日第三旅團の一軍鹿兒島城の背に達す。賊兵迂回して我軍の背後を圍む苦戦して是を退け、遂に城下に入る。二十六日官軍再び勝地峠を取返せり。此戦ひひて味方死亡者五十名なりしと云ふ。同日川路少將兵を率ひて鹿兒島に至る。此日第四旅團第三大隊を以て鹿兒島と發し吉野お向つて進む一軍の戸越よりして一軍の桂山よりして一軍の丹田遠の本道より進みける。戸越より進む者戸越山上の殘賊と撃ち遂に壘を抜く。一軍實方の前山に賊を撃ちて是と退かしめ杉木馬場に至る。賊俄に兵と分つて短兵衝いで来る。既にして援兵來りて大に勢を得。賊と撃賊屈せ。午後二時川上お向つて走る官軍諸隊を收め桂山より雀ヶ宮戸越を守る。同日肥後口より日向延岡に向ひ、旁ら豊後口の官軍と相應援する。一隊の勝地峠の賊勢ひ熾にして豊後口の官軍數々苦戦するを知り賊の兵勢を分たしめんが爲め六月廿七日と以て延岡口に侵入し兵を兩道に分て一は赤松口よりして一はサルケヤ峠より進で直ちに赤松口を襲はんとせしが不意に敵の壘壁

よ近きとるを以て戦を挑みたれども日は西山に没せしを以て戦ふに由なく一旦兵をサルケヤ時
 の前面まで引揚たり又同日鹿兒島の賊の圍み既に解て賊城下と去ると以て斥候隊を谿山伊集院
 市來へ出し又一大隊を肥後街道川内川へ出し宮の城入來を経て第三旅團の右翼に連絡し豊後口
 の軍と兩道に分ち一は赤松口一は豆壳峠口より進んで徒行路峠の賊勢を挫がんとす此夜雨甚だ
 し赤松口は一隊を新道より一隊を古屋へ出し鏡村に進む豆壳峠の松葉に進む兩道俱に潤流水漲り
 ると能はず工兵橋と架け兵を渡す豆壳口へ進んで猿燒峠に至り賊の哨兵を布くを見る是に
 於て赤木峠を攻撃し赤松口へ鏡村に入る賊の橋を徹して哨兵を置く七月二日に至り豊後口の官
 軍再び兵を三道より進め一方は楠原より一方は中村より一方は尾楠より侵入せり楠原口より進
 む者大に苦戦して遂に高千穂第一の要地を奪ひ尙延岡へ進入せんとす然るも援兵のなきを以
 て豊後口の兵の進むを待て共に延岡に入んと決す○賊軍行進隊は降伏の事并に薩廣口の官軍進
 撃の事○七月一日第二第三旅團兵を合して大舉して栗野を攻撃して午後一時に至り漸く横川を
 陥れ二軍俱に本營を横川に移す此日別働第二右翼皆越村哨兵所に賊兵七中隊許來襲ひ守兵
 を走らせ進んで坪屋村を奪ふ高島少佐之を聞き急に走って坪屋に至り苦戦して賊を逐走らせ坪屋
 村を復す此夜第四旅團の軍門に行進隊二百十人來りて降るを乞ふ其隊長相良五郎左衛門なり此
 隊中の中最も精悍ものといふ豊後口の軍エウウの山の四胸壁を抜き進んで第五壘に至んとす賊
 の迂回兵に遇て原線より退く第二第三の旅團兵の俱に加治木に入らんとす途上シゲヘ村の賊は棄
 て置し火薬糧食を獲る翌三日別働第二方面米良へ來り襲ふの賊あり米良の地方は三方山の麓
 薩廣横谷等の險要の地あり就中横谷の如きは人跡の通せざる處多く喬木森蔚とて日光を漏
 らす白日も冥濛して殊に濕氣甚だし倍賊は我軍の寡兵あるを知て虚と衝きて再び肥後地方に

し入んとす此日賊徒柵を破て壘下り至我兵之を見く一撃するに銃丸雨の如く賊辟易して逃走せ
 る又豊後口には頗る激戦あり賊の勢ひ猖獗ふして梓峠の側面より連砲撃す官軍の遊撃隊は
 多勢にして却て意の如くならず因一且梓峠の哨兵を退かし城の越に據り防ぎ守る賊の再び豊
 後に進入せんとする者二千八人許ありといふ四日大山少將加治木に轉營す別働第二旅團の米良谷
 口の賊又横谷と襲ふ其勢ひ最も強し官軍大砲二門と備へ錫彈を發射す賊又破れて走る第一旅團
 は新町の賊を攻めて劇戦して漸く二壘を抜といへども尙餘る所の壘數ヶ所あり之と撃んとする
 折柄我迂回兵壘側を突き網の瀬川に大哨兵を置く賊兵兼て長する所の短兵刀と振ふて進み來る
 といへども我軍克く防ぎて賊兵伎と逞えうする能はず延岡の賊重岡口長瀬は左翼より潜に我軍
 此背後に出づ我兵撃てこれを撃つ賊退いて黒土峠の賊と合して急に城の越に逼る五日第四
 旅團加治木より國府に進んで賊壘を撃んと加治木を出づれば賊兵の在るを見て急に之を走らす
 尾撃して國府の村七新川に達す此日谷少將延岡攻撃の豊後口にいたりて之が指揮を執す我兵の
 勝地峠に進むもの迂回兵と出して期して天狗山を攀ち一溪を廻りて賊壘に逼ると雖も迂回兵の
 未だ達せざるを以て其地に守備す○人民の從軍を願ふ事○西國に事を擧たる人心に方今の
 民は何をも新令の出るに不平を唱へ殊に我國三分一は士族なるに一旦封建の制を廢せらるる
 り各方向に迷ひ或は商法或は農業工藝に手を着けるといへども素より手ふ入たる事業にあら
 ざれば爲す資産を失ひ一家も傾く者多くして活路に迷ひ今にも餓死せんとする有様なきは吾等
 が義舉を見て大早の雲霓も雷す踊躍て軍に従ひ起るに必定ありと謀て兵を擧れども我國の人
 民あして何ぞ一時に之に乗して妄りに従ふ者あらんや且當時一般の人心漸く封建の非なるを悟
 り明治の聖世と慕ひ自治の精神と起し全國の力を擧て以て外國に抗せんと欲するの勢ひを有し

行進隊二百
ト人第4旅
團の戦門
ノ降る園



十に八九は西陲の暴動を是とする者ありす全國舉て幾分の無氣無力の小人あり是等の輩縱令賊に加はりたりとも固より取に足らず幸ひにして無氣無力の小人少く皆正義と唱へて官軍を加らん事と仰望し諸國より雲の如く集る者日に陸續として絶えず依て六月中旬より七月上旬に至る迄の事と集めて人心の方向と誤らざりし一端を觀さんと爰に舊南部藩知事南部利恭君之親ら岩手縣へ出張し舊部下の士族へ左の通り告諭せり

今般岩倉右大臣殿の内命小西海の賊徒征討の官軍長陣に相成且つ暑氣に向ひいに付別段巡查を召募し新撰流團編成の涉内諭にい依之其許舊藩岩手秋田青森三縣下は舊臣不少い趣故年來の情義と以て新募は應じ候様説諭可給其段の三縣令へも可中遣旨懇々預涉依頼候天下安危の秋は際し固より傍觀可致に無之特に此度の儀と専ら舊藩々各自一手の働可被仰付涉含ふ有之仙臺秋田津輕等よりも志願可相成間地方官の募りに應じ上り皇國は鴻恩を報じ下り國民の義務を尽し候様數代の舊好を以て偏に頼入也

明治十年六月

從五位南部利恭

若の如く諸方の華族夫々懇篤説諭せしかば豫て朝命を蒙り出兵を望みたりし士族なれば踊躍して競ふて徒軍を願出たり尤も舊藩主の説諭を待すして自ら奮て出軍を願ひ出たる者も亦多數なりと云先青森縣を六十二人石川縣を三十五人山瀧縣より百三十六人柞木縣より百餘人福島縣より二十四人新潟縣下越後の高田より百四十六人宮城縣より四百人岩手縣より百五十八人崎玉縣より八十四人又越後の高田より四十四人靜岡縣より五十五人新潟縣より三十五人茨城縣より十八人長野縣より二十四人山梨縣より三十四人岐阜縣より五十三人石川縣より十五人山瀧縣より五十五人福島縣より六十三人秋田縣より鈴木惟孝關貫一の兩人が一番組二番組の兵士合せて百

六十人を引率して上京す又新潟縣より十七人佐渡國より十三人秋田縣より八十人群馬縣より百人新瀧縣より二百八人靜岡縣より七十五人又長野縣より二十三人靜岡縣を百人神奈川縣より二十五人斯の如く各縣を日異にして前後に願ひ出さりと云其他軍川金を寄附し官兵の死傷者を救ふ爲社を設立せん事杯と願ひ出る者絶せと云○豊後肥後口の官軍勇戦の事情豊後口の賊は大に奮激して此手の官軍を如何もして打破り是非に四國へ渡らんと薩摩口及び肥後の人吉より軍勢も多く且精銳の兵を以て官軍に抗敵す依て官軍も最も防禦に苦しむ爰も官軍の臼杵の賊を追拂ひ繼て勝地峠の戦より格別の戦ひもあらざりけるが重岡口の賊其勢ひ容易に屈せず既に七月の初め三四日の戦ひに賊尤も奮戦し臼杵の右翼に襲ひ來り我兵地理の不便或に已を得ず退き駒崎長峯に於て防戦せり此賊に向ふ官軍熊本鎮臺兵及び後備軍遊撃隊にて凡六千餘人本營を重岡に置けり其戦線は海岸日向豊後の界成黒澤が始まり石神越陸地峠豆殼峠赤松峠城の越黒士峠板戸山柳瀬木浦と經て桑原山の麓に接し其間十四里許あり其中黒士及び板戸山の半面と其後の戦争に賊の奪ふ所となるを以て之を取返さんとして七月二十六日官兵は進んで田代村より雉子山と渡り兵を潜めて板戸山より迫り賊の不意を襲んとせしが尤も有名九折ある山坂にて難苦を凌ぎ此嶮岨と打越て行程は深夜に至り官兵殆ど方向に迷ひたれば明月が對ひ暫く休ひ二す七日午前三時となりて思ひ寄ざる所より賊の在所を開き知れば直ちに銃鎗を揮ふて壘中に跳り入り忽ち賊數名を斃す賊兵不意に出たる事なれば大に狼狽し敗走して黒士峠の賊壘に入り又其中半は臼杵の賊壘に走れり官兵透さず追驅遂に四壘を奪ふたり時既に午前五時なり此重岡口官軍の谷少將が率ゐたる熊本鎮臺兵にて尤も勇猛の聞へあり殊に熊本城中に於て屢苦戦し鍛鍊せし兵あるゆへに此戦ひの如きは實に容易なることあり且つ六月十七日に豊後國三國峠

登るべからず即ち此山に對する天狗山に繞りて大砲と射撃して又賊を走らす進んで勝地村に
 放火す此役賊壘を抜くこと四十八とふ官軍綱の瀬川の大水を渡り敵を襲ふ事○七月二十八日第
 四旅團兵田野を發して清武を經中村又入んとす賊兵七百八小丘に據よりて邀へ撃つ我が兵田間
 に在て砲撃と賊勢甚だ勇猛なり我兵頗る苦戦す遂に左右より迂回りて壘を陥る賊宮崎に向て
 走る第二旅團別働第二旅團相合して神山村の賊と追ひ是を第二旅團の新町を陥れ別働第二旅
 團之高岡口を攻撃廿九日第四旅團と赤江川を隔て對陣す第二旅團は綾村より進んで梁瀬に及る
 橋谷坂を敗り尾撃して高岡を陥るに第三旅團七中隊は國見峠を越え去川を渡り繼で高岡に入
 る第二旅團の佐土原に進み第二旅團の宮崎を攻めんとす爰に野津少將の第一旅團の舟尾本營
 を置こと前前に説きしが豊後口の官軍と謀じ合せて延岡を襲いんとす賊兵も百方討奪を逞し
 たるに先一旅團の線内成獅子川峠及西の内を攻め破りて三田井の方面に突き出て危急の場合を
 逃とんと軍議一決せしかむ七月三十日に勢ひ猛り獅子川峠西の内へと押寄せたり官兵の固少
 の兵卒に不意を撃れしことなきば流石に勇猛の 闘へある近衛兵辟易して無念ながら引揚た
 り爾れば此手の官軍の大に苦心し若し此所を保ざる時は唯一旅團の耻のみならず豊復の
 官軍の体面に係り且大なる不便を生すべしいざ此を先度と進め戦へと嚴しき下知に兵卒と競ふ
 て路込々々晝夜を分らず攻撃せまが漸く八月二日に至り 恐く賊兵と追退け奮戦あ復したり然
 るに賊兵は遺憾に堪ざりしが責ての官軍の一壘お切り入りて官兵を驚し恨みを晴さんものと此
 夜の暗黒に乗じ數十人の精兵刀を揮ふて星山の哨兵線へ斬入りたり此手の官兵の此等の事に熟練
 たる者少くも少く驚く菊色なくすは一大事と賊に應じ烈しく狼狽せしかり賊の却て駭きて散々に
 逃走れり四日征討総督巡視として郷の城に至る此日第四旅團遂んで斥候隊を襲ふ津市に出

す五日第四新選二旅團進んで美々津に入る賊川と渡りて退ざき北岸に胸壁を築きて防戦す我進
 んでこれと對戦す賊力めて防禦と七日橋に各旅團兵の高鍋に在る者網島美々津富高新町の攻撃
 部署を定めて別働第二旅團一大隊の岸野より出て險阻の地を過ぎて坪屋村に至る八日より大雨
 益を覆す如く降來り須臾も暗間もなく同日まで降續き川流の大小を問はず漲りて平日との
 七八尺も水嵩を増し橋の大概落流れ山岳堤防も大く崩れて民の水害を防がんとするもの路頭に
 騒し賊の陣取せる下流の方の水四方より聚り合して田野を履し其狼狽言ん方なき景况なれば官
 兵の得たりと悦び十日に夜潜に網の瀬川の満水を渡り河岸の賊を襲いんと忽ち壯士等漲る深瀬
 へ跳入り援手をさつて泳ぎ附きたれを殘る面々も之に氣と得て跳入り遂に皆此河を打渡りたり
 直に大砲と要所に据村落に火を放ち勢ひ烈しく敵の陣營を迫り一時お咄と押寄せたり賊は數日の
 戦ひに身軀大に疲勞して殊に降續たる雨に河水の漲るおより大お安堵の思ひとなし此ありさま
 には官軍も中々襲ひ來るはよもあるまじと打便て休息せしが黎明の天候にすさまじき物音
 せしかば何事やらんと驚きし間にや官兵の銃鎗を揮ふて飛入りすはと起き立つ賊兵と銃器
 と探るの暇もなく潰へ乱きて走りける官兵の逃るを追て鬼燈平の山頂を奪ひ夫より山脈を傳ひ
 打殘したる賊徒を逐しが賊のまた榎木峠によりて拒ぎ戦へり官兵の三手に分きて攻立けれを賊
 兵も必死となつて防戦す我兵の賊の左翼に出て銃鎗を打振て跳り込りしかば賊の支へがたくし
 て麓の方へと逃走れり我兵の透さず山上より尾撃して賊壘數多乗取り遂に推畑村迄打入り猶
 も賊兵の追窮めんとす三手に分れて跡を追ひしが賊の亦杉の木峠に敗兵を嘯集ひ固く守備を
 なしたるける官兵の如何も彼等が防ぐとも是非に打撃さんと突進せしが十一日に至て悉く此
 賊を退退けり○熊本縣權令人民を撫恤する事○熊本縣下は數月の戰場となり壯年の若り人夫に

使役れ農工の業に従事すると能はざるのみならず兵火の爲に屢焼れて灰燼となり老幼婦女は遠く親類の家に身を寄せるもあり又親類ともに兵燹に罹りし者の身を寄せる所なければ路頭に狼狽して實に見るさへ憫れなり熊本縣令の非常な尽力せられ其筋へ伺ひ濟の上左の通り其管下へ告諭せられたり○其區内兵燹に罹る者取調べ差出に付調の上其筋へ相伺ひ處非常の國費多端の際に以て得共特別の多詮議を以て等級に應じ別紙は通り多賑恤金として被下賜の條此旨相達し事○別紙零二但本月某日を以て金圓被下賜の條請取とし出頭可致尤賊徒に黨與する戸主へと下賜せし事○明治十年七月二日○熊本縣令富岡敬明○斯の如く布達せりしかば衆人の喜悅の一方ならず感涙袖と溼せり其外縣令より金二百圓大書記官北垣國道より金百圓を惠れ其外漢大の賑恤せし京都眞宗の法主大谷大教正にて人民救恤金として一萬圓を縣廳へ差出され其他末寺へ百圓以下廿五圓までを施與し權家は總て米一俵と金一圓八十錢宛死者へと金三圓傷者へ金一圓五十錢又長崎の軍醫病院へ金千圓熊本病院へ金五百圓而して縣廳へ納たる一萬圓に猶數萬圓を足し縣令と熱識し妄りに人民に與ふるときは却て人民に怠惰の情を起さしめ無益に屬すを何か授産の資本に供へたしと衆議の上當時縣下に於て水車の方を以て織機の器械を發明せし者あり然るに其資本の足らざるより未だ從事せざりしが縣官と熱識せられ此資本に充たれる事に決しよりと其他施藥場を設立し醫師を雇て治療を施せりと云ふ○官軍悉く延岡に會す○倍十二日第一旅團に當る所の宇納間口の賊に至つて弱く曾木口の賊は尤も強く蓋し之を聞くに曾木口は賊魁桐野利秋自ら指揮する所といふ此日宇野間に於て別働第二と連絡す我右翼の第四旅團及び新選旅團は細島より延岡に向ひて進軍する小賊門川を隔て大小砲を撃ち放つと敵の如し十五日官軍悉く延岡に會す是に於て賊徒追撃の部署と定め第四軍團別働

第二旅團を左翼として進撃し第三旅團を以て延岡中外の守備に充て又第四旅團は現に大武村に戦ふが故に之を攻撃兵の右翼となし無鹿の山に向ひ別働第二旅團は左翼となりて長尾山小向ふ無鹿の山に峯五有長尾山其西に横たる兩山の中間を重岡の街道とす所謂梓越これなり既に第四旅團の奮進してその第二峰を奪ひ大砲を置き絶へず射撃す賊亦左側的一方より據り砲撃す賊兵忽ち第二峰に向ひ関を揚て一目散刀を揮ひ我軍を衝突し登り來る官兵克く戦ひしも遂に支へがたくして一先山下より欲ぞく既にして奮進して賊を麓に追ひ下し進んで北川の下流を渡り河お沿ふ所の賊壘と抜き取り戦線を張て北川に舟を架せんとす此日攻撃兵の左翼別働第二旅團は地形を按じて兵を部署し山下の稻葉崎村に大砲を設く山田少將はまた攻撃の令を出さず既に山上の大砲二發するを聞き忽ち鯨波と作り大に振り起り堂が坂小梓越より千餘の賊兵一團となりて研て入る又山上の賊一齊に大小砲を亂發す其勢ひ疾く雷のごとし我軍嚴重に陣を固めて應戦す進退意の如くなるを以て賊徒奮撃すといへども我陣少も動かす此時我軍の先分つ所の右翼兵漸く進んで左翼の賊を山上に追登せ顧みて賊の我正面兵と戦ふと望み忽ち一隊を分ち來りて賊の側面を衝く賊是に於て少く退くの状態を顯し我左翼に繞り小梓越の賊と合せて亂れ進んで我砲隊と侵さんとするあり激戦數時賊漸く勢ひ挫け退き走る我軍機に乗じて長尾山の半腹に至る時に我が右翼兵の山の麓の胸壁を奪ひて堂が坂に至る此堂が坂の嶮岨の要地にて之に必死の慄悍賊と據守し以て大小砲を撃かけ我兵容易突き前むものなし折こそよけれ浦生郷の陸伏人一中隊陣前に突出し関の聲を揚げ銃鎗を振かざして賊壘に衝き入る賊は兵を十字に配りて狙撃すれども屈せざる一進んで壘下に至る此時山縣參軍始め各旅團の將校皆來り會して此に注目す我右翼兵又突進して一齊に刀を揮ひて賊壘に逼る賊亦抜刀して出て取ら我兵縱

横無尽に祈付くれば賊遂に銃鎗を棄て散々に走る我兵進んで山壘數十を抜き小梓越に登り又仰
 で長尾山を攀ぢ登る此時賊の長尾山の半腹大樹の蔭に據り我左翼兵を遮り戦ふ既にして右翼の
 堂が坂小梓越の陥るを聞け勇氣衰へ漸次に退く我右翼兵の勝に乗じて進み至る勢ひの烈しきに
 辟易して遂に大に潰へ乱る我軍進んで長尾山を奪ふ此日捕虜の言ふよれを西郷桐野自ら軍を指
 揮すといふ又桐野の初め鹿兒島を出陣するときは自衆に向ひ謂ふ我に當るものは山田のみ山田
 は奥羽の役に従事したる時吾と共に相可に推重と今東西相分れて其伎倆を試みるも亦一の奇遇
 ありと○可愛嶽激戦の事○斯て賊は日向國可愛嶽の麓に根據を定め二三十町の外に戦線を張る
 と雖も前日の敗軍に大に挫けて奮激するもの甚だ寡く官軍の旗色を見て降る者多き景況をば
 官軍の機に乗じて賊兵を撃ち盡さんと十八日大舉進軍れ約を定先午前第四時可愛嶽の絶頂に陣
 を張第一第二の旅團を以て本營とし僅の護衛兵を残置き其他の兵を左右に分ち麓のヒョウノ村
 北東西より進軍せり然るに一戦は防禦する者なし扱の前の戦ひに疲れて睡眠せしが好機會な
 り一撃の下お塵しにせんと近く馳せ寄り一度に咄と関を作り賊營に馳入し此のをも如何に
 賊兵の更に一人の影たもあし我兵沮喪して忙然たりしが猶進軍の議を發す折柄賊將の前の評
 議に孤軍を分配して突出するの策の得る者にあらざれば一團となつて衝突すべし而して官軍
 の二旅團の前軍既に道を左右に分ち哨兵線を進め長井の本營に向ひ賊喉を扼め賊背を折んと
 故に山嶺に設くる所の中堅衛兵頗る寡し賊魁既に偵りて之を知り中堅を一蹴せんとヒョウノ村
 の根據を發し桐野貴嶋は三百人に將とて先陣たり中軍は西郷親少三百人に將として後陣に逸
 見百五十人を率ゐる村田別府其外以下の諸將は今日と以て最期の一戦と決し斷崖絶壁無徑の地を
 陟り可愛嶽の絶頂に達し第一第二の旅團本營ふ不意に突入りたりこの日の大霧山嶺を包み咫

尺を辨せず第一旅團の司令長官野津少將の豫て此日の勝敗如何あらんと先隊の報知を待居たり
 しが砲聲一發耳に轟きければ兵卒と戒めて明りに發砲する勿れと言ふも未だ終ざるに四方より
 関の聲俄に起り賊兵拔刀よて短兵急に營を衝て入る向ふもの披靡す第二旅團の司令長官三好少
 將も危急の場合なりしが兼て強勇の闘へある近衛隊の狙撃隊は野津少將の護衛されば恐るゝ色
 なく應戦し其他併せて七十八人必死と盡して防戦して賊と相くると三回賊の前軍營を衝て山嶺
 を直下し曾木小向ひて走るものあり我兵戦ひ急お且溪水横流して遮る賊兵の山を下るを遮る
 とを得ず加之す彼の衆にして我の寡あり因て其銳を避けざるを得ず而少將及び參謀部の人
 々辛う玄て虎口を遁れ日の谷を越味方の軍に達するを得ず而して賊の前軍走りて二旅團本營
 の兵廠を衝きて糧食を奪ふ二旅團の一旦卻く者再び進んで賊の一軍を遮る却説響に賊營の空
 虚を窺ひ失望せま我兵の賊の踪跡を偵察する折柄我嶽上の本營に當り俄かに發砲の聲頻りなる
 と聞くより直ちに兵を嶽上に引揚んとする途にて野津三好の兩少將に會ひ之と聞き遺憾なれや
 と速に絶頂と奪ひ返さんと切齒扼腕各絶壁を攀登り嶽上の賊と打合厳しく攻立けり既ふし
 て夜一時賊の砲聲熄む故に昨十七日絶頂に在し官軍も本日分室に在り賊の昨日分峰ありし
 に今日は絶頂小據り其地位此に一變せり○西郷等突出の議と爲す事○十八日西郷以下賊將等兵
 三百を率て可愛嶽の圍を潰して突出す其勢ひ風雨の如し官軍支うる能はず是より先き賊軍の長
 井村を保つとき諸道の官軍十重二十重に取圍み益々迫りしかば陰謀事の成ざるを知り諸將及び
 私學校黨の兵と本營に會し西郷のいへるやう我不肖ながら諸君の推す所となり事を擧し時運
 のあらざりしが七ヶ月の間戦へども悉く敗れ今日の極に至る然るに幸に諸君の勇武絶倫百戰
 屈せざるの功勞により僅かに區々薩隅二州の士と以天下の大兵に抗敵せまは丈夫の身に取て

遺憾なし死すべきときも死せざれば死するに勝る耻多しとわれ諸君に於ても然かるを知る徒づらに餘勇を貪り士民と殺し武を黷し無智の兵卒をして命を鋒鏑に隕さしむる此吾輩の好まざる所今我屠腹して以つて此民を濟はんと思ふ諸君の意見は如何と諸將 默然として言を發するものもなかりし獨り別府新助前み出ていへるやう西郷大將の滲詞にも似すか今我兵敗餉の餘りを以てすといへども尙ほ精銳五百の兵あり之を以て一度官軍の一方を打破り故郷なる鹿兒島に突出して蓋ねて再舉を圖るべし縱令半途にして勢ひ盛り力尽き骨を野外に曝し身を鋒鏑に膏すとも亦鹿兒島の男子たるも負かず今更手と東ね自刃を以て姑息の小心を守らんやと頻りに諫めしかば桐野等も皆其議を賛成と是より於て突出の議決し酒宴を催し西郷は頻りに杯を傾け小歌を誦ひみどして愉快の体を示しより○兩參軍九少將城山攻撃を議する事○爰に廿三日兩參軍九少將相議して城山を攻撃するの約を立て及び攻撃の部署を定む其立約に曰く各軍相圍み完く備さるの後の素より攻撃れ手筈をささる可からず然して此の役や圍を守る一として攻撃を二とす又其攻撃をあす自ら平常の攻撃と異らざると得ず因て攻撃の約束を立る左の如し此攻撃は各軍より特に攻撃兵と簡び抜き出してこれを擔任るを以て他の合圍兵の一は其防禦線を守り守るを以て務めとし攻撃兵の進退に因て其位置を變換することを得ず撰抜の攻撃兵は各自に任じ苦戰死闘の急あるも後軍の應援兵と頼む可らず攻撃兵に一人毎百五十發乃至二百發と負しめ着目の攻撃点を占め領する迄の彈藥其他の運搬となすことと得ず攻撃兵其目的を達すること能はずして却退して賊兵之と尾撃し突き出んとする時の合圍兵の彼我を分たすこれを統禦し以て賊徒を卻くべし且つ我退く兵を防禦線内に入るも賊徒の爲に尾入せらるゝの恐ろしきことを確と認むる場合に於ては臨機應變の處置あるべし攻撃の事情より攻撃兵より應援を乞ふとも軍



諸將城山の攻めを議する図

基秀

團の號令なきとき、決して他の部より狼りに其守りを捨て赴き援べからず若し賊の精銳我合圍線の一部を衝突するに及ばず甲乙互に應援してこれを打ち破るべきに當然といへども自己の防ぎをしつ脆弱にいたらしめざることを要す各軍司令長官のその擔任合圍線の中央もしくは便宜の地に出張して始終戦ひの景況を注視し合圍兵の指揮をなすべし攻撃兵無難に其目的を達するとも合圍の各軍の軍團の號令をうくることあらざれば其圍みを解く可からず攻撃部署を定めて曰く此の攻撃の一に先に決定する所の攻撃立約の主旨に依り各旅團鎮臺より各一中隊半乃至二中隊の兵を簡拔しもつて攻撃兵に充て又攻城砲隊司令長官大山少將の其砲隊を以て之を助け其の攻撃をなさしむべしと○河村參軍河野山田の兩賊に兩會の事○時しも田の浦にある河村參軍の營所へさして磯の警視出張所より兩人を賊に口供を添付して護送せし賊は即ち河村山田の兩名にて賊中にて屈指の奴輩なり尉官直も河村參軍へ上申せしかば河村參軍の口供を熟讀して嗚呼最早賊は於り勢緩ま窮り謀計の場しか今詮術なきに斯く使者を出して敵情を探らしめんとするを淺間玄さよ我軍で彼等の術に陥らん去来く今彼に面會して我より渠の情實を糾さんと雖も二人を延見して曰く其方共何か情願の子細も有ることなれば憚らず陳述せよと折角に情願の旨意と徹底させずものと思ひて斯の罷り出たとなれば最町噂小陳ふれば兩賊いふやう巽に大久保内務卿川路大藏視等の内命を以て西郷大將を暗殺せんとして中原等の者を鹿兒島へ差廻されしにより西郷大將の驚き入吾如何なる罪のあるにや刺客暗殺れとに及ばれし事實に思ひ寄ざる事なりと因て此事實を政府へ尋問せんとて兵士を引俱しく熊本を通過せんとする際し熊本鎮臺兵之を遮りし故余儀なく此に及べりと爾は我政府に於て如何なる事由ありてか一點無辜の西郷をして征討の命を下し斯る所爲に及ばれしやと揚言して陳ければ河村泰

軍と呵々と打笑ひサテモ憎にあまりある賊輩哉畏も 朝命征討の正意の在る所を聽たし既に言語道斷れり西郷不於て未だ征討の御趣意のある所を知らずか決して然る事あらざれば已が野心を隠蔽して其名義を立貫かんと今ふ於て斯る申分最鈍しけれ益朝廷を輕蔑にする其罪免れ難し然らば去りなご汝等に假に之を知ざるものとして申開かせべし能く謹んで承れよ今日政府に於て罪われれば社官吏を以て糾問せられしなり汝等西郷を推て兼て兵亂を起す計畫あれども流石天下に憚り徒に名義の無と愛ひ未だ果さるるところ中原等の歸郷を猜疑ひ且道路の風説耳を聞得て中原等を捕へて苛くも拷問し其苦痛に堪兼させ口供と作て其口供に強お摺印を取り其口供を妄りに信じ証として政府に尋問するを名とし兵を起せしものなり汝等百方之を覆はんども其も隠をたるより顯るゝはなし今更無用の才立なり總合熊本に於て官兵の遮るとも眞に正理を立るものなれば敢て之に抗せず尋常小軍門に來り穩當に情實を陳て然るべし左はなくて熊本に於ても先に發砲し官兵を傷け且市民の金穀を掠奪て良民を害す或の之を脅迫て出兵せしめたる如き何ぞ野心なしと謂可んや三尺の童子も辨知る所なり況や天下に問ふ誰か之を賊に称らすと云んやと威儀儼に理非曲直判然に説示さ流石の兩賊も屈服して頭腦に轍し返と言もなかりしが恐れ入てぞ見へにける其時河村參軍の兩人亦向ひやと云をけるに汝等今演開したるにて正しく賊の所爲なるとが心胸に辨へ得たりしやと賊の初めの氣色も翻然りて最肅慎で容と正し答へけるよは實に貴官に仰せれ如く一も違はず西郷大將の吾等も方向を過ち名義と作てて妄り兵を動かせしなり今更悔しも所詮あしと雖も速に歸營して西郷初め一同又説き諭して各自其罪を謝せんさめ自處する所あらしめんとぞ申しける是に於て河村參軍亦賊に向ひて再いはれけるに前に演たるに我朝命を受て職務の權利を以て應

接せしことなれば公事にて私事にあらす私情を以て之を云ふ西郷といふ吾幼少より其交り水魚も
 密ならず今願慮すること淺からず因て一言と寄せて其情と尽さん汝歸りて之と告よ彼が心底に
 も亦思ひ寄するともあるべし彼が一子菊之助の我甥と共に可愛嶽の戦ひも生捕れたり又彼が妻
 子は我も所存あれは必ず宜く取成べけは意を留め殘す勿れ吾が計にて今二十三日午後五時迄
 の諸口の進撃を止むるゆへ降伏するとも討死するとも速に進退を決すべし告たきこととは是迄
 おもひ必走躊躇するときは亦進撃に及ぶと竹馬の情を言に含せ最親切に諭されしかば鬼の目も
 涙の諺に漏す兩人の賊の只管感涙に咽び寛仁の程ぞ有難く争で之に背くべきを願は速く
 歸營と許よ一時も早く恩義と衆に説示し共み處する所と促さんと言上に及びければ少く所存
 のあるなきば山野田一人歸營を許すべし河野と今歸營相成らずと直に山野田を放ち還し河野の
 賊滅亡の後九州臨時裁判所に於て除族の上懲役十年の刑に處せられたる○西郷隆盛最期の決議
 と爲す事○夫人の困躓に際し其進退を決するに於て智慮の淺深と機敏迂魯を知るに足る今試み
 に西郷の最期の決志を視て其智慮を知り玉へ抑々山野田の參軍に放ち還れ急ぎ城山の營に歸り
 て河村參軍と應答せし始終を洩なく物語り且河村の親情の在る所を寄たる一言をも透一告けれ
 ば西郷も感ずる所ありやいひけるやう實に左もあるべし死事と是に於て衆を集め各々其意見
 のある所を問ひけるに或は曰く我輩西郷氏の説る、所を信じ之に左袒し一旦義兵を擧るといへ
 ど大將の運命茲に尽なむ只一死以て西郷大將に尽すべきを知る或は曰く朝政の善良ならざる
 を憤り西郷大將を激勵之を名義を求め君側と清めんとせしに時運の至らざるか事終に茲に窮
 る此上の生て姦吏の制する所とならんより寧ろ潔く墳墓の地に討死なし義烈の芳名を千歳に遺
 すに如すと或は曰く一旦賊名を得しからの生死共に遁をがたし然るに非を知り是に就き逆を去

て順に歸するの古來其人少らず因て吾輩も出て軍門に降り少く汚名と雪がんと或は曰く否々
 不幸にして事遂に迫るといへども何ぞ阿容く降伏をせん戦ひ敗れ敵に降るゝ勇者の笑ふ所な
 り杯と意見の異なる宛も人面の如し西郷衆に向ふて云ひけるや各の議論何をも理あり然に耻
 を忍び憤りと堪て後世に名を揚げし者張良韓信のなす所と盡みて知る我不肖なれども一旦
 陸軍大將の印授を受け龍顔一笑して微忠を認めらる一朝廟議の合ざるより勇退去て隱遁せしと
 諸君の推す所とあり兵を擧しも運拙くして勢茲に窮る何の面目あつて餘命を惜み苟にも降
 るを欲せず我の潔く死せん諸君は意の敢て制禁す因て降らんと欲する者も降れよと斷言の中
 へ降伏を好まざる者も西郷大將の言我輩の願ふ所なり何所までも大將の御命を助けんと齊しく
 陳ければ其心底こそ感荷されさらば愈死戦に一決し其趣を河村參軍に報すべしと議決せり
 扱て官軍にの氣て山野田の還るに方りやし含めし廿三日午後五時迄と進撃を見合されしかど既
 に午後五時も過たるに何等の事も報じ來らざれば進撃に及ぶの評議ありし所へ賊軍より彼議決
 と報じ來りしとて即ち命を傳へ二十四日午前四時を期として大進撃とぞ定められり○城山
 に據築する賊悉く滅亡の事○燭は暗し敵行虞氏の涙夜の深し四面楚歌の聲と謠し聲も項羽
 の耳に入てい如何なる感傷を起したるにや項羽自ら震ひ言ふ吾戰の罪にあらん天我を亡すなり
 と最期の一戦に決し慨歎の言なるこそ寔に想ひやられたり今西郷氏も項羽に勝るの英雄なれば
 只時運の至らざるを慨き九月廿四日の夜こそは項羽と同感なりと思ふ編者の一片の心なりと記
 載ると讀て看客の秀筆蕪詞に同感を惹起させと誹謗をも願ひざるなり抑々九月廿四日午前四
 時東雲の未明に官軍は一發の號砲を合圖として各部署口に向ふ大山少將が指揮せらるゝ所の攻
 城砲隊の淨光明寺山の砲壘より數門の大砲を連發すると齊しく同時に四方より突進して頻り

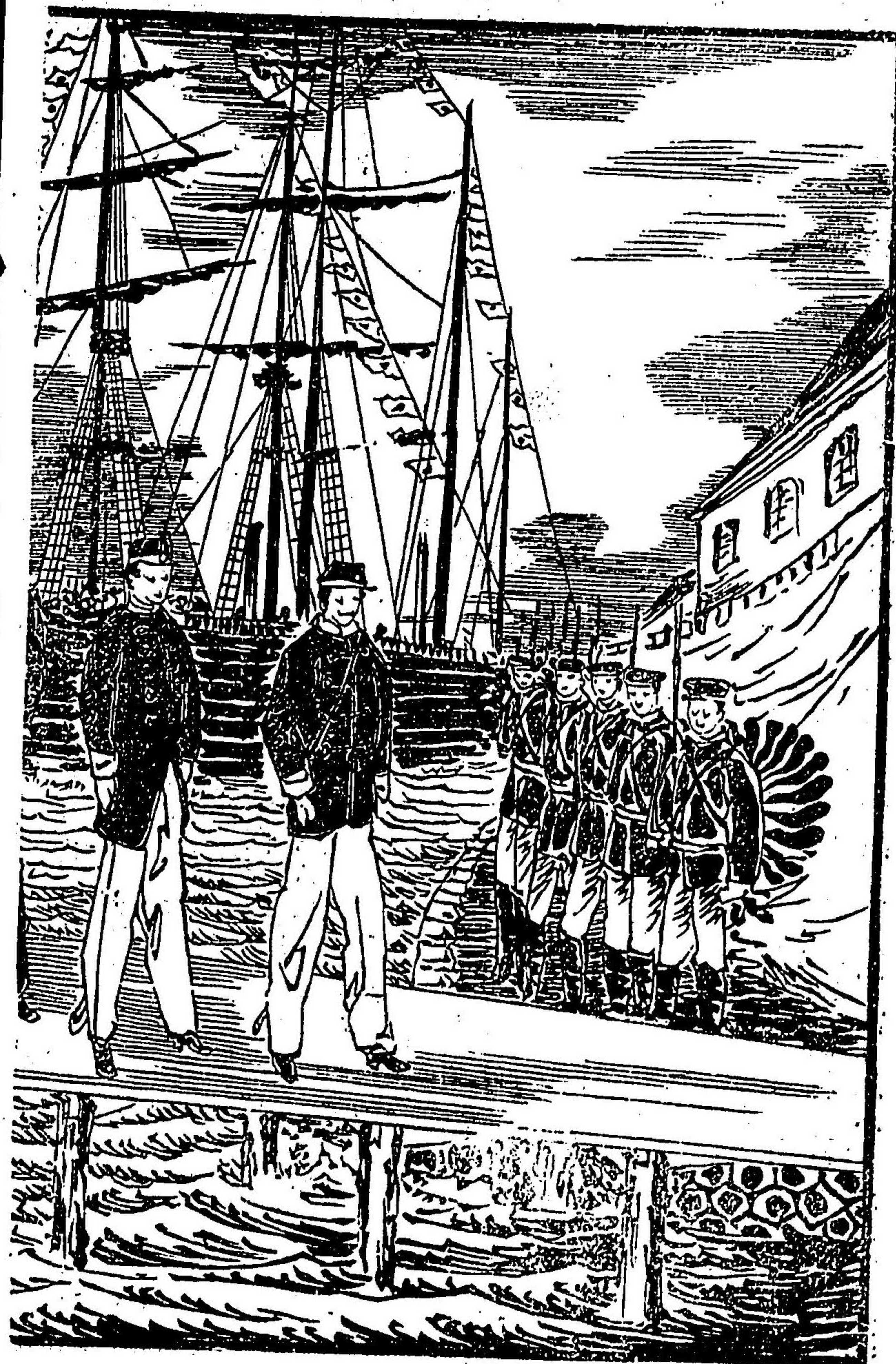
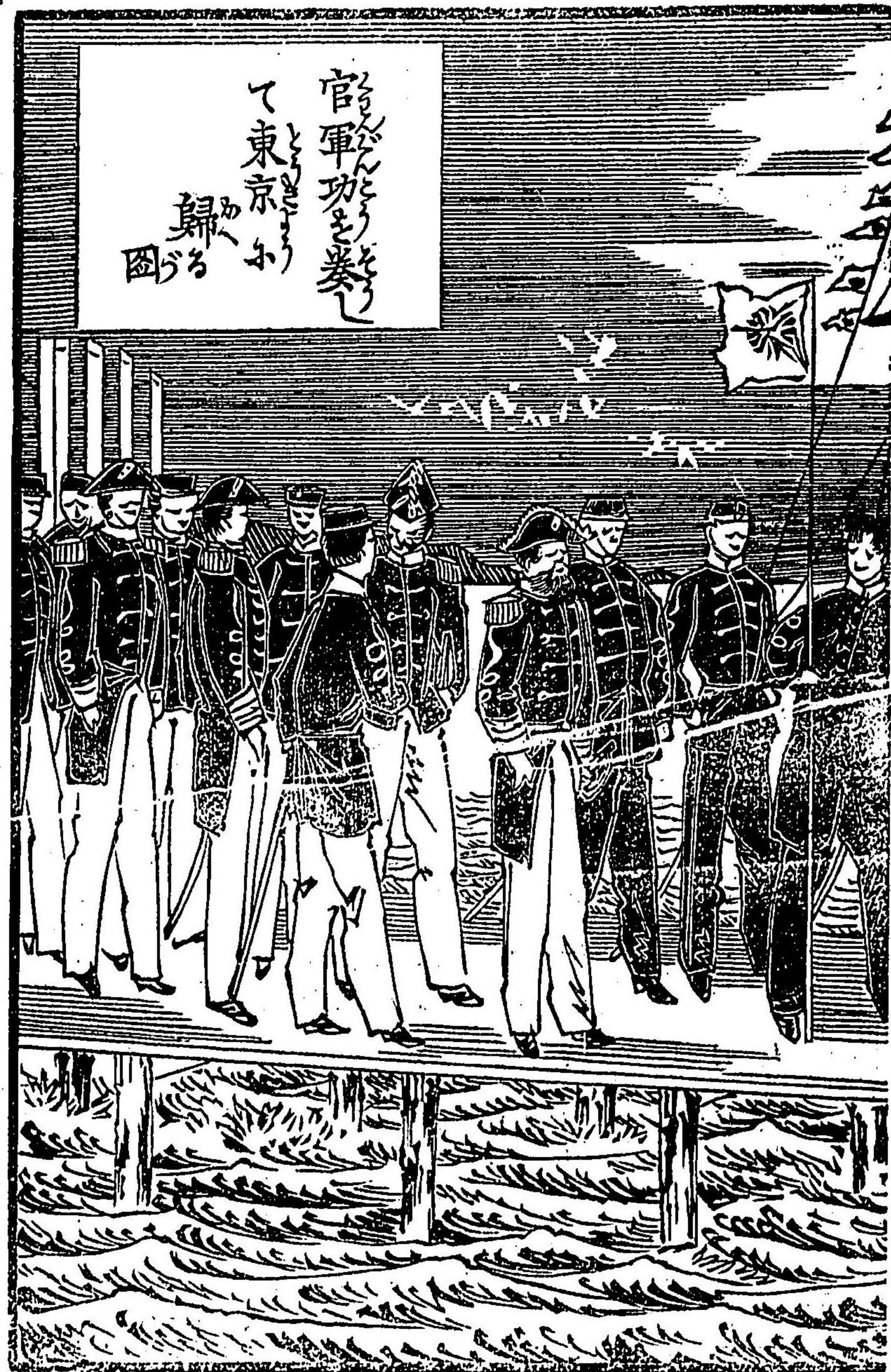
に賊壘に向つて小銃を亂射し、呐喊奮進するを望我合圍線の守りの兵の激發の烽火を揚げ、万口齊く鯨波の聲を發したれば、山呼び谷應へ、前峯唱へて、後嶺和し、炎焰は天に蔓りて、空暗く砲響り宛も怒雷の頭上に墮るが如く、時に第一第二旅團の兵并に、別働第二旅團の兵と、城山の正面及び左右より樹間を潜り、藤蘿を傳ひ、岩石を攀て進みければ、賊兵は不意に出たると其の勢ひの勇奮なるを驚き、大小狼狽して、城山東北面尖山の賊壘に守兵の一戦をも得支へず、逃走する直きも、數箇所の堅壘悉く官軍の有る隙せり、是を於て第三旅團及び新撰旅團の兵の城山と前面に向ひ、諸軍相繞りて進み、既に火と旗の喧空に、漲り火光天をこがし、圍繞圖線に在る所の兵の攻撃の勢に、應援するが爲に、隙を作りて、喇叭と之に交へ、前軍の統聲、後軍の陣の聲、城山の深谷も震動せり、既にして天殆んど明け、殘月樹影を失ひし時、官軍の岩崎谷の周圍に集まり、共に險要の所に占據りて、山下の賊兵を牽下り、小打ち撃ます、賊兵彌々氣縮して、實に壘中の鼠の如く、我軍は岩崎谷を十重二十重を取り圍み、し上四面の山上より、谷底の賊兵と狙撃せ、或は谷に攻め下したるに、予此時賊魁初め六指の賊將等、岩崎谷の入り口に向ひ逃げ出でんとす、官軍之既に谷の入り口に充塞りて、一線の活路を残さず、數百の賊兵の周章狼狽して、自ら措く所を知らず、新撰旅團の兵之を亂射しければ、西郷は肩輿の中を在りて、腰を打ち、抜れ、狼狽して、躍り出んとする、或は別府新助走りより、西郷の首領と斬り落し、其首を提げ、走れりと無慘なる最期なり、熱るも餘黨、桐野利秋、村田晋八以下は、尙岩崎谷の入口ある砲壘に集合して、防戦せしが、我軍の頻りに小銃を亂射し、破竹の勢ひ、山上下下、壘面より、呐喊して、賊壘を急に撃し、む賊兵も今は遁るゝに、道なく、或は銃丸に當りて、斃るゝもあり、或は腕を屠りて、伏すもあり、又互に刺し違へて、死するも、あり、一瞬の間に、數百の賊將以下の者、悉く倒れたり、自餘の殘兵も、或は降参、或は縛せられて、賊黨一人も、残さず、滅ぼしたり、時又明治十年九月二十四日午前七時なり、○賊平

定めて首級賞檢の事○サテ、數日の間、賊徒の根據たりし城山岩崎谷の戰場の跡と目撃せ、去者の語るに、谷に生茂りたる草木は、枝幹倒れて、枯るゝに至るもあり、家屋のこどくく、砲彈より、ち抜かれて、宛ら蜂の巢の如く、屍骸は相望みて、累々堆をなし、潺々たる溪流、血水となり、其光景の實に見るゝ、恐びず、此日征討總督の宮より、賊徒全く平定せし趣きを、電報にて奏聞せられしかば、天皇陛下之、御満悦あらせ、賜ひ、又皇族大臣より、諸官員に至るまで、其悦び言んかたなく、只管征討諸將校の勉勵を、賞歎せられ、是に於て、左の如く、布告を出されたり、九州地方、賊徒平定し、趣き、本月二十四日、征討總督二品、熾仁親王より、電報を以つて、奏聞有之、此旨、布告、候事、明治十年九月廿五日、太政大臣三條實美、又有、榎川征討總督の宮を始め、參軍以下の諸將校は、城山と賊徒の首級を賞檢せられけるに、西郷の首級、別府新助これを埋めたるを、以て、一時大に、索むれども、見えず、賊徒を詰りて、之れを獲たり、其他、桐野利秋、村田新八、邊見十郎、別府新助、桂四郎、池上四郎、高木十次、山野田一、輔岩本、平八、石塚長太郎、蒲生彦四郎、國府壽助、小倉壯九郎、平野正助、堀新次、郎佐藤三、二等なり、皆銃創、刀創等を、多少負ひ、ざる者、なかり、けり、中にも、西郷の右の太腿より、左の腸骨部に、貫きたる、銃創、右の足骨部に、舊刀創、切り、桐野利秋、左の太腿の内面、筋肉と、又腹部より、腰部に、貫通前頭より、額部へ貫通たる、銃創、右の脛骨部と、左の前髪より、頸頂部と、に刀創あり、終に、縣官に、附して、淨光明寺、お葬むらしむ、却説、此首級賞檢と、諸將中に、於て、賊徒と、竹馬の友も、有は、内外の親屬もあり、又は、維新の際に、結髮、從軍と、共にしたる者も、あるに、心から、どの言ながら、無懣の最期を、なした、と思はず、悲愴の情を、惹起し、長、大息を、なしに、けり、斯て、二十五日、又至り、總督本營を、鹿兒島に移し、總督宮、同二十七日に、長崎表へ、涉出帆あり、細島より、鹿兒島に、航せ、る、灣中、碇泊の、軍艦の、祝砲を、連發す、兩參軍、九少將以下、各旅團の、聯隊長等、即時、旅館を、謁見を、賜ふ、總督、宮、大に、將士の、切勞を、慰められ、たり、○大山

綱良斬に處せらる事○九月二十九日大山綱良刑名定つて之と長崎に送らる綱良初め鹿兒島縣令奉職中賊に與せし振舞のありしを政府に知られしより忽ち官位を奪はれ東京に縛送せらる夫より長く獄中に繋れ時々糾問を受し始め免や角と口譯して法官と誑さしも素よと其身に罪あれ天命免がたしと思ひ遂に事實と有体や述けり其概況の本年一月二十九日三十日の兩夜賊徒數名草牟田村陸軍火藥局へ押入り火藥を掠めし旨届出しに付き一等警部中島建彦等に取締方を命じ置きしに其後中原尙雄等陰に歸縣し西郷を暗殺し機に乗じて私學黨と塵殺にすべきの密謀をありし居由を桐野等の探知する所なり西郷隆盛と協議の上舊兵隊を率の上京するに決せしより共に出發の旨を全意し金穀用意の依頼に應じ直ちに畑中源左衛門なる者お自筆の書面を携帶せしめ長崎表なる承惠社員へ金數万圓調達の旨を遣はす然るに全二月一日造船所より昨夜賊徒多人數襲ひ來り銃器彈藥と掠奪せしに付保護の義を照會して熊本鎮臺へ警備の儀依頼すへさ歎の協議もありたれども兎角に言紛らし都合能差し歸し置さ全二日彈藥掠奪の趣きを内務省へ上申せり然して全四日に廳中に有合せたる金惣計金十三四万圓と第六課長篠田長禧より西郷へ廻し置七日に至り西郷に私學校よ於て面會す時に西郷の曰く中原等の事へ愈々大久保川路等の間諜刺客に相違なしと視認ひ因て兵を率て出發するは沿道の諸縣へ此旨通知すべし縣廳へて宜く取計ひありたしとの趣を肯ひ全十一日今藤宏を以て中原等の口供と西郷より請取せ之を印刷せしめ十四日專使三十一名を派遣せり是れ全西郷出京の旨を報知せしめて鼓舞煽動の爲にあらせ全九日高雄艦着港河村海軍大輔林内務少輔等來着の節右高雄艦に至り両氏と面會し彈藥掠奪等の尋問を受くれども亦九程能く相對へり且河村の西郷へ面會致し度由に付西郷へ其趣を通じ則西郷へ面會すべき旨を答へんと再び高雄艦に至りし頃私學校黨が小舟に

乗銃器と以て相迫しを以て河村も艦を發せしゆへ何等の事も示談せず其儘に相別る是より先き中原等の密謀露顯する方り彼等の脱走せんも計り難しと思ひ之を防ぐ爲め巡查を派して其警備をせり而して中原等處分の義の西郷等出發の際退て何分の義大坂より通知すべし夫迄の懸應にて嚴く警備の旨を依頼されしを以て廿一名の者を二月三日六日迄に捕縛し第二分署へ拘引し中山行高河野半藏古川源助宮内等をして糾問せしめざるに殘酷の拷問に及びたる趣きと勅使隨行の船中にて承り始めて暴威を以て口供を作り摺印を取り兵を擧るの名義と爲せし事を知り得たり斯れ如く都て西郷に與し兵を擧るの助けをしるるに相違あさ旨を洩れなく白狀に及びたれば七月六日口供は摺印済にて終ひに九月三十日斬罪の刑に處せられたり偕て鹿兒嶋の賊亂の九月二十四日において全く平定に屬し維新の偉業の十年おして大成するを得たると謂ん乎維新の偉業は十年前の幕府を仆すの日に起り封建を廢するの時に成り凡そ百の政刑の日に獨り鹿兒嶋の一縣はみ舊お依り固く封建の武權と黒守し薩日隅の三州をあげて士族の駕馭する所となり宛も日本の西陲に於て治外の屬國あるがごときの觀と現じ佐賀熊本山口の諸賊が叛旗を翻へすに際しても聲援を爲す者雲集糺合して響應するは天下不平の徒を以て鹿兒嶋を望み禍亂の起るを大旱の雲霓奮ならしめ寔に斯の如き治外の叛賊と殄滅するの今日なれば維新の偉業を大成するの日おと言ひざるべからず然らば此の賊亂の征討を以て第二回の維新とするも豈敢て不可なからんか西郷は叛逆の魁なり汚名を千載の青史に遺す者なり然るに第一回成辰の維新に於て大功あり位從三位に叙し官陸軍大將に任じ一世の英雄と以て名を天下に轟かし人心之に向しめたるの時あり此英雄の西郷をして之が首將たり又傑猛勇の桐野後原田村にして謀主たり將校たり標悍滑賊善く戦ふ者り私學黨の士無慮數千之が都下たり勳ふるに三万餘人

官軍功を奏し
て東京へ
歸る



兵を以てす其勢ひ破竹の如く國境を突出したる時天下の人心をして成敗の如何を知る能はざらざらしむるも宜なりといふべし○諸兵解隊并に參軍少將の凱旋の事○九州國事犯の罪囚處決未だ就らざるもの多く各地戰餘の事情はいまだ全く平穩に歸せずといへども鹿兒島岩村縣令熊本富岡權令大分香川縣令をして各地方官警視官力を戮して勉勵其功を奏するを以て不日にして全く平穩に至らんとす因て總督本營より各自從前の本營へ歸營すべき旨と各國へ達せらるる抑も西南の事起りしより各鎮臺の兵の云に及む後備豫備兵并に巡查等をも各旅團を編成し或は新に土族平民を各府縣より徵募して巡查とせられしが暴徒の勢ひ猖獗なるを聞き華土族平民に至るまで奮ひ競ふて從軍を願ふ者其幾許人なるを知らず然るに賊焰日熾るを以て追々解隊あり歸京するに至る是れ實に我が 聖上の神武英邁み出るといへども抑々内には賢相良輔ありて廟謨を翼賛し外に名將智帥のありて軍器と謀畫しもつて偉業をなしたるにあらざるより外なし去程に三好少將に大坂へ凱旋して同所に滞在せられ三浦少將に神戸に着せられて後不例なる故に病院に入り治療を施され又山田顯義大山巖野津鎮雄の三氏の千坂權少奮視と共に士官七十名兵士三百餘名を引率し十月四日高千穂丸にて横濱港へ着せられ午後三時四十五分の瀛車にて新橋停車場へ着し大臣參議勅委任官の人々全所へ出迎ひれて三氏は馬料の馬車に乗り直に太政官へ參内し 聖上に對面移りて戰鬪尽力克く其功を奏せし旨を 勅語ありて各々酒肴を賜りて邸に歸られたり○池部吉十郎石井貞與處刑の事○爰に池部吉十郎の九月一日賊徒が鹿兒島へ突入するに方り病に罹り郡山郷の舊戸長の宅にて潛伏し能はざれば奈何ともなし難く切齒の餘り既に屠腹に及べんとするを當家の亭主に諭さるて是非なく思ひ止りしが既而して城山に陥り西郷以下悉く討死せしと聞き自盡して西郷等も黃泉に從はんと思ふ折柄偶と異の西郷の死せず

して遁れしとの巷の説を開き若しや万が一も左ることあれば再舉を圖らんものと身を潜め居たりしが終に十月十六日郡山の近傍に於て警察の派出巡查に捕縛され宮崎臨時裁判所へ送られ糾問を受けしとき池邊の云るやう明治維新の後上下洋風に心酔し徒に民權を主張して忠孝の俗地と攘ふて去り外夷の凌辱を來し實に慨嘆措く能はず其弊害一二を建白せんと欲するも採用せられざるの必然なり畢竟二三の權臣意を擅にして 天皇陛下の敕諭を壅蔽するの致すならん故に其奸臣を掃蕩を清めんと頻りに慨嘆の折柄西郷が事を起せしを聞くより西郷一たび足を擧れば奸臣を除く何の難き事やあらんと察す然るに西郷にして若し志を得て後ち專恣なることあるも誰あつて之を抑制せんものと今より共に事を擧るの時なりと決して熊本に出て同志松浦新吉郎山崎定平櫻田宗四郎等と軍議を居りし所へ別府晉助薩の先鋒となりて小川に達す依て馳せて趣き之に會きて我志を告げ其に攻戰の議論の時を移しぬ翌日熊本に歸れば既に市中は灰燼となれり其翌日薩兵にと熊本城と攻るに際し我に教導を依頼する而して篠原と川尻に會し攻城の實否を究問し翌二十二日全人段山口より攻寄せんことに決したり斯くて二十四日西郷に會せしに西郷の我に語るに今夜神風連が兵を擧げ縣廳及び鎮臺營所を襲はんと云ふ其機に乗じて總軍を以て夜討せんと欲すと我大軍を擧げて夜襲するの不利なるを且神風連の身法にして其お成に足らざるを論し大に其議を説破り西郷と袂を分ちて歸れり二十五日北村盛純佐々友房等の出發せし所の高瀬口より急と報じ來りて我總軍を率ゐて直ちに木留口に進撃しより其時厚元中られ兵を指揮すること能はざれば二本木病院に入りて治療を加へ尙隊を指揮する等れ事を松浦新吉郎に委任して則ち本營を此に置き因て田原吉次等の防戦に力を盡す官軍の八代口に向らて我軍を撃つ我軍敵を南北に受け大に阻戦に力を盡す日ならずして我銃傷稍瘡ると以て

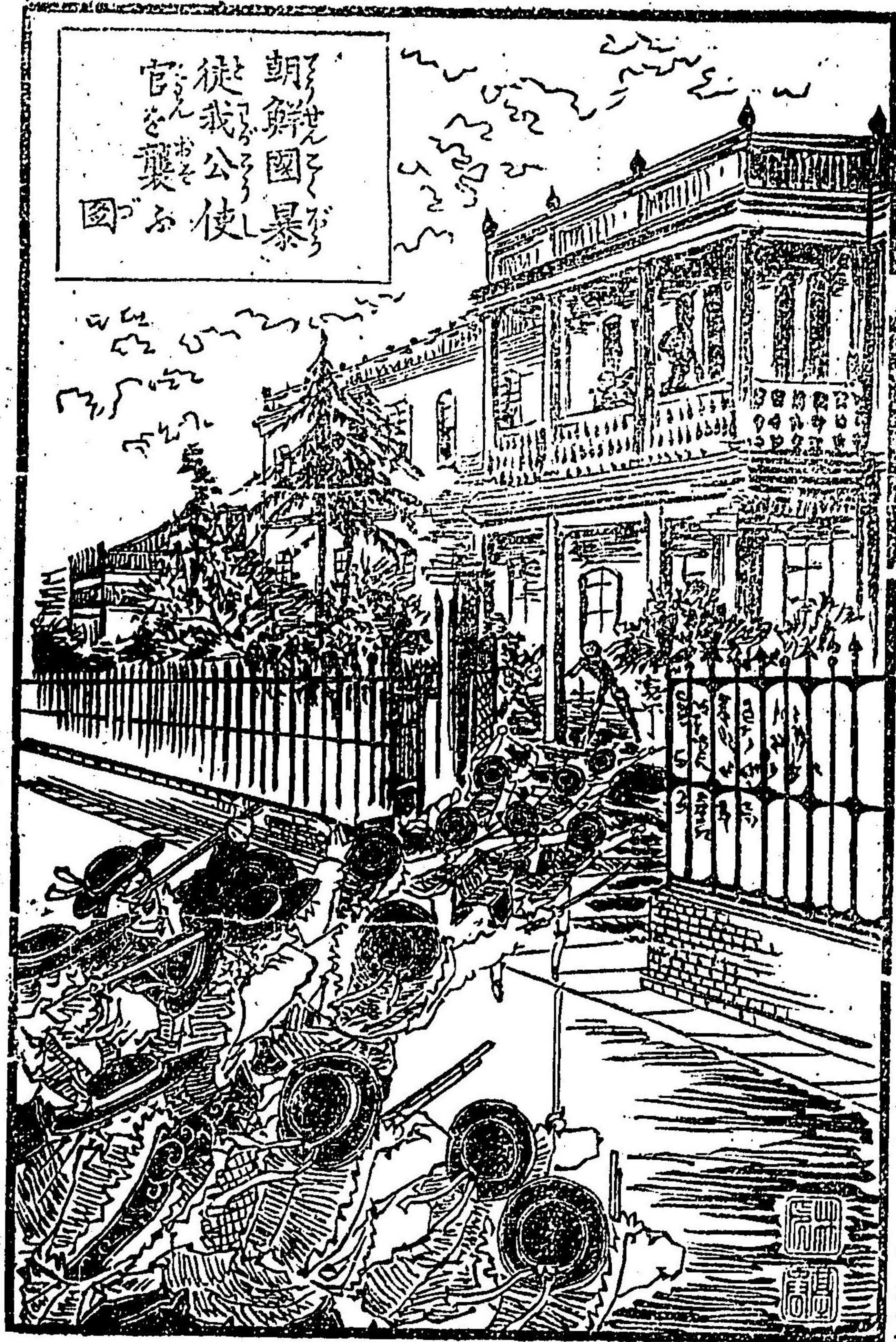
故の如く自から隊を指揮して遂に舟に進む然るに川尻口に敗軍せよより兵勢大いに挫け是に至りて復敗れて矢部に退きこれより人吉に赴くと総員を五隊に分ち一隊を五木口と四隊を水股に向いしむ連戦すること殆んど四十日にして遂に敗北し夫より本城大久保を経て宮崎に至る時に我軍至る所敗れ衰頹地に落つ加之ならず我病氣を以て身体衰弱しされども病を推して兵士等を指揮して官軍を安北川に禦く是の時又當りて薩軍も官軍の爲めに破られたるが我軍より援兵を發せんと部署したる不意を蒙られ病中なれば如何ともするなくして遂に叢中に隠れ夜に乘して我軍營に歸らんとするに能はずして留まる遂に延間に到らんとす途に我軍米良とあるを聞き到れば既に會せず故に暫らく佐土原にありて物情を窺ふ時に西郷等鹿兒島を突進すると聞き到れば官軍の圍繞嚴重にして望を達すること能はず時機の至るを俟しに城山の一戦に西郷等圍繞の中ありて自殺し餘衆の皆官軍に降伏したるの報を聞き勇氣落膽して爲す所と知らず時に風説を聞く西郷死せずと故を以て心中稍安堵し以て後圖を企てんとしされども本月十六日斯の如くに捕縛に就きたりと白状せり是に於て十月二十六日左の如く處刑申渡されたり○池部吉十郎○其方儀朝憲を輕蔑し惡意を逞くして松浦新吉郎山崎定平等と共に謀し兵器を弄し徒黨と嘯集し隊伍を組織して其總軍を指揮し逆賊西郷隆盛に勢援し官軍に抵抗する科を以て除族の上斬罪申付る○又去る明治七年江藤新平の暴意に加擔し一敗地を塗るの後鹿兒島を潛み西南の事起るに及んで桐野の部下とあり傳令使にありしが後西郷等の踪跡を失ひ本籍に歸んとするも熊本縣下緑川村にて捕縛せられたり舊熊本縣大属なる石井貞興も全様左の如くに申渡されたり○石井貞興○其方儀西郷等の逆意に黨與し兵器を集め其本營にありて傳令使となり官軍に抵抗するのみならず先に江藤新平の爲め區長より民積金一萬二千圓余を借り又舊知事鍋島直大

の家祿金二萬五千圓を詐欺し民積金と共に賊資に充用したる科を以て除族の上斬罪申付る○朝鮮の暴徒我公使館を襲ふ并み和議成る事○茲に明治十五年七月廿三日の午後三時頃より城外に於て遽に亂と作し我公使館を襲ふ是に先だち何處よりか續々書翰を送りて暴徒變動の摸様あるよしを我公使館に報知し早く防禦の用意あれかしと促し來れども朝鮮の弊習とて平生斯る惡戯は爲すもの多けき公使館も於ても左まで意とさささりしお差備館より急使來り一書を差出すよぞ之を披見すれば乱民黨を作し公使館を侵さんとせるの意あるに似たり早く用意して防禦の計あるべし云々と之に引續き公使館雇の朝鮮人忙しく馳歸りて告るやう只今乱民數百王宮を犯し又大臣岡台鶴閣謙鎬の邸を襲ひ其上兩人を殺し其家屋をも毀てり又陸軍語學生岡田格池田平之進黒澤盛信の三名陸軍下都監より公使館に來るの途中南大門の邊に於て無殘も暴民の爲に打毆れ頗る危殆場合なれば速かに人を出し援くべしといふに由り急に公使館より二等巡查川上堅輔同池爲善三等巡查本多親友れ三名を驅付させしに料らざるも三名の巡查もろともにも暴民重圍の中陥りたるにや竟に歸り來らず斯る處へ差備官李承謀も馳來りて奇變忽ち起れり公使以下皆速かに後山に避けんことと促せり即ち答ふるに若し亂民ありて我公使館を侵さんとされ公府必ず兵を派して護衛せらるべし速かお此意を京畿觀察使に告げよといへば李承謀承諾して去れり兎角とるうちに早や公使館の後手に當り吶喊の聲の宛がら潮の湧くがごとく天地も爲に震動する心かありさまに聞へ但見れば館後の山に白色の衣服と着したる暴民が幾百千ともなく群集し満山一面に時ならぬ雪を撒せしごとくに見へて事頗る容易ならざれば陸軍を曹千原秀三郎二等巡查宮周太郎と後山に登らしめ其景況を視察せしむるに須臾にして歸り報じて云やう京畿監營の近傍は暴徒等押寄せて塵氣空に滿ち騒々擾々のありさまなれば決して油斷

なりがたく且山上の暴民は擧て石を投げて容易に近くを得ずと是に於て公使館にも稍守りと殿にせり而して山上の暴民の急に押寄せ來り我公使館を目かけて劇しく瓦礫を投ずること雨の如く加ふるに時々鉄砲を放つ事頗る急迫り躊躇すべからざるの場合に及びけるより公使館に益防禦の用意と整へけるうち暴民の数は次第に加はり公使館の前後左右の白衣の人ならざるはなく公館雇の朝鮮人等此景況を見て大に恐怖て幾らず逃失せり時に午後五時半頃門前忽ち一喊の聲を發すれば陸軍大尉水野勝毅二等警部岡兵一館員及び巡查と指揮して要處を守り又するの勢ありければ陸軍大尉水野勝毅二等警部岡兵一館員及び巡查と指揮して要處を守り又前門を開き其闖入を待て之を塵にせんとし隊伍と整へ相待つといへども敢て一人も入る者なし須臾にして火を館後の民家に放ち繼て仲接官出張所の門扉を焼死又差備館の詰所を燒き餘焰延て館舎に及ぶんとす七等屬淺山顯藏一等巡查小林志三郎短銃を以て之を狙撃し數人を斃と暴徒稍逡巡するの色ありといへども合圍益々密に銃を放ち箭を飛ばし石を抛ち火を投げ毫も退くの勢なく咆哮の聲の市街山野に充滿せり然るに公館の総人數併せて廿八名のみ如何ともすべさやうあらざれば亂民の多勢なるも敢て能く館内を闖入するものなければ暫く支へて時を経るうちに朝鮮政府より兵と出して必ず之を鎮壓すべしと各努力して相拒ぐこと凡そ七時間ばかり既ち夜半及びと雖も政府より一兵とも出さざれば暴民の勢は益々加はりて看るく四隣の民家と盡く火炎とありて公使館にも燃移り矢石銃丸の皆公堂に集り其火を被らざるもの獨り公堂と渡邊閣とのみなりける茲に於て官員一同公堂に會し公使の命を待つ時に水野大尉發言して曰く事已に迫れり從容として死を此に待た或は一方に突出して運を試むるかの二に過す願く公使早く之と決せよ御雇ひ水島桂及び小林等曰く突出して後山に登り間道より楊花

津に出ること難きにあらす岡部曰く後山路峻しく衆齊く進むこと能はざるに如かず正門を突出して死と潔くせんといへども公使令して曰く諸説未だ盡さるる所有須く正門より出て先大路を経て京畿觀察使の營に至り守護と請ふべし若し觀察使守護する能はざれば已を得ず王宮に赴き國王と安危共にすべし徒に辱し山野に曝す勿れと衆皆之を服す一同即ち死を決し圍を潰して外に出でんとすれど亂民の門外に柵を設けく一人も餘さざりて嚴重に取巻けるに公使館の隙々たる烟焰の中に蔽はれて咫尺も辨せざるの景況を望み人も館と俱に灰燼とありしならんとれもひつるにや柵を摧き公使館に近づき入らんとするを以て其機に乗じ二十餘人が一門内を整列して各々番號を以て岡淺山の所使が先驅となり千原水島之に殿たり時に夜十二時火と公堂に放ち國旗を翻へし各々劍を揮ひ吶喊して正門より突出し立るに二十餘名を斬捨て隙を窺ひ辛うじて一條の血路を開きて大路に出賊皆辟易して敢て近かず只遠きにあつて瓦礫を擲つのみ我衆の事どもせず進んで觀察使の營に至れば小門開けありて大門口内におよべば四五輩門の樓上に在て瓦礫を投ぐる由り短銃を放て之を退ひ又一人を斫り殺せば餘の皆逃走せり猶進んで三門を過ぎ觀察使の正堂たる宣化堂に至れば寂として人影たも見へざるを再び大路に上り直ちに王宮に至り請ふところあらんとして南大門を達したるに鉄門固く銷して入るを得ず即ち頻りに大呼して來意を告るといへども更に答ふるの聲あかりき此時一同の事既に是までなりとて路頭に立ち互に思案の体なりしが折から雨の車軸を流すが如くに降しきり斯てあるべきにあらざれば一同終に意を決して一先仁川府へ赴かんとし大雨れ中を冒して京城を發し廿四日の天明に漸く楊花津を達しける此より舟に乗じて一同向岸に漕付けしが前夜よりの雨は益烈く須臾も休閑あらざれば左無だに難路のところへ又泥濘深く足を没し容易も一歩も進みかぬるばかりの千辛万

苦を極め午前十時過漸く富平府の成谷里と呼べる一村落に着し茲にて少く息を休め人民に乞ふ
 て麥飯を炊かせ僅に一時の饑を凌ぎしなり彼の沛公が滹陀河にて麥飯を進められしも斯やわら
 ん其艱苦思ふべし夫より又大雨を冒して同處と發し午後三時頃漸く仁川府に着しける其時府使
 鄭氏鎔其府の兵を出して公使等を途に迎へ諸事甚だ懇懇を極めけるを以て一同少しく虎穴を脱
 したる思をなまつ、其案内に隨ふて府廳に至れば鄭氏自ら正堂を開きて公使の休憩所となし別
 に門前の一官舎を掃ひ護衛巡查の休憩所又充て焼酎を供し鶏卵を出しなごして頻りに一同の勞
 を慰め且衣服を出して貸與へ其周施至らざる所なきと見て一同安堵し濡きたる衣服を脱して之
 を火に乾かし各々休息に就き横臥覺ゆるを催ふせるものもあり時已に五時に垂とするころ
 偶々門前に騒しき音のするにぞ何事やらんと思ふ間もあく門外の官舎に休息せし二等巡查遠矢
 八郎身僅お襦袢を着けしまゝ徒跣にて刀を提げ來る之を見れば紅血淋漓として滿身に深めり引
 き繼で二等巡查五十嵐惠吉も亦同く徒跣にて跟踏刀を杖にし來る是も全身血を迸しらす三等巡
 査横山貞夫亦創を負ふといへども猶能く奮ふて門を閉ぢ固く之を守り皆曰く又々暴徒我を不意を
 窺ひ門前の休憩所を襲撃し矢石雨の如く注ぎ刀槍亂れ刺し一等巡查廣戸昌克二等巡查宮周太郎
 等數名之を死す請ふ速かに防禦の用意あるべしと通知しければ一同宛も衣服を脱ぎ休憩に就
 きしどころなれば殊更お驚きて其混雜一方ならず急ぎ支度と整へて一同打揃ひ門を出んとす
 るに忽ち砲聲堂後に發し矢石を飛ばし今先に我等を迎へたる兵卒までが皆亂民と一致して其鋒を
 我に向け時に身方の僅に二十四名にして衆寡終に敵を可くす殊に其中おの京城に於て重傷を負
 ひたるものもあれば皆曰く事既に此に迫り迎も生く可きの道なければ坐して亂民の虐殺に罹
 り且其事の有様さへ我國お通するも覺束なしとかもへば遺憾に堪へず去りとてむざむざと彼等



の録刃不届し敢あき横死を遂るの日本男兒たるもの、耻辱のみならず我國の面目を汚し事体の
 關する處少からざれば寧ろ門前に激戦し死を潔くするに如すと幸ひにして萬が一にも切抜
 て此内一人にても本國に達することを得ば此始終と傳へよといふを最後の事として即ち公使を
 中に擁し刀を揮ふて奮撃すれば府兵三四十人許槍と提げ刀を横へ門前より群り居れり我二十四人
 は齊しく霜刀を眞向に揮翳しつゝ一騎當千の勢ひを以て當るに任せ斫立て確立てなから僅に一
 方の血路を開き危き所を幸じて切抜けたきと亂民の追撃甚急おして爲めに戦死したる者は公
 使館雇水島義語學生近藤堅三等巡查廣戸宮の四人なり外に重軽傷を負もの五六名なりとかや扱
 も一同の死力を尽して且防ぎ且退きつゝ濟物浦を指して落ち行さける此時亂民等花房公使々
 々々々と呼りながら石を投じ眉尖刀と揮ひ來る岡警部殿去て其追撃を防ぐ小林一等巡查返戦
 之を救ふ爲め遂巡して復敢て進まず終に午後七時頃濟物浦に着し土人を要して小舟を漕出し
 月尾島に渡らんとするに潮流急駛にして船容易に進まず一同赤手浪を掻つゝ僅に月尾島に達し
 たり同廿六日海霧太深く咫尺と辨せず朝陽の昇るころに至り天儘に晴れ遙に三桅檣の艦を前
 陽に望みければ一同大に氣を得て先づ携へ去所の國旗と竿頭に掲げて救助と求むるの意を表せ
 しに彼艦より直又小蒸氣船と出して之を迎へ本艦へ移らしは是を即ち英船飛魚號として艦長
 以下皆我善く知る所の人なりされば其喜び實に知るべきなり此處の濟物浦を去る十五海即ち汾
 溜島といへるところふて同艦の已に南陽灣の測量を終へ廿六日出帆して全遼道に向いんとせし
 む霧の爲め遮られて果さざりしが料らずも我の天幸となり此危急を助らるゝに至りしこそ好運
 なれ是に於て公使の朝鮮國王殿下に呈する爲め一書を認め其難を避けて此に至るの事由并に近
 日再渡すべきの趣と述べ又同文司觀察使にも一書と寄せて我國死者の埋葬及び生死未審のもの

の救護すること等を依頼し是を雇來りし船主に托して觀察營へ轉送せしめ夫より同艦の厚き保
 護を受けて此夜第十時發船し三十日午前二時無事に長崎に着しぬ斯くて花房公使の一行の長崎
 へ着せらるゝと直に電報を以て東京へ報せられたるを左の如し○本月廿三日午後五時朝鮮激徒
 數百人不意に起りて公使館を襲撃し發砲放火せり盡力防禦七時を經たれども政府の援兵來ら
 ず一方を切り開き王宮に到らんとすれども城門開かず已むを得て仁川府へ立退き休息するうち
 同府の兵復不意に起りて襲撃し巡查二名即死三名負傷外にも死傷あり漸く切抜け濟物浦より船
 に乗る廿六日南陽沖にて英吉利測量船飛魚號と出會ひ丁寧なる扱を受け手負までも無事只今長
 崎に到着せり右廿三日の激徒王宮及び閣台諸閣謙鎬の家とも襲へりと聞こる殊に仁川の事もあ
 れば釜山元山も油断しがたし保護船警城艦今元山に在り外一艘直に釜山へ遣さる保護かたぐ
 京城其後の模様國王并に政府の變化安危如何を聞合せられたし近藤書記官水野大尉外廿四人長
 崎歸着堀本中尉外八名生死分らず○七月卅日午前十二時卅分長崎花房義質○外務卿井上馨殿○
 此電報の内閣へ達せしは同日午後三時頃なりしが折節日曜の暇にて大臣參議方々元より一人も
 出頭あらざりしゆ急に外務卿の邸へ送達せし外務卿は之を見て一方ならず驚かれ其儘三條
 太政大臣の邸へ駈付け岩倉右府山縣山田河村大木諸參議黒田内閣顧問松方大藏卿等へも急使を
 發せられしにいづれも三條公の邸に參會せられたれば三條公の彼の電報と諸公に示し且其意見
 を問れしに黒田顧問は席を進めて云ひる様抑も余の去明治九年日韓紛議の際辦理大臣の任を奉
 じて韓地に使ひし今回談判の末遂に日韓兩國の條約を結びしは諸公も諒知せらるゝ所なり當時
 彼を征討すべきの理は充分我も在りしが何分彼の猶蠢爾たる野蠻國なれば之と共に鋒を争にも
 無益なるの勿論彼に償金と強るも猶恐びざる所あるを以て唯穩便に事と處置し只管彼を開明に

誘導せしに今日に至りて彼既に恩義を忘るるを却て暴動の舉に及びり願ふに今回の事たる特り朝鮮政府の意に出るに仍らず恐くは支那政府が勢に之を教唆するものならん若今にして之を討せずんば彼益々恩に狎れて我を侮り遂に我國威の東洋に輝かざるに至らん左れば速に兵艦を派して之を一擧の下に征服すべし韓人與し易し何ぞ恐るるに足らんと述られし語の未だ畢らざるに某參議の之と駁して這は黒田氏の説とも思はれ先年足下が韓地に使されし時未だ條約もなく又彼も他國と交通せざれば之を討するも容易なりし今と既米國と條約を結び清國も暗に之と援るの勢あり殊に今回の事たる朝鮮政府の意に出るに仍らずして頑固一偏の守舊黨の暴舉に相違なかるべし然るを遽に罪と彼政府に歸して之を討せば却て輕舉の誹を受るのみならず韓に柔順する魯西亞の如き韓を覬覦する支那の如き決して黙々に附せざるべし左れば之に負れば國威を損じ之に勝て後害あり寧ろ手輕に宮本外務大書記官を派遣して其談判と調ふに若かずとあましに井上參議曰く余は往年黒田氏と共に彼國に渡航し親しく實況を視察し能く彼を屈伏せしむるに易々たることを知れり然るがら余の先年征韓の論廟堂に起りし際すら已に山田氏等も固く其不可を執りて開戦の非なるを論駁したるの畢竟其害あるも益なきを知ればなり故に今回の事も彼の政府と談判と開き結局其損害を償はしむるに至れば足れりと思ふなり山田參議の之を賛成せられ議論區々にして決せざるうち夜も太く更けたれば翌朝内閣は於て再議することに決して同夜の一同退出せらるる明を即ち廿一日三條公始め前夜の諸公殘らず參朝せられたれば三條公より右の趣を 聖上へ奏問せられしに陛下も大に宸襟を惱ませられ直に内閣に臨御まししく親しく御前に於て會議を開かせ給ひしに某參議に山田參議の説を可として之と實行せんことを主張されしに黒田顧問と猶征討説を固執し若吾説の行はれざるに於て願くと遣韓

辦理大臣の命と佩びて彼國に使せしめらるるよ我政府の意をして彼政府に透徹せしむるのみ清隆が方寸の中ありと述べられしに井上參議又之を駁して曰く黒田氏の辱けなくも内閣顧問の重任を負はるる身なれを斯る時こそ陛下の左右に奉侍して其本職を盡さるべし余は不肖ながら身外務の主任に當れば余こそ派遣の命と奉て然るべし果して然らんに速に之の肩を結ぶに至らんことを誓ふて去らざるべし諸公は意見如何もやと憚る色なく陳述せられしに若くは井上參議の今回紛議一切の事務を擔任せしめられしも目下外國條約改正も未其局を結ばざるを先馬關に遣りし花房公使へ談判の手續と訓令し公使をして直に韓地へ引返し朝鮮政府に向ひ談判を齎かしむること決して漸く其會を終りししがこの日は特に勅旨と下させられ野村驛遞總監は韓地は景況を熟知せらるるを以て議席に召されたりと予已に内閣の論の平和談判の事一一定せしにつき公使以下護衛の爲居留人民保護うたぐ天城艦を釜山に金剛艦日進艦を仁川に差向けらるる事にあつた三十一日午後十二時横濱を解纜すべき筈なりしも少しく延引して翌一日午前六時出帆せり東海鎮守府の司令長官仁禮海軍少將は中艦隊の指揮官を命せられ直に金剛艦に乗組み宮本外務大書記官前田總領事管船局員杉山少佐にも右三艦の中へ夫々乗組まを井上參議のその翌一日横濱拔錨の立海丸と搭し彌々馬關へ向け出發せらるるしが西部監軍部長高島陸軍少將も傳令使藤井歩兵大尉部員綾部中尉會計軍吏風間笑卿の三氏を隨がへ參謀本部管東局長堀江歩兵大佐管船局員比志島歩兵少佐總務局長古川工兵大尉等と俱も同船に乗組まれたり又陸軍省よりは同日熊本鎮臺へ花房公使護衛として小倉屯在歩兵の中一大隊出張致す可尤も一中隊の公使同艦乗組其他二中隊出發の儀の後命を俟つべき旨を達せられ夫より井上參議高島少將の一行は四日午前五時神戸に着船偶々暴風雨に阻まれ船進むことを得ざりしが爲め六

日早天漸く同港を解纜し七日午前無事馬關に達すると直に花房公使と會して面談の上訓令せられ大意の公使京城へ着の上彼政府と談判を爲し得べくと談判せよ若其までに暴徒の王城に據りて我使命を通ずるに道なき場合に至れば要所を根據を占め其旨を急に通知すべしと且談判の次第と囑せられたる第一に今回暴動始末を付相當なる處分を彼政府に要求する事第二に我國より一大隊の兵を京城に置き我公使館と護衛せしむる事第三に我銅貨を彼國中に流通せしむる事等の數件を過ぎず去るほどに花房公使の高島少將と俱に明治丸に乗組十日午前六時馬關を發せられし天城艦も護衛の爲同時に出發し猶和歌浦丸にて熊本小倉の兵併せて一大隊仁川へ向け續いて同所を發しける此時に當りてや政府は飽まで平和主義を執りて朝鮮政府に談判せらるゝ趣意なりといへども彼の頑冥暴慢にして我言を容れざるをきり何時開戦せざるを得ざるの勢に立至るやも測りがたきに由り豫め萬一の不虞に備へんため西南地方の諸鎮臺へ何時出兵致すも差支なきやう用意すべき旨を達し時宜に依り直ちに豫備軍を召集するの手筈をみし戦地用天幕被服糧米其他の食用品人夫等をも至急韓地へ差出すべき用意をなし假令今開戦と成るも決して一の差支ふることなきまで能く準備の整ひしに感ずるに餘りあるとありかし○花房公使の一行再び朝鮮に赴く事○十日午前七時丹分花房公使は高島少將等以下百餘人と明治丸に搭じて馬關を出發せられしが韓人金玉均、徐光範、卓挺植、禹鼎、朴義乘等も同船なし十二日午前十二時仁川灣に入る時に支那軍艦威遠號揚武號の二隻先立ちて碇泊す是即ち馬建忠の率ひ來りしものと初め三隻なりしに我明治丸と行違ひ一隻は水師提督丁汝昌が之に乗じて天津に向け歸航したるの全く陸軍兵を搭載し來るが爲なりとかや我金剛艦と品川丸も亦先立ちて碇泊したるしが公使の船の入港するを見兩艦より祝砲を發して來着を祝し金剛艦より仁禮少將杉山少佐近藤領事

等來り訪ひれ支那軍艦よりは士官鄧世昌來りて公使の勞を慰問し是も同じく禮砲を發して公使の安着と賀し續て馬建忠も亦來り公使と對話すること數刻にして去れり此馬建忠といへるは英語佛語に通じ曩に印度に使用して鴉片の事を談判し又米韓條約の時も其間に周旋して大に力有りまものなれば今度朝鮮の事あると直に丁汝昌と共に李鴻章の命を受けて急に出張せしが我公使の一行も兼てより斯ることありんと覺悟のまへなれと珍まりの迅速に一驚と吃せられし色の見へたりといふことばりせめて無理あらぬこととあり斯くて我艦より先づ工兵大尉瀬戸口某をして工夫數十人を率ゐて濟物浦へ上陸し井と堀り營を作るの備を爲さしめ公使の近藤領事と翌十三日上陸して仁川府まで進行せらるゝに付て仁川府に二營部巡查十九人を率ゐて之を隨ひ杉山少佐藤井大尉も一中隊の兵と率ゐて護衛せられ夫々の準備を整へつゝ艦を仁川府に達するまで敢て一人の抗するものなく先々無事にてありしかと今後の所如何なるべいかと少の油斷心さへあらざりける此時に當り仁川港を碇泊する軍艦の數は支那米國及び我軍艦を併せて九艘なりしが朝鮮にては實に未開の事なるべしといへり且其軍艦の入港ごとには必ず祝砲を連發する音の勇しく響渡りけき韓人何れいづれも肝を潰して已に戦争の起とし心地をなしたる家具などを片付け右往左往に迷迷ふもの多かりき扱十六日となりければ花房公使も朝鮮人等が種々の詭言を傳へて其行を阻まんとするもの均はらず斷然意を決して護衛兵二中隊を率ゐ仁川を發せられしが兼て濟物浦邊の風説にも朝鮮政府より兵を楊花鎮へ出し漢江の險を扼して戦いんとするの景況ありければ我先鋒の戒嚴して斥候兵を派し着々地を占めて進行せしに案外の穩なる次第にて漢江の波平に白鬮眼靜なり又一人の兵を見ず願て漢江の險を越へて楊花鎮に至りしに同地を副將出迎へて彼是應答中太院君及び京畿艦司より日本公使の一行を鄭重に取扱べ

旨達書に到來せしかば夫より速に待遇の体而替り漢江の氷塊を碎きて我軍を勞ふべきと丁寧至らざる所なく公使の此機に乗早く京城内に乘込て屈強の上策あるべけれどて其夜雨を冒し近藤領事と俱ふ京城に入られしに出迎への官吏等來り頗る鄭重を極めたり同十七日花房公使直ちに進んで謁見を請ひけるに伴接官出で來りて云ひけるに今日明日の宮中の祭式にて謁見するに便ならず他日を約せんと請ひたれども公使の云れるに今日謁見を賜らざれば他日交際不安危も未だ定むる所を知らず我れ我が國命を奉じ來りて大事と理する豈徒らに一日と空ふせんやなれども今明兩日の姑く貴意に隨ひ之を延す可しといへども十九日に必ず引見を望む若し其期に至り命なくんば我れ自から閣下に至りて之を乞ひんと同十九日趙秉鎬來りて王命を傳へ來り明廿日正午を以て期を延さん事を乞ふも公使は之と許れける此日高島仁禮海陸の兵を率ひて此ふ來る其兵を四中隊となす其二中隊半ば京城に在り半中隊の揚花津の兩岸にあり漢江の要害を扼す一中隊は濟物浦に在りて仁川梧里の街に當り遙小揚花津と連絡と通せり明廿日之兼て期日なるに依り公使衛兵一小隊を率ひ近藤領事も一小隊を率ひ警視の諸官吏前後を圍んで京城に至り内殿に入り國王に謁見せし後公使の云ひければ去月廿三日は變實に古今未曾有の事にして館を焚き公使を逐ひ我國を辱かしむる尤も甚し理當に師を興し其罪を問ふ所有る可なれと和議一度破れれば又補ふ所有らざるを恐れし故議質旨を奉て再び來りて今將に貴朝廷を議する所あらんとす國王の云く堀本中尉は年來我が兵事に盡力せしが不幸にして彼の凶變に罹るを以て深く憾とす公使曰く今我國將に此耻辱を雪がんとし且向來の方法を爲さんとて要求書八ヶ條を呈し且今より三日内に決答あらんことを望むとて禮畢りて退きけり其後韓廷延期を望むと屢々なれども公使の更に此事は聞入れず辨論數回及び遂に韓廷の我國の請求に應じたる

七月三十日を以て花房公使の朝鮮國全權大臣李裕元副全權大臣金宏集と濟物浦に於て條約書を取換す事左に掲ぐ如し○日本曆七月廿三日朝鮮曆六月九日の變朝鮮兇徒日本公使館を侵襲し職事人員多く難に罹るを致す朝鮮國聘する所の日本教師亦慘害せらる日本國和好を重むる爲み妥當議辯即ち朝鮮國の下開六款及び別訂續約二款を實行するを約し以て前を懲し後を善するの意を表す是に於て兩國全權大臣記名捺印以て信憑を照す○第一今より二十日を期し朝鮮國兇徒を捕獲し巨魁と嚴究し重く懲辦する事日本國派員一同究治若し期日に未だ獲る能とざる時ハ應み日本國辨理に由る可し○第二日本官胥害む遇ふ者朝鮮國優禮埋葬に由り以て其終りを厚ふ事○第三朝鮮國五萬圓を撥支し日本胥遭害者に遺族并に負傷者に給與し以て休恤を加ふる事○第四兇徒暴擧に因て日本國受る所の損害及び公使を護衛する水陸兵費五十萬圓朝鮮國填補に由る事毎年支十萬圓五ヶ年と待て清完す○第五日本公使館兵員若干を置き備警する事兵營を設置修繕する朝鮮國之に任す朝鮮國兵民守律の若く一年後日本公使不警備と見做べ兵を撤する事妨げず○第六朝鮮國特派大臣國書を修めて以て日本國に謝する事○大日本國明治十五年八月卅日朝鮮國開國四百九十一年七月十七日日本國辨理公使花房義實朝鮮國全權大臣李裕元同全權副大臣金宏集日本國朝鮮國と嗣後益々親好を表し貿易と便にする爲め茲に續約二款を訂定する左の如し○第一元山釜山仁川各港間の行程今後擴めて四方各々五十里とさし(朝鮮里法)二年の後を期し更に各々五里となす事今より一年の後を期し揚花鎮を以て開市場となす事○第二日本公使領事及び其隨員眷從朝鮮地各所を遊歴するを任聽する事但し遊歴地方を指定し禮曹に依り給照し地方官勘照護送せん右兩國全權大臣各據諭旨立約捺印更らに批准を請ひ二ヶ月内日本東京に於て交換せん○花房公使の九月三日を以て仁川にて遭難者を祭る在留の國人を招集し公使

以下各々供物あり種々なる戯をなし夜ふ入ての金剛艦に於て煙花數十本と放ち頗る盛典にてあり其後暴徒の處刑も済たれば近藤領事を留めて代理となし一中隊を残り護衛なさせしめ國王に辭別して全廿一日餘衆悉く明治艦に乗組みて仁川港を發す此時朝鮮國正使朴泳孝副使金晩植隨從官徐光範等十四人皆是に乗じて又金剛北極清輝の三艦も兵士を乗せて共に拔りし同廿八日横濱港に着し公使に同日九時の涼車に乗り新橋に至り多賜の馬車にて直ちに參内し謹んで談判の顛末を奏問しければ天皇激感斜ならずして左の勅語を給はれし汝義質朝鮮京城の變に遭逢し頗る艱苦を極む再び訓令を帶び彼地に渡航し反復辨論事平和に飯す此汝義質不撓の致す所なり朕深く之を嘉尚す鮮魚一臺酒一樽を賜ひ即日勅二等に叙し旭日重光章を給ふ十月十八日 天皇朝鮮航海の陸海軍將校及び士官水夫を宮中に召され酒肴と賜りて其勞を賞し賜ふ翌十日九日朝鮮國の正使朴泳孝副使金晩植從事徐光範等參内して國書を呈上并に泌席紋席歴史提綱一部高麗磁器漢盤床等を獻し皇恩と感謝しければ 天皇厚く之を待遇給ひける依て正使等居ると七十余日にして歸途に就けりとぞ

增補 明治太平記 大尾

明治十九年十二月三日版權免許
 全二十年一月出版
 全 年七月六日再版御届
 全 年同月出版

編輯人

大坂府平民 福井 淳

東區石町一丁目十四番地

出版人

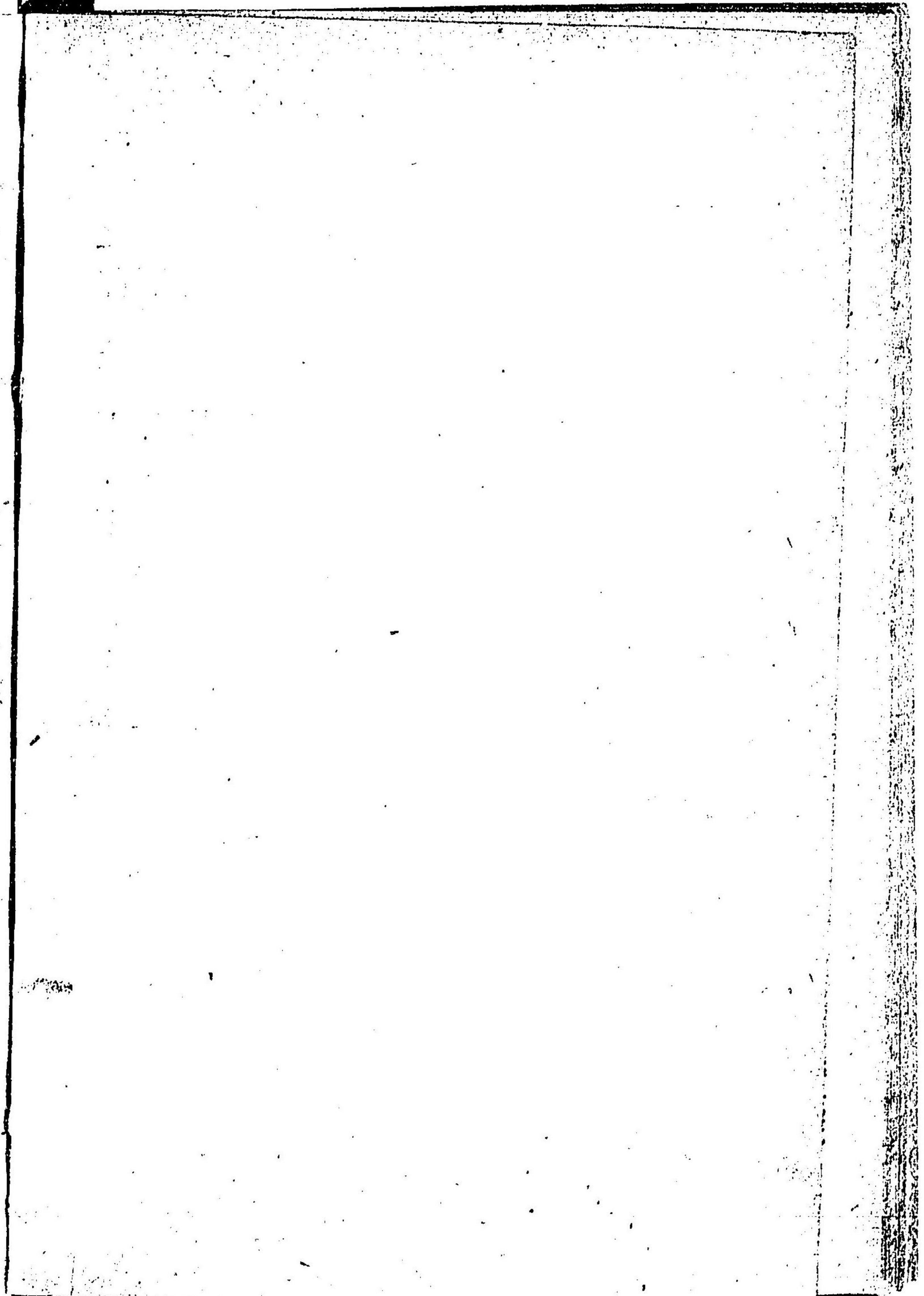
大坂府平民 濱本 伊三郎

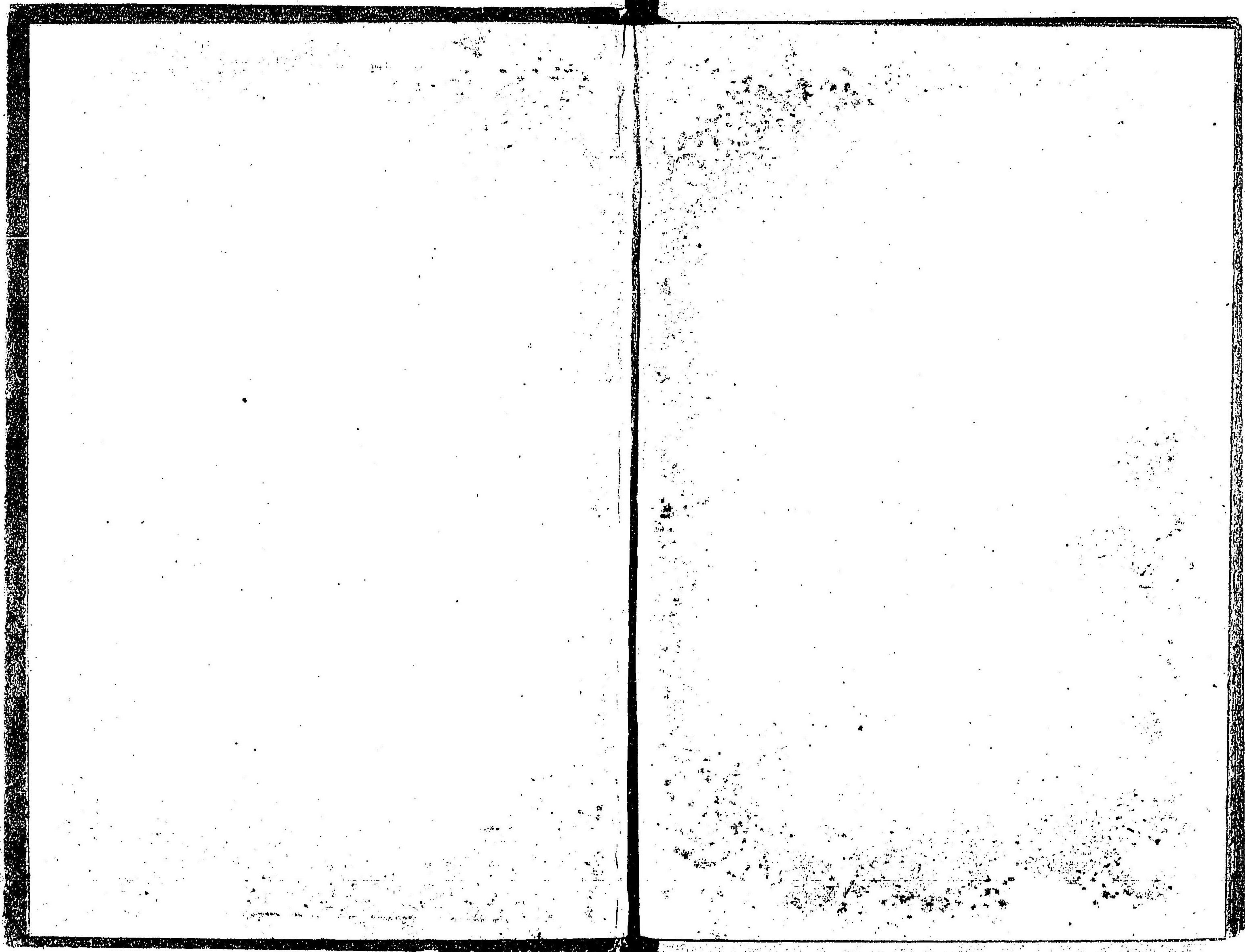
東區北久寶寺町四丁目九番地

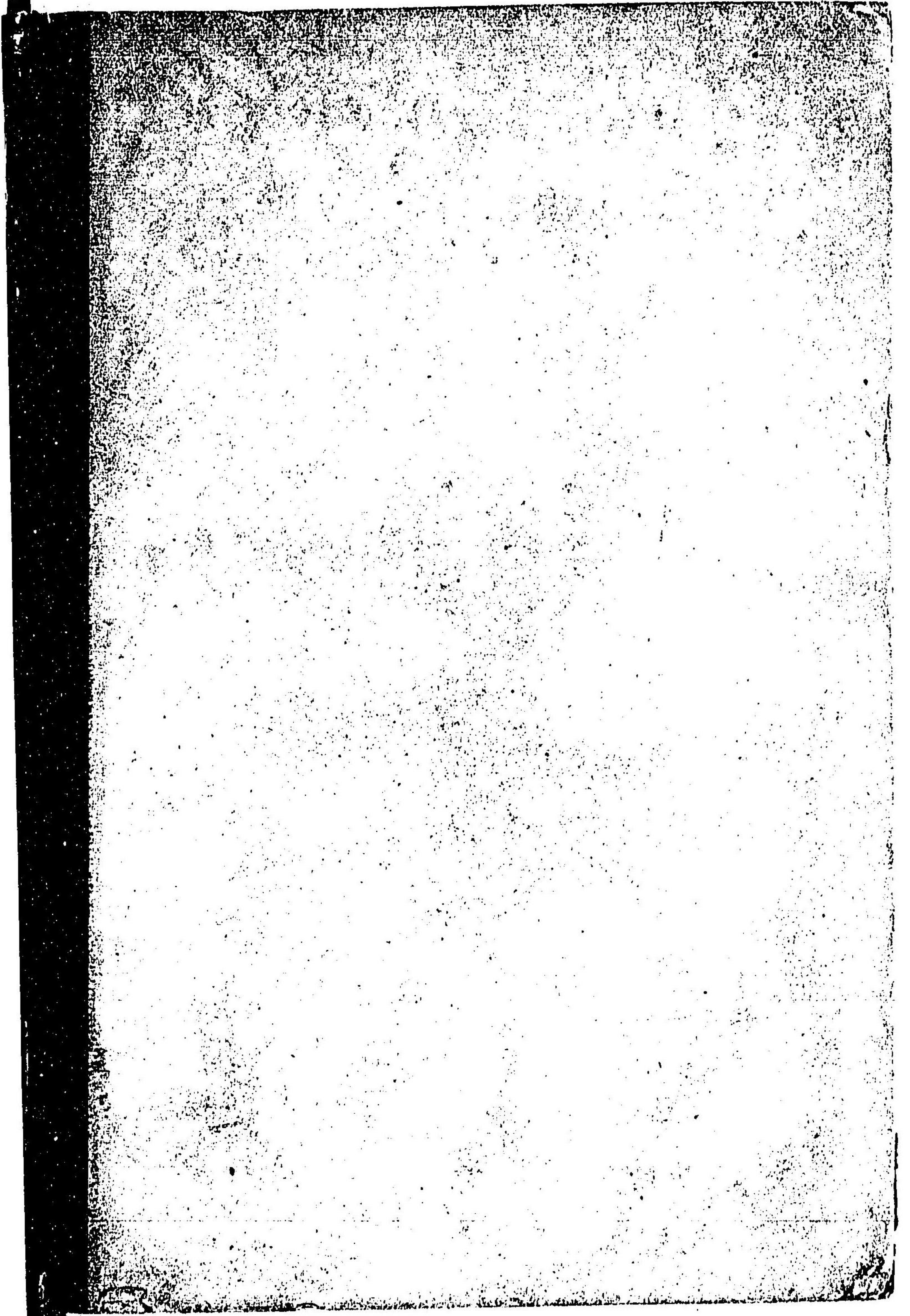
發兌人

大坂府平民 岡本 仙助

東區唐物町四丁目十番地







增補明治太平記

091470-000-0

特10-688

明治太平記

福井 淳/編

M20

DBN-2390

